私の處へ來た。二人は隨分活氣づいて話し合つてゐた。今問題を想ひ出すことは出來ないが、それは甚だ重大な抽象的な題目であつたと覺えてゐる。フヨードル・ミハイロウイチは非常に興奮して、部屋の中を歩き廻つてゐた。私は机に向つてゐた。彼は何んだか高遠な歡ばしいことを云つてゐた。そして私が彼の思想に何だつたか註を加へて確認した時、彼はその興奮が極度に達したといふやうな靈感的な顏を私の方へ向けた。彼は一瞬間立ち止つて、自分の思想のために言葉を探してゐるかのやうであつたが、既に口は開かれた。私は彼が何か非凡なことをいふに違ひない、或る種の啓示を耳にし得るのだと感じて、緊張した注意を以て彼を見詰めてゐた。すると俄に彼の開いた口の中から、妙な引伸ばした無意味な音が出て來た。と見る間に彼は室の眞中で感覺を失つたまゝ床上に倒れてしまつた。』

『此の瞬間急に顏、特にその眼付が大變歪んで來た』と、ドストエーフスキイ自ら『白痴』のうちに發作のことを描いてゐる。『痙攣と震動とが全身と顏の諸相を支配した。怖ろしい、名狀し難い、何とも譬へやうのない悲鳴が胸底から吐き出される。此の悲鳴の中では人間的な一切のものが急に消滅するであらう。そしてこれが矢張り同樣の人間の叫びであるとは、傍で見てゐる者にも如何しても思はれない、認められない。少くともさう思ひ、さう認めることは甚だ困難であ

る。何だか此の人間の內部に何か他のものが潛んでゐて叫ぶのではないかとさへ思はれる。少なくとも大概の人はかう言つてその印象を說明してゐた。誠に癇癲發作中の人の容體は多くの人人に、銳い、堪え難い、何となく神秘的なあるものを藏してゐる凄味を惹起せしめるものである。』

古人は此の癲癇を稱して「神聖なる病氣」と云つた。東洋の諸民族は、ドストエーフスキイの言ふたやうに、此の病氣のうちに『神秘的な』、預言又は透視の力と結びついてゐる、神的な又は惡魔的なものを見て居つた。大きな宗教運動の歷史に於いても、吾々は時として此のあまり研究されてない、少くともあまり說明されてない病氣に逢着するのである。殊に宗教運動の初期に於いて、その最も暗い地下の源原に於いて之を見るのである。ドストエーフスキイはその傑作中の一なる『惡魔』に於いて幾度か思ひを凝らしては、かの有名なる癲癇病者マホメットの水甕の傳說に立ち歸つて居る。それは此の豫言者がアルラフの馬に乘つて天國と地獄を駈け廻る間、水甕の水が少しもこぼれなかつたといふのである。ストラーホフの話のうちにも、或る『高遠な且歡ばしい』殆んど宗教的な一種の『啓示』とも云ふべきものが認められることは注目に價する。ドストエーフスキイは詰りそれが爲めに言葉を求めて而も得なかつたのである。そして其の直後に於いて發作を起したのである。

何れにせよ、此の『神聖な病氣』は、啻に彼の肉體的生活にばかりでなく、その精神的生活にも、又彼の藝術的創作や抽象的な哲學的思想にまでも驚くべき作用を呈してゐる。彼はその作品に於いて此の病氣に言及すると、特に息のつまるやうな興奮をしてゐる。謂はゞ神秘的な恐怖に捕はれてゐる。彼の取扱つた主人公のうちでも最も顯著な、そして互ひに對立してゐる人物で、私生兒スメルヂヤコフも、『神聖なる』公爵ムイシキンも、「人神」の預言者で虛無主義者のキリロフも、皆癲癇病者であつた。癲癇の發作はドストエーフスキイにとつては恐るべき崩穴であり、明り取であり、又彼方の世界を望むべく俄に開かれた窓であつた。『それから急に何物かゞ眼の前で二つに裂けたやうな氣がした。すると常ならぬ內部的の光明が彼の心を照した。』と、彼はその作中の一箇所に於いて語つて居る。又ストラーホフも思ひ出を記してから言つて居る。『何回かフヨードル・ミハイロウイチから聽いたことであるが、彼が發作を起す前にはいつも恍惚狀態の數分間があるといふ。』『彼はかう言つてゐた。私は數分間、普通の狀態では迚も在り得ないやうな、また他の人々に話しても理解出來ないやうな幸福を經驗する。私は自己のうちに又全世界のうちに完全なる調和を感ずる。而もその感じが實に强く實に心地よいので、此のやうな法悅の數秒のためには人生の十ヶ年を、いや全生涯を投げ出しても惜しくない。』然し發作の後には『その

精神狀態が非常に重苦しかつた。彼は己が憂愁と敏感性とを何うすることも出來ない位であつた。彼の言によると、此の憂鬱の特質は、彼が自分を或る犯罪者と感じ、わけの解らない罪惡と大きな犯罪が自分の身の上に懸つてゐるやうに思はれる所に在つた』と。

大なる神聖と大なる罪惡、此の世ならざる歡喜と此の世ならざる悲哀——此の兩種の感情は、『マホメットの水甕』がこぼれきらぬ最後の『四分の一秒間』に、また「憑かれた人」の胸から、その人の聲ではなくて、その人の內部に潛んでゐる人間ならぬ或るものゝ聲としか思はれない凄まじい悲鳴が迸る最後の『四分の一秒間』に、偶發的な、電光のやうに眩惑する一刹那に於いて、急に結合し、急に和解するのである。

吾々は此處で、ドストエーフスキイの本質、彼の肉體的精神的組織中の最も奧深い原始的な不可解な點に觸れて居るのではないだらうか？手懸りの糸は殘らず皆この結び目に於いて會合して居るのではないだらうか？そして、此の發作こそ、即ち吾々の研究の及ばない所の、然し吾々凡ての者のうちに默し難く蓄積されて何をか待ちつゝある力の急激に爆發し出したこの嵐こそ、ドストエーフスキイの肉體的被覆を、即ち血と肉とより成れる彼の心靈の纏衣を、他の人々に於けるよりも一層纖細に、一層透明ならしめたものである。だから彼はそれを通して、人々のうちの

誰も嘗つて見たことのないものを見たのではなからうか？

こゝで再びレ・トルストイとの比較がおのづから現はれて來る。即ちドストエーフスキイの『神聖なる』又惡魔的なる病氣、それは恐らく肉體上の貧弱と缺點ではなくて、寧ろ反對に生活力の累積せる雷雨的の過剩であり、極點まで達したる精神力の洗鍊と尖鋭と集中である——此のドストエーフスキイの病氣は、レ・トルストイの同じく神聖なる又惡魔的なる肉慾と精力と健康との過剩と對照すべきものである。つまりドストエーフスキイと同樣な、同じ程度に雷雨的な又酒宴的なものではあるが、たゞ別樣に表現し、別樣に爆發したるトルストイの生活力の過剩と比すべきものである。レ・トルストイがその假面的な、僞基督教的な、而も眞實なる、異教的の宗教心を、此の肉慾と此の神的獸性の深い神秘の奥底から汲出したことに就いては後章に讓ることにしよう。私が茲で獸性に冠するに神的と言ふ語を以てしたのは、人間の動物性も一定の宗教的見地から見れば、靈性と同程度に神聖なもので、その根源を天上に有するものであること、從つて肉と靈とはたゞその見ゆる所、表はれ方に於いて相反してゐるだけで、その最後の此の世ならざる本質に於いては兩者唯一であるといふことを表明せんがためである。一體現代の殆んど凡ての人人は、剩へ宗教心を離れた者さへもが、僞基督教、もつと適切に言へばボーロ派の固陋なる惡習

慣のために、兎角靈的な抽象的な理性的な、肉的でない血的でないものを尊んで、肉的なものをば何だか下劣な、罪深い、若しくは少なくとも粗野な恥づべき獸的なものゝ如くに卑む傾向がある。けれども宗教的觀照の深みは結合的な、象徴的な（再び繰返して言ふ——象徴、σύμβολον とは合一といふ意味である）もので、肉もそれから見れば靈と同程度に神聖なものである。また暗い下等なものゝやうに思はるゝ獸性の深淵もそれから見れば、明るい高尚なものゝやうに思はるゝ靈性の深淵に等しきものとなつてしまふ。それは恰も夜の半球が晝の半球に等しいのと同樣である。レ・トルストイは思想家並に藝術家として此の獸性の深淵に沒頭し、その最後の限界に於いて他の本源を見出した。どこまでも彼に反對する所の、まるで彼を否定してしまふやうな他の本源を見出した。即ち動物的個性の恐るべき破滅と死を意識したのである。此處に彼の悲劇が始まるのである、此處に始めて『冷たい白光』が煌くのである。彼は此の光を新なる基督教的の『復活』の光と見、アンドレイ公爵はアウステルリツの戰鬪の前夜此の光に驚歎するのである。

『而して、此の觀念即ち死に就いての觀念の頂點から見ると、從來彼を苦しめ、彼の心を支配してゐたものは皆急に陰影もなく、遠近もなく、又輪廓の差別もなく、たゞ一樣の冷たい白光に包まれてしまつた。全生活が彼に幻燈のやうに見えて來た。彼は長い間そのレンズを透して而も

人工的の光の下に觀て來たのであつた。が今や彼は俄にレンズ無しに煌々たる白日の下にその拙劣に畫かれた繪を見出したのである。「さうだ、さうだ、私を動かし、喜ばし、且苦しめてゐた虚僞の姿はこれだ。」と、獨語しながら、彼はその想像の中で主なる己が生活の幻燈畫を整理して、今は眞畫の冷たい白光の下に――即ち死に就いての明らかなる思想の下にそれ等を眺めるのであつた。「これは皆恐ろしく單純な厭はしいものばかりだ！」』

かくて、トルストイのために死の光は外部から生活を照して、其の生活の色彩をも形態をも破壞し、かき消して居る。所がドストエーフスキイのためには内部から照して居る。死の光も生の光も彼に取つては現象の『幻燈』の内部に點けられた唯一の炎である。トルストイにとつては生活の全宗教的意義は、生より死への移動に存してゐる。即ち他の世界に存してゐる。ドストエーフスキイに取つては、そんな移動は殆んど皆無である。彼は生きながらにして、常に死んでゐるやうに見える。「不斷に口を開いてゐる穴や、明り取や、『神聖なる病氣』の發作などが、彼の動物的生活の織物をます〳〵薄くし、透明にした。そしてそれを珍らしい透き通るやうな、到る處に内部的の光を發するやうものにした。トルストイにとつて、死の秘密は生の彼方にあるが、ドストエーフスキイにとつては生そのものが死と同樣に秘密である。彼にとつては平日のペテルブル

グの朝の冷たい光は同時に怖ろしい『死の白い光』でもあるのだ。トルストイにとつてはたゞ何處までも生と死との拮抗があり、ドストエーフスキイに取つてはたゞ兩者の永劫の一致がある。トルストイは生活の内部から現實の眼を以て死を觀察し、ドストエーフスキイは、生者には死と見ゆるやうな立場から靈界の眼を以て生を觀てゐる。

兩者の中果して孰れが眞理に近いか？此の二人の生活のうち果して孰れがヨリ美しい生活であらうか？

私は此の研究の第一章からして讀者が私に疑ひをかけるだらうと意識して居る。即ち私はドストエーフスキイに左袒して、レ・トルストイに對しては偏見を持してゐると、疑ふ人があるだらう。事實私は、レ・トルストイ流の基督教と、現代歐羅巴の餘りに偏狹な、專ら禁欲主義的に、そして理智的に解釋されてゐる一般基督教とが、反對の方向へ向つて餘りに引絞つてゐる弓を、再び曲げ直さうとしたばかりである。然しながら若し私が偏頗で且公正を缺いてゐるやうなことでもあるならば、それは最初から故意にしたものである。私は勿論研究を此の程度に止めようとは思はない。私は兩作家の藝術的、哲學的、宗教的創作に沈潛して、もつと〳〵研究の歩を進めようと思ふ。これまでの所は、私は基督教的見地若しくは現代人が稱して基督教といふものを汲み

出す所の所謂基督教的見地から、人としての彼等を比較して來た。だが、若し私が反對の立場——異教的又は異教と思はれてゐるものの立場から、此等兩人の生活を比較するならば、永久の清新さと堅實さと盡きない地的の現實的歡喜を有するトルストイの生活が、ドストエーフスキイのそれよりも一層完全で美しいと結論しなければならなかつたであらう。更にまた此の宗教的兩極端を結合する第三のまた最後の象徴的見地より見るならば、レ・トルストイの生活とドストエーフスキイの生活とは、それ〴〵對立的に、そして不完全に美しいものであるとは言へ、同じやうに不完全に見えはしないか。何故といふに、彼等は二人ながらロシヤ文化に於いて既にプーシキンによつて豫象された調和の程度を缺いてゐるからで、即ちトルストイに在つては靈よりも肉の過重なるがため、ドストエーフスキイに在つては肉よりも靈の過重なるがためである。が、それにも拘はらず、彼等が等しく偉大にして且ロシヤ的なる生活は、互に相完成し補足し、互に一は他に取つて缺くべからざるものとなつてゐる二人の生活は、まるで預言的對照と比較とのために態々造られたかの觀がある。

それは恰度或る一點から別々な方向へ出發して、未だ結びつきはしないが、やがて結びつくこともを出來るし、又結びつかねばならぬ二つの線の如きものである。故に吾々は今や此の二つの線

が再び他の側の第二の高い點に相會して一周圓を形作るものであることを知つて居る。それはある時期までは互に相背馳するやうに見えながら、その實最早今では聲を一にして叫んでゐる二つの預言である。即ち未だ何とも知られない、併しながら吾々の既に豫覺してゐる所の、それは恰度トルストイやドストエーフスキイを生み出したプーシキンの如く根原的で且國民的な、同時に亦ヨリ多く意識的な、從つて世界的な、第二の、最終の、統一的な、象徴的なプーシキンの出現を預言して居るのである。それはまだ離れ〴〵になつてゐて結合してゐない殿堂の前廊なる二本の大きな柱である。それは既に始められたが、然しその完成は何時とも見當のつかない一つの建物の互に向ひ合ひ互に反對し合つた二つの部分である。而してこの建物とは外でもない、ロシヤの、同時に全世界の宗教的文化の建設である。

第七章

プーシキンが此の世を去つた時、ドストエーフスキイは十六歳であつた。

彼の兄弟アンドレイ・ミハイロウイチは次のやうな想出を語つて居る。『プーシキンの死去の知らせが母の葬式の後になつて吾々の家に屆いたのは如何云ふ原因によつたものであるか分らない。多分吾々自身の悲哀と、家族一同全く他所に出なかつたのが、その原因であつた。が、兄弟達はプーシキンの死とそれに伴ふ細かな事情とを聞いて、殆ど發狂せんばかりになつたことを私は覺えてゐる。その中でもフョードルの如きは兄との談話中に、若しこちらに家族の不幸がなかつたら、父の許可を乞ふてプーシキンの喪に服するんだがと、幾度も〳〵繰返してゐた。』

斯くドストエーフスキイに在りては、母の死もプーシキンの逝去に對する悲哀を打消すことが出來なかつた。たとへ彼は十六歳位で、未だ後日六十歳頃のやうにはつきり自分とプーシキンとの生きた因緣を意識してゐなかつたとはいへ、最早それを感じてゐたのである。而して彼は曾に其人を偉大なる師として崇敬してゐたばかりでなく、最も近しい親類として愛してゐた。

同じ年頃に於いてレ・トルストイにとつては、『青年』のうちに自白してゐる通り、プーシキンもその他のロシヤ作家等も、『彼が子供として讀み且學んだ所の黄表紙の小冊子』に過ぎなかつた。彼は當時の己が低級な趣味を、その同僚なるモスクワ大學の學生等の趣味と比較して、羞恥を感じながらかう云つて居る。「プーシキンとジュコーフスキイとは彼等に取つての文學であつた。彼等はデューマやシューやフェーバルなどを一様に輕んじ、そして私よりは遙かに良く且明瞭に文學を判斷してゐた。』『その頃「モント・クリスト」だの、其の他様々の「探偵小説」だのが現はれ始めてゐたので、私はデューマやシューやポール・デ・コックの小説を貪るやうに耽讀してゐた。最も不自然な人物や事件も悉く私のためには現實的なことと同様に活々してゐた。私は作者が虚僞を吐いてゐるなどとは疑つても見なかつた。さうした小説を土台として、私は道德的價値の新理想をさへ築き上げ、それに到達しようと冀つた。私は以前にもかうした傾向を持つてゐたが、自分の凡ての行爲と態度に於いては……出來るだけ Comme il faut（方正）に生活しようとした。私は風采や習癖などに於てすら、是等小説中の主人公に模倣しようと努めた。』

レ・トルストイとドストエーフスキイとの藝術的教養は實に此の通りである。云ふまでもなくドストエーフスキイは既に十六歳にして、デューマやポール・デ・コックなどの粗野俗惡なことを理

解した。彼が文學上の趣味と判斷とは、子供としては驚く程緻密で、成熟してゐた。彼にはロシヤ文學も西歐文學も同樣に解つた。彼が工兵學校から出した幾分調子づいた青年らしい書翰の一つに於いて、彼はその兄弟にかう傳へて居る。『吾々はホーマア、シェクスピア、シルラア、ホフマンに就いて語り合つた。』『私はシルラアを暗記してゐて、之を語り、之に夢中になつた。』『シルラアの名は私に取つて親近なものとなつた』と。然しながら彼は、當時のロマンチシズムやゴチツクにのぼせてゐたロシヤ青年に比較的解り易かつたシェクスピアやシルラアばかりでなく、後年ベリンスキイが極めて皮層的な批評を加へた、十七世紀の偉大なる佛蘭西古典派作家ラシーヌやコルネーユをも評價する力があつた。ドストエーフスキイは、當時獨逸の批評家等に動かされたロシヤ青年の流行を追ふて、所謂「僞古典文學」に對する衒學的な侮蔑的な態度を執るやうなことはなかつた。佛蘭西古典派作家等の內面的制約と模倣性とを認めながら、此の『敬虔なモスクワの家庭』から出たロシヤ少年が、病院附軍醫の子が、ルイ十四世の宮廷詩人の外面的形式の調和と完全とに狂喜する所に、最も遠い外國文化に對する彼の深甚なる感受性が現はれてゐる。『あ、フヨードルか、兄弟！若しこれが高尙な純潔な自然でなく、詩でないと言つたら、どうなるだらう、お前は知るまい。だがこれはシェクスピアのスケツチではないか。大理石でないにしても、石膏の

立像だよ。』思ふに「フヨードル」に就いて、ロシヤ文學を通じてこれ以上簡約にして的中した批判は無いであらう。また他の手紙に於て彼は、兄弟の攻擊に對しコルネーユを辯護してゐる。『お前は「ラ・シツド」を讀んだか？それを讀め、お前は憐れな人間だ、それを讀んでコルネーユの前に跪拜するがよい。』

若しその幼時から旣に顯はれ、更に後年ベリンスキイから宗敎に就いて輕々しい言葉を聞かされて、それがために生涯彼を恨むに至つた所の、ドストエーフスキイの深い宗敎心を念頭に措いて見るならば、次に示すやうな基督とホーマアとの比較論の如きは、その無邪氣さと感激とに拘らず、極めて意義あるものと見られるであらう。『ホーマア（傳說中の人物であつて、或は基督の如く神の化身として此の世に遣はされたのかも知れない。）は基督に比すべきもので、ゲーテと比較すべきではない。兄弟！彼を深く研究せよ。イリアツドをよく讀んで、之を了解せよ。（お前はまだ讀んだことはあるまい、白狀してしまへ。）ホーマアはイリアツドに於いて、舊世界に精神的生活と地上生活との體制を與へたが、その力は全く基督が新世界に與へた所のそれと同程度である。さあこれで解つたか？』

ドストエーフスキイは、その生涯を通じて、世界的文化——彼の言葉を以てすれば『全人類的』

文化に對する此の感覺を失はなかつた、何所でも到る處わが家のやうに感ずる能力を失はなかつた、あらゆる時代あらゆる國民の內面的精神的生活に順應する能力を失はなかつた。この能力をドストエーフスキイはプーシキンに關する演說に於いて表明した通り、プーシキン及び一般ロシヤ天才の、殊に他の歐洲諸民族の天才と比して全世界的なるロシヤ天才の主要なる特性と認めてゐた。

彼は一八六三年の夏、第一回の外遊に際して、ストラーホフに次のやうな手紙を寄せた。『ローマから手紙を書くなんて奇緣でせう。しかしローマに就いては一言も言ひません。が、あなたに何を書いだらいゝでせう。あゝ、手紙では迚も書き盡せるものでない。私は一昨日の夜半に此處へ着き、昨朝セント・ピーター寺院を見物した。ニコライ・ニコラーエウィチよ、その印象は實に力强いもので、思はず背中に寒氣を覺えた。今日はフォラムとその廢虛を殘らず見物して、それからコリゼイ（古代羅馬の大演技場）へ來た。さて、何をあなたに話したらいゝでせう?』

その後、歐羅巴は彼にとつては『神聖にして怖るべき』ものであるといひ、彼には『ロシヤと歐羅巴と——二つの故鄕がある』といひ、また『ベニス、ローマ、パリ、及びそれ等の科學と藝術の寶物、並にその歷史の全部が彼にとつては時としてロシヤ以上に好ましく思はれる』など言ふ

たのも無理からぬことである。此の意味に於いて、ドストエーフスキイはプーシキン以後のロシヤ文學者中、最もロシヤ的な作家であると共に、ロシヤの歐羅巴人中で最大の歐羅巴人である。彼は其の身を以て、ロシヤ人たることは、最高の程度に於いて歐羅巴人たること、世界人たることを意味するといふことを示したのである。

レ・トルストイは藝術家として身自ら世界的價値を持ちながら、またロシヤ人として他の特性、即ち國民的要素の莫大なる力を領しながら、それでゐてドストエーフスキイに取つてはロシヤ國民の特性と思はれた世界的文化に對する能力を缺いて居る。トルストイは理智的な、似而非基督教的な世界主義者であるに拘らず、その創作に於て時所の制約、その國民性や年代の制限に拘束せらるゝことレ・トルストイの如きは、數あるロシヤ作家のうち他に之を見ない。凡そロシヤ的でないもの、現代的でないものは、彼に取つて憎らしかつたといふのではないが、たゞ單に疎遠な、不可解な、何の興味もないものであつた。かの歷史小說『戰爭と平和』の作者は、恐らく智力では一部分歷史といふものを知つて居たであらう。けれども感情では嘗て歷史といふものを感得したことがなかつた。嘗て他の時代及び國民の內的な精神生活に立入つたことはなかつた。いや立入らうと努力しなかつた。さうすることに彼は何等の意義を認めなかつた。彼にとつては「遠

い時代に對する憧憬」即ち歴史研究の靈感的な感情も、過去に對する潑溂たる悲憤も、潑溂たる歡喜も存在して居なかつた。彼は全身、その深い根に、現在に、現代のロシヤの實生活に、ロシヤの勞働民衆に、ロシヤの貴族に固く執着してゐる。レ・トルストイがその青年時代に於いて伊太利に遊んだことは吾々の知る所である。けれども彼は其處から何等の印象も受けなかつた。若し吾々が其の傳記に依つて確實に、彼のアルプス越えを知つて居るのでなかつたなら、吾々は其の事實の有無を疑つたかも知れないのである。『神聖なる奇跡の斷片』も彼には何等の興奮も喚び起さなかつた。『舊い珍奇な石』も彼にとつては只死物に過ぎなかつた。假に彼が浮々した心を以て、時代後れのロシヤ虚無主義者ウ・スタソフと同じく、ミケル・アンジェロの『最後の審判』の前へ近寄つて、之を『下らない』作品だと名づくることがあつたとしても、それは彼自身の記憶を辿つて言ふのでなく、偶然に見られたある寫眞について言ふのであらう。

あらゆる文化に於いては條件的に見えても實際には一定しない歴史的見地から見て、自然そのものと等しく自然的なものも、レ・トルストイにとつては常に技巧的な、從つて虚僞なものと思はれる。凡ての「條件的」なるものに對する過度の恐怖は、遂に彼をして凡ての文明に對する恐怖を抱かしむるに至つた。故に散文は彼にとつては韻文よりも一層自然なものに思はれる。そし

て、レ・トルストイは、韻文が最も原始的であること、又人々が最も情熱的な即ち最も自然的な心的狀態に在る時、小兒や原始人と同じく、その感情を詩歌で表現する傾向を持つといふことには思ひ到らないで、總ての詩的作品は條件的である、從つて虚僞であると頭から決めこんでゐる。まだ青年時代の頃から、彼はロシヤ文學の多くの傑作が單に韻文で書かれてあるといふ理由の下に、それ等を嘲笑して止まなかつた。『と、獨逸のあるトルストイ傳の著者が書いて居る。典雅な形式は彼の眼には何等の價値も無かつた。何となれば、彼が常に忠實に固持してゐた意見によると、斯かる形式は只思想を束縛するに止まるからである。』

レ・トルストイの後年の著作の一つで、其の一生中の藝術的判斷と思想とを總括した一大論文『藝術とは何ぞや』ぐらゐ彼が世界的文化に對する感受性の缺如を明らかに曝露したものはない。

新らしい、所謂『デカダン』の傾向に就いては、彼自ら緘默の約束をして置きながら、それを守らない。『今世紀の前半期に養育された人間として自分は新藝術を解しないが故に、之を批難することも出來ない、またそんな權利もない。私は只、其の藝術は解らないと言ひ得るのみである。』しかし、私の是認してゐる藝術は、デカダン派の藝術に比して優れた唯一の長所がある。

それは私の承認してゐる藝術が新藝術よりも多數の人々に解るといふ點に在る。』と云つて居る。所が彼はその無理解の承認を以て滿足することが出來ず、手當り次第に批評し非難して、ベックリン、クリンゲル、イブセン、ボードレール、ニーチェ、ワグネル等如何なる者をもそれを一括して論じ去つて居る。メーテルリングとハウプトマンの神秘劇に就いてはかう言つて居る。それは海邊に坐して何のためか同じことを繰返してゐる盲人達か、さもなければ湖水の中に墜ちて猶そのまゝ鳴り續けてゐる鐘であると。ニーチェの如きも彼にとつては、最も無關心なロシヤ新聞記者の考へと同じく、半狂人としか思はれなかつた。

斯く今世紀の前半期に教育された人であつて見れば、少なくとも、過去世紀のデカダン的でない藝術家と詩人とは特に貴く特によく解らなければならぬ筈である。所が彼は疑ひの餘地なき古人の大作を現代の疑はしいものよりも一層苛酷に扱き下して居る。『例へば、ゲーテの『フアウスト』の如き、先蹤を追ふて作られた作品は、如何に立派に仕上げられ、智力に富み、あらゆる美の極致を具有するとしても、其の作は藝術的作品の主要なる特性、即ち完全と有機的統一とを缺いてゐるが故に、眞の藝術的印象を與へ得ないであらう。』と彼は確信して居る。

『かゝる作品が單に詩的なるが故に立派なものであるといふのは、恰かも一の貨幣を見て眞の貨

幣に酷似せるの故を以て、これは美しいと言ふのと一般である。』（一五卷一二四頁）彼から見れば『フアウスト』は一の贋造貨幣である、何となれば此の作品はあまりに文化的であり技巧的であるから。また彼はボツカチオの戀愛小說の如きは、之を別な禁慾的、基督教的立場から見て、『性的放恣の戲作』と爲した。更にエスキルやソフオクルやエウリピドやダンテやシエクスピアの作品、ワグネルの音樂、ベートーベンの後期の音樂などをも、彼は最初『理智の勝つた空想の作』と云つてゐたが、次には『粗笨で野蠻で往々無意味に墮したもの』と叫んで居る（一五卷一三六—一三七頁）『ハムレツト』の上演を見て彼は『不純な作物の與ふる一種特別な苦痛』を味はつた。而もそれと同時にウオグール人の演ずる或る獵人劇の記事を見て、『これこそ眞の藝術の所產である。』と結論してゐる。（一五卷一六七—一六八）

斯かる露骨な誹謗は（『ロシヤの蠻風』とも思はれ得るが、その實現代の民主的な、似而非基督教的な趣味の退化に伴ふ一般歐羅巴的蠻風である）かのエギイナの大理石像を粉碎して、モナ・リザの肖像畫を減茶々々に引裂いた蠻人カリバンの橫暴が與へたやうな印象を西歐文化の教養ある人々に對して與へずには置かない。

然し、惡魔は、その描かれてゐるほどに恐ろしくはない。エスキルやダンテに對して手をふり

揚げ、プーシキンをも『黄表紙の』教科書か、「無作法な戀の詩を書いた」道樂者ぐらゐに思ひ込んでゐる此のヘロストラトは、無邪氣にもベルホルド・アウエルバッハや、エリオットや、『トム叔父さんの小舍』の前に頭を垂れて居る。結局、彼が非とするものよりも、寧ろ彼が是とするものに依つて、吾々はレ・トルストイが無關心な藝術の範圍に就いて下す意識的判斷に於いては、晩年に至るも、猶彼がフェーバルやデユーマやポール・オ・コツクなどを耽讀してゐた少年時代から遠く離れてゐないことを信ずるものである。そして、かの恐ろしいカリバンの假面の蔭から、六十年代のロシヤの民主的な地主であり實證主義的な貴族である人のあまりに見慣れた怖くもない素顔がのぞいてゐることは、寧ろ悲慘の至りである。

更に驚くべきは、レ・トルストイが彼自身の作品に對して抱いてゐる文化的意識の賴りなさである。

『私は虛榮と、利己と、傲慢の心から著作を始めた。』と、彼は『懺悔』に於いて切言して居る。『私は、藝術家たり詩人たる私は、自身の知らないことを書いたり教へたりした。私はそれによつて金錢を獲、立派な食物と住所と社交とを營み、その上名譽をも得た。これを以て見れば、私の教へたことは甚だ善い事であつたに違ひない。』『吾々の僞らざる信實の考慮といふものは、出

來るだけ多くの金錢と稱讃とを得たいといふことであつた。此の目的を達成するためには、本を著はしたり新聞に書いたりする外に何等の道もなかつた。で、吾々は之を行つた。』彼は八十年代の宗教的轉機を經た後に於いてかうした追懷を述べてゐる。『以前私が全力を注いでゐた所謂藝術的活動も、今は啻に當時附してゐたやうな價値を失つたばかりでなく、それが私の生活に於て不當な地位を占めてゐたし、今も富裕な人々の腦裏に於いて不當な地位を占めてゐるが故に、私にとつては眞個不愉快なものとなつて仕舞つた』と。ベルスの證する所によると、レ・トルストイは今の『基督教的』見地から、『以前の創作は皆、戀愛をば性的衝動及び性的强迫の意味で描寫してゐるから、有害なものである』としたさうであるが、此の斷定はレ・トルストイの藝術に關する他の斷定と正則的に論理的に全然一致してゐるから、一層信ずるに足るものである。彼自身も其の晩年、自分の藝術的活動の總勘定をした時、彼特有の意識的眞實と無意識的虛僞との混淆を以て次の樣な斷案を下してゐる。『私は自分の藝術的作品中で、『神は眞實を見給ふ』と『カフカズの囚人』の二つを除く外は、悉く駄作の部類に入れてゐるといふことを特に注意して置かねばならぬ』と。所が此の二小說は申合せたやうに至つて薄弱な教訓小說である。啻に晩年に於いてばかりでなく、即ち、その創作力の比較的減退した時代ばかりでなく、ずつと以前、創作力の最高潮の

頃に於いても、彼は自分の作品に對して恰度今と同じやうな考へを持つてゐた、少くとも持たうとしてゐた、此の考へを自分にも他人にも持たせようと希望してゐた。『私はまた此の退屈な平凡なアンナ・カレニナに筆を執つた。これといふのも早くこんな仕事を濟まして他の仕事に取り掛りたいといふ一念であるためである。』と、彼は一八七五年フェートに書き送つてゐる。

本當に彼は『アンナ・カレニナ』を『退屈な平凡な』ものと思つてゐたであらうか？本當に彼はそれを書いてゐる時でさへ之を愛してゐなかつたらうか？よし愛してゐたにしても、それは兎に角無意識的な愛を以てゞある。いやそれが意識的であつたにしても、例へばゲーテがその『ファウスト』を愛し、プーシキンが『エウゲーニイ・オネーギン』を愛してゐたやうな意識的愛ではなかつた。

レ・トルストイとドストエフスキイとの主要なる差異の一つは亦、此の文化的意識の程度に存するのである。レ・トルストイは成程偉大なる作家ではあつた。けれども、決してプーシキンやゲーテやドストエーフスキイなどゝ同じ意味に於いて偉大なる『文學者』ではなかつた。彼等は自ら言葉の支配者であると共に、亦その勞働者であると考へてゐたのである。彼等に取つて言葉は啻に精神上の食物であるばかりでなく、亦日日の麵包であつた。私が此處に一つの概念として用ふる所の『文學』とは、それが何程自然的であつても、決して詩の本質的創造以上に技巧的な、條件的なものをいふのではない。たゞそれ以上に意識的なものをいふのである。恰度それは一般に文化なるものが人間意識の世界に於いて人間以上の自然に矛盾するものではなくて、たゞ之を繼續する所のものであるのと同じことである。で、此の終局の一致する見地からすれば、文化と自然とは一である。從つて文化の法則に逆ふものは人間の本性に逆ひ、最も神聖にして最も永久的なる自然力に逆らふものである。

レ・トルストイが自己の藝術的活動を輕蔑する裏には、彼自身にすらハツキリと解つてゐないらしい曖昧な複雜な或るものがある。少なくとも彼の文學上の自愛心のうちには、甚だ奇怪なる動搖と不徹底とが存してゐる。『世に私程自分の成功に無頓着な作家は無い。』と、彼は或る時フェートに言つたことがある。けれども、彼は『戰爭と平和』の公にされた後、同じフェートに向つて、感動すべき卒直さを以つてかう賴んで居る。『君の知合の間では、あれに就いて何んな評判をしてゐるか知らせて貰ひたい。殊に肝心なのは群集の上に何んな影響があるかといふことである。大方人の注意も惹かずに濟んでしまふであらう。私はそれを覺悟してゐる。寧ろそれを願つてゐる。が、罵詈は受けたくない。でないと、罵詈によつて心を亂されるから』と。彼自身

の言葉によつて見ると、(少なくとも彼の最も虚心な最も誠實な傳記作者の一人が主張するが如く、)彼のうちには常に『自分は作家である　貴族であるといふ愉快な意識』が在してゐた。茲に「作家」といふのは、それは昔の人達が言つてゐた通り、『自由な藝術家』の意味であつて、決してプーシキンやゲーテなどゝ同じ意味の『文學者　ではない。』レ・トルストイは其の全生涯を通じて、文學を屑しとしなかつた。そして民衆的な意識的な見地と、そして貴族的な無意識的な見地とから、文學を凡庸な、卑俗な、下品な、穢れたものゝ様に蔑視してゐた。然し此の慚愧と侮蔑とのうちには、此の天才の大びらな貴族主義が表明されてゐるといふよりは寧ろ細心な、然し拙劣に隱蔽された、そして外見以上に奥深く彼の心に根ざして居る、階級的な貴族主義が現はれてゐるのではあるまいか、――そこに自らを否定し、自らを愧づる所の、然し兎に角時あつて外部へ曝露する殿様氣質が現はれてゐるのではあるまいか。』

ストラーホフの言ふ所によれば、『ドストエーフスキイは文學を愛してゐた。彼はその凡ての要件と共に、文學をあるがまゝに受け入れてゐた。そして決して文學を等閑に附したり、之を眼下に看下したりするやうなことは無かつた。かく文學上の貴族主義が全然彼に缺如してゐたことは、彼の麗はしい、寧ろ感嘆に價する特質であつた。』ロシヤ文學はフョードル・ミハイロウイチの

生ひ立つた地盤であつた。彼は決して其處から離れなかつた。それに對しては骨肉のやうな愛と恭謙の心とを懷いてゐた。公衆と文壇との中へ打つて出るのは、バザーへ、廣場へ出るのと同じく、少しも自分の職業を、自分の同業者を恥づることはない、といふことを彼はよく知り拔いてゐた。それ所か、彼は却つて此の仕事を矜りとし、これを偉大なる神聖なるものと認めてゐた。

昔の貴族的の六ケ數い人々が、筋肉勞働によつて日用の麵包を獲ることを自分にとつて賤しいことと思つてゐたやうに、恰度そのやうに、レ・トルストイは新しい、然し殆んど同じやうな高慢な不遜な世界觀の見地から、精神勞働に對して報酬を受くることを卑しむべきことゝ思つてゐる。困窮と勞働については小兒の如く無知であるがため、彼は、眞の藝術家が金錢のために創作し得るといふことを聞くと、見下げ果てたと云はんばかりに肩をすぼめるのである。

ドストエーフスキイは斯う云つて居る。『私は一年中唯の一度も前借をせずに原稿を賣つた事はない。私はプロレタリヤ文學者である。だから若し私の作物が欲しかつたら、先づ前以て私の生活を保障しなければ駄目である』と彼自ら言ふて居るやうに、『まるで身體中の皮膚を剝ぎ取られ、ちよつとした風も滲み通る。』といつたやうな矜りと自慢とを有し、レ・トルストイにも劣らぬ程藝術家の自由を尊んでゐる此の人にして、猶『金錢のために創作し』、普通の日雇人と同じく

その勞役の報酬を取ることを恥として居らないのである。彼は自ら己を名づけて『馬車馬』と稱して居る。彼は期日のためには二日二夜のうちに、印刷した紙數で三枚半づゝを書く。レフ・ニコラーエウイチから見たら屹度見下げ果てた『文學者共』の市場的破廉恥の骨頂だと思はれるやうな露骨さを以て、ドストエーフスキイはこんな告白をして居る。『小說の一章の始めは旣に印刷所へ廻つて、活字に組まれてゐるのに、その結末は未だ私の頭の中にこびり着いてゐて、而も翌日までには必ず渡さなければならぬやうなことが、私の文學的生活には隨分多い。』『窮乏のため、金錢のための勞働は私を壓迫し、私を蝕むのだ。』『私の貧苦は何時になつたら盡きるであらうか？あゝ、金が欲しい！』――これが彼の全生涯の絕えざる苦痛であつた、呻吟であつた。時としては貧困との奮鬪に憊れ果てゝ之を呪ふこともある。けれども之を恥づることは無い。彼は外面的羞恥の中に在つて、即ち現代のブルジョア社會に於ける精神的勞働者の境遇に固有なる外面的羞恥の中に在つて、一種特別な內面的の矜りを有つてゐる。ある時彼はさうした瞬間に、『私の名は百萬金にも償する。』と叫んだ位である。

彼は出獄後間もなく、基督教的啓蒙を體驗して居ながら、一見實に粗野にして且シニックな嫉妬の罪に陷つた。『私の文章はツルゲーニエフよりも拙いことを良く知つて居る。然し大して拙

いこともなからう。やがては全く劣らぬやうに書きたいと思つて居る。だが、私はこれ程困つてゐるのに僅か百「ルーブリ」を取り、ツルゲーニエフは二千人からの農奴を有ちながら四百「ルーブリ」づゝ取つてゐるのは何うしたものだ？私は貧乏して居ればこそ、餘儀なく急がねばならないのだ、金のために書かねばならないのだ、從つて當然拙いものにならざるを得ないのだ。』

更に追而書きに書いてある所に據ると、彼はカーツコフの許へ一枚百「ルーブリ」の割で十五枚、都合千五百「ルーブリ」分の原稿を送ることになつてゐた。『その內私は彼から五百「ルーブリ」受取り、それから更に小說の四分の三を送つて、旅行の費用に二百「ルーブリ」を乞ふた。で、總計七百「ルーブリ」受取つた譯だ。兎に角トゥウェーリへは一文無しで着くであらう。然しその代り何れ近いうちにカーツコフから七、八百「ルーブリ」受取れるだらう。これはもう何でもないことだ。それだけあれば歸ることが出來る。』といつた調子でまだ〳〵後があるが、何處まで行つても同樣である。一體ドストエーフスキイの手紙は皆、果てしなく數字と計算を並べ立てはその合間々々へ絕望的な救助の哀願、例へばある時兄弟に書いたやうに『後生だから助けて呉れ』といふやうな言葉を挿むでゐるだけである。謂はゞ連綿たる苦行誌のやうなもので、慥かに精神勞働の受難者に關する偉大な物語の一たるを失はない。

殊に彼が困つたのは、一八六五年から一八六九年に亘る四年間で、恐らくはかの懲役の四年間に優るとも劣らないものであつた。最初の災厄の前に於けると同じく、其時も始めの程は大層幸運が續いた。彼の發行してゐる『ヴレーミヤ』といふ雜誌は成功を歛めて、漸く一定の收入も上るやうになつた。それで彼は如何やら貧乏から脱し得ることゝ空想して居たが、此の時不意に謂はれもなき檢閲局の刑罰を課せられたのである。『ヴレーミヤ』はポーランド問題に關する一文のために發賣を禁止された。今度も亦ペトラシェーフスキイ事件の審問と同じやうな誤解が起つたのであつた。前には死刑の宣告と入獄とを以て、今度は破産を以て、殆んどドストエーフスキイを破滅せしめようとした此の兩度の誤解は特に注意すべきものがある。當局者は彼を以て自分達の同盟者とは認めなかつた。然しながら、それも或は全然誤解ばかりではなかつたらう。未來の『大審問官』の作者は、當時彼がさう見えたやうな、或はさう見えようと望んでゐたほど、信頼すべき同盟者ではないといふことを當局者に感づかれたのかも知れない。

ドストエーフスキはは別に落膽はしなかつた。そして『ヴレーミヤ』事變のあつた後直ちに『エポーハ』の刊行に着手した。然し最早曩のやうな成功は見られなかつた。幸福の短い時朋は去つて再び歸らなかつた。今度『エポーハ』に崇つたのは政府の檢閲局ではなく、之に劣らぬ苛酷な

ロシヤの「自由主義的」檢閲局であつた。此の檢閲局はロシヤに於ては政府の檢閲局と手を別つことのない伴侶であつて、政府の檢閲局の反對に立つてゐるとはいへ、それの最も慥かな最も忠實な、恰度水面又は鏡面に於けるが如き反映であつた、いや永久にさうであらう。それ故に此の兩檢閲局はぢつと動かない終局の一線に於いて、一つの地平線上に於いて互に接觸するのである。

萬事に於いて極端まで、最後の一線まで行くことの好きなドストエーフスキイも、今は二つの火の間に狹まり、政府の敵としてばかりか、その敵の敵となつて——終生脱れられないやうな境遇に陷つてしまつた。彼自身の語る所によれば、『エポーハ』は其の反對者よりも無力であつた。何しろ彼等は無數であつて、あらゆる惡罵凌辱を敢てしたのである。例へばその敵手を名づけて無賴漢、おツちよこちよい、おしやべりなどゝ云つた。そればかりではない、吾々が變節漢で、政府の媚諂者で探偵だといふやうな蔭口を言つて憚らなかつた。私は今に覺えてゐるが、氣の毒にもミハイル・ミハイロウイチがその「購讀者への勘定」を非難されて、彼がその計算違ひをしてゐたことが知れた時には、實にみじめであつた。『彼は又後に至つて『日記』のうちにこんな思ひ出を記してゐる。『彼等、即ち反對者なる「自由主義者」等は私を警察署の探偵文士だと公言した

のである。

恰度その頃、彼の兄弟ミハイル・ミハイロウイチと、彼の最も親しい友であり、又『ヴレーミヤ』の同人であつた批評家のアポルロン・グリゴーリエフと、それから彼の最初の妻マリヤ・ドミートリエウナ・ドストエーフスカヤとが相次いで他界した。

彼はア・エ・ウランゲルにかう書き送つてゐる。『かくて、私は忽ち一人になつてしまつた、そして何だか容怖ろしくなつた。生命が眞二つに折れてしまつた……。文字通りに私は生甲斐がなくなつた。更に新しい手蔓を求めようか、新しい生活を始めようか?私はもうそんな考へすら厭になつた……。兄の家族は文字通りに着のみ着のまゝで殘つた——乞食でもして歩く外に仕様はない。私は彼等の唯一の手頼りとして殘つた。彼等は皆、未亡人も子供等も私の救助を期待して、私の身邊へ押し蒐けた。私は兄を無限に愛して居た。今となつて彼等を見捨てることが出來ようか?』『エポーハ』の刊行を續けてゐたら『彼等も、自分も細々ながら食つて行けたであらう、それには無論朝から晩まで働きづめにして……。それればかりではない、兄の借金を返濟する必要があつた。私は彼の名に一の汚點も殘したくないと思つた……。私は三ケ所の活版所で一度に(『エポーハ』の最終の號を)印刷し始めた。金も惜まなかつた、健康も精力も惜まなかつた。編輯人

は私一人であつた。校正もすれば、執筆者や檢閲官との交渉もする、原稿の訂正から、金の工面までする、朝の六時まで坐りつゞけに仕事をして、一晝夜のうちに五時間づゝ眠り、漸く雜誌の整理までこぎつけたが、時既に晩かつた。』

到頭雜誌は駄目になつた。ドストエーフスキイは彼の所謂『一時的破産』を公にせねばならない破目に陷つた。豫約購讀者に對する負債の外に、抵當借財一萬「ルーブリ」と信用借財五千「ルーブリ」の負債が出來てゐた。ウランゲルへ宛てた手紙にはかう書いてある。『あゝわが友よ、只々負債を支拂つて、再び自由の身になれるものなら、私は喜んでもう一度あれ位の年月監獄へ入つても可い。今や再び笞の下から、即ち困窮のために、急いで一の小說を書き始めてゐる……。私の精力と體力の蓄蓄の全部のうちから、私の心に殘つてゐるものは、何となく不安なこんがらかつたもの、何だか絶望に近いものだけである。不安と、悲痛と、最も冷たい配慮と、私にとつて最も變則的な狀態と。それに加ふるに私は孤獨である。以前の人々も、以前のものも、四十年の過去も最早私のものではない。』彼の債主中で最も因業な、圖書出版及び販賣業者ステルロフスキイといふ露骨な惡漢は、彼を獄に投ずると脅した。それで『到頭憲兵曹長の助手がその執行に遣つて來た。』と、フヨードル・ミハイロウイチは云つて居る。その他の債主連も皆

同じやうな態度に出で、既に訴訟を起したものもあつた。そこで彼は借金の仕切をつけるか、高飛びするか、二つのうちその一を擇るより外はなくなつた。彼は後者をとつて國外へ遁れた。

かくて彼は云ひやうのない程困苦しながら四ヶ年の月日を外國に送つた。

一八六九年ドレスデンからア・エン・マイコフに宛てた彼の書簡を見れば、――當時既に『罪と罰』の著者であり、偉大なるロシヤの作家であり、最も敏感な評價者にとつては世界的文豪であつた人としては――殆んど信ずることの出來ないほどの窮迫に惱んでゐたことが解る。そこにはたゞ最も平凡な生活上の瑣事しかないけれども、私は之を看過することが出來ない。といふのは、病人の呻く聲を聞き、目のあたり其の顏を見なければ、彼の苦痛のほどを察することが出來ないと同樣、かゝる些事にも注意を拂はなければ、他人の困窮を感ずることは出來ないものであるからである。加ふるに此の場合には人民の勞働と貧窮、若しくは精神勞働者の怠惰と贅澤に關する抽象的論議などは、何等說明するところがないからである。

ドストエーフスキイはマイコフに書いてゐる『此の半年間といふもの、私は妻と共に貧苦に陷つて、吾々の最後の下着も今は質に入つてゐる有樣である。(これは誰にも話さないで呉れ給へ)』と、彼は恥らひつゝ又訴へるやうに括孤をして附け加へた『私は近いうちに最後の最も必要な持

物までも賣却しなければならぬやうな破目になるであらう。そして百「ターレル」の價ある品物も二十「ターレル」にしかならないことであらう。彼の返事が、よし承諾の返事であつても、萬一遲れるやうな事があつたら、三人の露命を繋ぐためには、甘んじてさうしなければならぬであらう』と。玆に『彼』と云はれて、溺れかゝつた人の縋りつく一本の藁のやうに最後の望みをかけられた人は、――カシビレーフといふ或る紳士で『ザリヤ』の發行者であつたが、ドストエーフスキイは未だ一面識もない人であつた。けれども彼はその人に對して、後生だから、何卒助けると思つて二百「ルーブリ」送つて貰ひたいといふ嘆願をしたのである。『けれども、急には彼にも調達出來兼ねるかも知れないと考へて、私は差當り七十五「ルーブリ」だけ送つて呉れるやうに賴んだのである。(此の金で急場を持怵えて、目の前の淪落を救ほうとするのだ)……。何しろ私はカシビレーフといふ人物を全く知らないものだから、幾分執拗い調子ではあつたが、兎に角努めて言葉丁寧に書いた。(が實は氣を惡くされはしないかと危ぶんでゐる。何となればあまりに敬語に力を入れ過ぎて、それがため全文が頗る間のびのした文體で書かれたやうな氣がする。)』

また一ヶ月許り經つて、彼がマイコフに寄せた手紙には、斯う書いてある。『カシビレーフといふ人からは今に至るも一文の金も受取らない――たゞの約束だけであつた！せめて吾々が今何ん

な境涯にあるかを、君が知つてくれたならと思ふ。知らるゝ通り吾々は三人の家族である。即ち私と、妻と（ドストエーフスキイの二度目の妻で、アンナ・グリゴーリエウナである。）その妻は子供を養ふ外に、自分も食を攝らねばならない體である、それと赤ん坊である。（今度生れた女の兒でリューバといふ。）が此の兒は吾々の貧困のために病氣づいて死なぬとも限らない！『早くリューバに洗禮を施してやらねばならないが、その費用が無いので今にまだ洗禮を受けてゐないのである。』

尙續いて同じやうな繰言ばかりだが、其の悲劇的な力は具さに窮乏を味はつたことのある人でなければ、到底了解することが出來ない。例へば他の一八六四年の四月に兄弟へ寄せた手紙には こんなことが書いてある。『私は夏靴も買ふことが出來ないので、冬靴を穿いて歩き廻つて居る……。彼（カシビレーフ）は、私がその窮乏を訴へたのは單に文章の飾りのためとでも思つてゐるのかしら。（と、ドストエーフスキイは續いて書いて居る。）飢餓に苦しんでゐる場合、電報料の二「タ－レル」を得るためにズボン下を質に入れたやうな場合、何うしてそんな醉興なことが書いて居られよう？あゝ、この私などは何うにでもなるかいゝ。此の飢もついでに何うにでもなれ！然し彼女は（アンナ・グリゴーリナは）赤ん坊に食を與へてゐるではないか。若しも彼女が

最後（自分の溫かい毛織のスカートを手づから質屋へ持つて行くやうなことにでもなつたら何うであらう。而も此の土地では雪が降りだして二日目である。（出鱈目を言つてるのではない、新聞を見れば分る事だ！）そんなことでもしたら彼女は感冒を引いてしまふ！まさか彼には、私がこんなことを殘らず彼に打明けるのが恥かしいぐらゐのことは解らないことはあるまい。』然しこれで悉皆といふのではない、まだ〳〵恥かしいことがある。といふのは、産婆にも、宿の主婦にも未だ金が拂つてないことゝだ。そして妻は産後一ケ月にも成らぬのに萬事を自分で見て行かねばならない！彼は、あれ程私が手づから自分の妻の困苦を書き立てゝやつたのに、尙私にこんな無情な仕打をするのは、私ばかりでなく私の妻をも侮辱するのだといふことが解らないのだらうか。いやもう侮辱してるんだ、侮辱してるんだ！……。彼は私に自分の言葉を以て約束したのではないか。だから、今となつて、彼は私の飢餓に唾をするのだとか、私が彼に催促する法はないなど〳〵言ふ權利は有つてゐない。しかしあんな人間だ、彼は私の飢餓に唾をするのだとか、私が彼に催促する法はないなど〳〵言ふに相違ない……。』こんな工合に、何の役にも立たない、單調な、正氣を失つた病人の呻き聲のやうな繰り言が何處迄もつゞくのである。これでは最早用向きの手紙ではなくて、譫語である。哀訴ではなくて絶望の叫びである。そこではカシビレーフに就

いて公正をも失してゐる。現に後から分つた話であるが、送金の遲延したのは彼の怠慢のためではなくて、爲替を組んだ銀行の一役員の無理解によつたもので、カシピレーフとしては何の落度もなかつたのである。そこにはドストエーフスキイの破れ聲の響きそのものがある。癲癇發作の前に於けるやうな抑え難い、殆んど狂暴な興奮がある。

彼は憤激の餘り斯く手紙を結んで居る。『それだのに彼等は尙も私に文學を要求して居る！こんな場合に執筆することが出來るものか。私は歩き廻りながら頭の毛を掻拐つてゐる。そして夜もおち〳〵眠れない！私は考へ續けてゐる、そして發狂しさうだ！私はそれを待つてゐる！あゝ本當に私はこんな窮狀の詳細を一々書き列ねることは出來ない。私にはそんなことを書くのは恥しくてならぬ！……。而も世人はその後から私に藝術味と詩の純潔と無垢とを要求する。そしてトゥルゲーニエフやゴンチャロフを引合ひに出して來る。そんな人々は先づ私がどんな境遇のうちに働いてゐるかを見るがいゝ！』

彼の一生は殆んど此のやうなものであつた。

『藝術家たり詩人たる私は、自から何の事であるかを知らずに敎へた。』と、レ・トルストイは云つて居る。『私はそれがために金を獲て立派な食物と、住所と、婦人と、社交とを贏ち得た。また

私は名譽も得た。』——『文學は賃貸のやうなもので、その巧妙なる投機は、單に關係者にのみ有利で、民衆には不利益なものである。』『如何なる勞働と雖も文學的勞働程容易に金になるものはない。』

然らば、彼が、兎に角眞の藝術家と認めてゐたばかりでなく、『自分にとつて最も必要な近しい人』としてゐたそのドストエーフスキイが、電報料の二「ターレル」を得るためにズボン下を質入れに行く所を、目のあたりに親しく見たとしたならば如何であらう。——眞の藝術家であつても時には『金錢のために創作する』と聞いた時のやうに、侮蔑的に肩を縮めるであらうか。或は又精神勞働と筋肉勞働とを區別する所には、殆んど凡ての之に類する抽象的推論と同じく、狹量にして生命を枯死せしめ、且實生活と矛盾する所の何物かゞあると聞いた時のやうに、侮蔑的に肩を縮めるであらうか？私の思ふ所によると、文學や勞働や貧苦に關するレ・トルストイの淺薄な感情と思想とは、飢渴者を了解してゐない飽滿者に特有な心の粗野と頑陋とに因るのではなく、却つてただ實生活の無經驗とその全き無知とに因るのである。然るに此の實生活たるや、ある一面より見れば、道義的判斷のためには頗る大切なものである。

無限の完成へ向つての躍進と、自己の藝術的良心の滿足、此の二つはドストエーフスキイにと

つては生死の問題である。彼はあの怖ろしい一八六九年に斯うマイコフに書いてゐる。『私が煎餅を燒いてると思つては不可い。縱令私の書くものが如何に醜く厭はしく出來たとても、その小說の思想と出來上つたものとは、此の貧しい私にとつては、即ち作者にとつては世界中の何よりも貴いものなのである。それは煎餅ではない。私にとつては最も尊い、久しい以前からの思想である。無論私はそれを臺無しにするであらうが、これは何とも仕方がない。』――『かう言つたら或は信じられないかも知れないが、私は此の小說を書出してから既に二三年越しになる。それにも拘はらず今なほ或る一章を書いては消し、消しては書き直し、また書き直して居る。』彼は最も傑出した最も深刻な創作の一である『白痴』を書き終る時、こんな嘆聲を洩らして居る。私は此の小說が意に滿たないで厭になつてしまふ……。今度は最後の努力を第三編に傾注して見よう。うまく小說が改造出來れば、私自身も恢復する。が若しさうでなければ、私はもうお仕舞ひである。』そして外國へ出發する前、『罪と罰』を草してゐた時分、彼はかう言つた。十一月の末には大分書き上げたのであつたが、私はそれをすつかり燒き棄てゝしまつた。今はそれを白狀することが出來る。私自身に氣に喰はなかつた。新しい形式と新しい構圖とが私を捕へたので、今は新機卷き直しを始めた。』

『私は概して、苦惱と心配とを持ちながら、神經質的に執筆して居る。』と、ドストエーフスキイは言つて居る。『私が全力を擧げて勞作する時、私は肉體的にすら病人となつてゐる。』また他のジエネバからの手紙にはかうある。『大いに働かねばならぬ、大いに大いに働かねばならぬ。けれどまた發作がひどく遣つて來る。そしてその度毎に私は約四晝夜位宛考を纒めることが出來ない。』――『この頃は發作が毎週反復するやうになつた。』と、彼はペテルブルク滯在の終り頃のことを回顧してゐる。『そして此の神經と腦髓との錯亂を感じ且明瞭に意識することは、眞に耐え難いものであつた。悟性が實際滅裂して了つた――これは眞實である。私はそれを感じた。また神經の錯亂は時々私を發狂的な瞬間にまで拉することがあつた。』――『何とも言へぬ內部の熱と、惡寒と、惡熱とが毎夜私を襲ふので、私はひどく痩せて行く。』『十日目毎に發作が起り、その後五日間は本性に歸れない。あゝ私はもう駄目だ！』

『それでも私はこれから生活を始めるんだといふやうな氣がしてならない。』と、最も絕望的な書簡の一つに於いて自白して居る。『實に滑稽ではないか？猫のやうな生活力だ！』――『私は、彼が雜誌の禁止に遭ひ、兄に死なれ、その負債から來る色々な酷い苦しみの最中にあつた一番困難な時分に彼と會見することゝなつたが、彼は決して落膽しきつてはゐなかつた。』と、ストラーホ

フは語つてゐる。『で私は、彼を壓倒するやうな事情を胸に描いて見ることは出來ないぐらゐであつた。殊にそれが驚嘆すべきものであつたといふのは、彼は元來自己を抑制することが出來ないで、全く感情の動きに身を任せる底の怖ろしい敏感を有つてゐたからである。それが互ひに妨げなかつたばかりでなく、却つて互ひに助け合つてゐるやうだつた。』――『そのうちには汲んでも汲んでも盡きない程生活力が蓄積されてゐる！』と、ドストエーフスキイ自らその青年時代の或る手紙の中に言つて居る。而して彼はその臨終の前夜に於いてもドミートリイ・カラマーゾフの言葉を籍りて、之と同一のことを自分に就いて語ることが出來たぐらう。『私は何時でも自己に對して、―我存す！と言はんがため、それがために、私は一切を征服し、あらゆる苦痛に打勝つであらう。百千の苦惱の中にあつても、――我存す、拷問に身を縮められても――我存す！柱の上に坐しても、私は存在する。太陽は見えても見えなくても、その太陽の在ることを私は知つてゐる。そこで太陽の在ることを知つてゐるといふことが――既に生命の全體である。』

かくの如く、四ケ年の間彼は友と兄と妻の死に打たれ、債鬼に苛められ、官憲と官憲の敵とに虐げられ、讀者には誤解されつゝ、孤獨と、赤貧と、疾病のうちに在つて、彼は幾多の大傑作を續々と創造した。一八六六年には『罪と罰』、一八六八年には『白痴』、一八七〇年には『悪

魔』を出して、尙『カラマーゾフ兄弟』の腹案を立てた。そればかりではない、彼の創作したものは如何程無際限であるにしても、それだけでは、彼が他の文化的境遇に在つたら何んなものを創作しようとしたか、何れ程創作し得たらうか、之を想像する事は困難である。彼の作物の內的歷史をよく知つてゐるストラーホフはかう言つて居る。『言ふまでもなく彼の書いたものは、彼が腹案を立てゝ、そして時には長年の間考へ續けてゐた幾多の小說の十分の一に過ぎない。或る種のものは、彼自ら之を詳細に且頗る熱心に語りきかした。また彼が書き上げ得なかつた所の題材に至つてはどれだけあるか側り知られない。』

友誼から來る誇張でもなく、ありふれた死後の讃辭でもなく、實際、文學者としてのドストエーフスキイの本體に有つたものを公平に的確に表明したと思はれるのは、『彼は平凡な文學者ではない、文壇の眞のヒーローである。』といつたストラーホフの主張である。然り、ドストエーフスキイの生涯中には、如何樣な過失と弱點とがあつたにしても、少なくとも其の或る瞬間は事實に於いて勇ましい勳功と崇高との榮光に包まれて居る。

レ・トルストイはその青年時代に於いて接觸し得た多くのロシヤ文學者等に就いて次のやうに言つて居る。これ等の文學者の中にはドストエーフスキイもあつてよい譯だが、偶々その中には

數へてなかつた。『私は殆んど凡ての作家が不倫にして、其の人格に於いて取るに足らぬ者ばかりであると信じた。而も彼等は、全然神聖な人々のみが滿足し得るが如く自から信じ、自から滿足して居る人々か、でなければ神聖の如何なるものなるかを全然辨へない人々であつた……。今にしてその時代のこと、其の頃の自分の氣分、それから又其の人々の氣分などを回想して見ると、私は情ないやうな恥しさを覺える。——そして恰度瘋癲病院で味ふやうな感情が湧いて來る。』

レ・トルストイは、其の生涯を通じて、斯くの如くロシヤ文壇を瘋癲病院と見る見解を固持してゐた。そして彼は一生涯、文明社會から逃避することに於いて、民衆へ走りつくことに於いて、肉の抑制に於いて、筋肉勞働に於いて、——その他あらゆることに於いて、己が正義と己が神聖とを求めてゐた。然し唯一つ彼が神から使命づけられたと思はれることに於いてのみ、敢てこれをしなかつた。

ドストエーフスキイはその全生涯を以て、往時には王者、立法者、武人、豫言者、苦行者等が英雄たることが出來たと同じく、現代文化のうちに在つては言葉の英雄即ち文學者が最後の英雄の一人であるといふことを立證した。

兩者の孰れが正しいか。また第三の最後の靈の國に於いて人々の上に君臨すべき撰ばれたる者

は、藝術及認識の英雄の間から出るやうに、言葉の英雄のうちからも現はれないであらうか、それは未來が決定するであらう。

第八章

單に基督教的の神聖だけを認めて、肉をも靈をも殺す程苛酷に、靈を以て肉を支配してゐる人の目には、レ・トルストイが自己の生活に對して下した次の如き宣告は公正なものと見ゆるであらう。即ち『私は農夫の勞働を食ひ、彼等を罰し、姦し、誑した。虚言、竊盜、あらゆる種類の姦淫、飲酒、暴行、殺人等……一として私の犯さない罪は無かつた。』といふのである。

然しながら、若し靈の神聖の外に、肉の神聖をも認め、基督教的神聖の外に、同じく永遠なる異教の神聖、或は少なくとも神の子によつて廢せられず寧ろたゞ完成されたる舊約の神聖を認むるならば、此の見地から見て、レ・トルストイの生涯は、現代の文化的な、ロシヤの社會に於いてばかりでなく、歐羅巴の社會に於いても、兎に角最も正しい、完全な、美しい、俗語でいふ「立派な」生活として現はれるであらう。此の見地からすれば、彼は『盜人』ではなくて、節約的な家政家であつたといふことになる。また『暴虐者』ではなくて、召使や家族の善良な主人であつたといふことになる。また『殺人者』ではなくて、勇敢なる戰士であつたといふことになる。

また『醉客』ではなくて、最も無邪氣な生の歡樂に陶醉した聰明な醒めた快樂主義者であつたといふことになる。また姦淫者ではなくて、汚れなき純潔のうちに結婚生活の臥床を守つた、律義な良人であり、舊約時代の族長アブラハム、イサアク、ヤコブに類する、子供好きな家庭の父であつたといふことになる。彼の全生涯は、恰度古い綠樹のやうに、また冷たい澄んだ地下の泉のやうに、處女のやうなとは言へないが、その淫慾の極みに於いても、なほ貞實な潔淨と新鮮味とを匂はしてゐる。レ・トルストイの生活そのものにも、行爲そのものにも、剩へ感情そのものにも、病的な矛盾とか、虚僞といふものが無い。矛盾や虚僞が曝露して來るのは、たゞ吾々が彼の完全なる異教的の生活とその不完全なる基督教的意識とを比較する時である。彼の所行は行爲によつて責められない、たゞ言葉と思想とによつて責められる。レ・トルストイの生涯を一點の瑕瑾なき程美しいものに見たければ、彼の爲してゐること感じてゐることでなく、彼がその行爲や感情に就いて語り且つ考へてゐることを忘れなければならぬ。彼は舊約の律法を遂行した。而も彼の悲劇の全部は、たゞ彼がその律法の實行を信仰と意識とによつて證明しなかつた點にある。それから又舊約のあらゆる人物の悲劇も、宗教的なイズラエル人全部の悲劇も、彼等が律法を極度まで遂行した時、その律法に滿足しないで、解放者を待つた點にあるのではなからうか。

けれども愈々救世主が來た時には、餘りに律法の桎梏に壓服せられた彼等は、救世主が全く未知な恐ろしい自由のうちに居るので、それを認めることが出來ず、却つて彼を排斥し、そして更に永久にその出現を待つてゐる。この點に彼等の悲劇が在るのではなからうか？而も此の期待のうちにこそ彼等の神聖が存するのである。此の古い、然しそれと共に吾々にとつては永遠な、舊びない、そして恐らくは基督教自身の中にも含まれて居りながら（何となれば父と子とは一なりとある故）、その基督教に於いて未だ理會せられず又意識されない此の神聖といふ見地からのみレ・トルストイは次のやうな不遜な矜りを以て自分のことを語る權利があるのである。即ち、『私としては人の前に匿し立てすべき何物をも持たぬ。私の爲す所は凡ての人の知るに任せる』と。實際また彼の生涯は此の試錬を忍んで來た。最後の覆ひは取去られて、彼の生涯は世界中の人の眼前に曝露されて居る。だから彼には兎に角愧づべき何物も無い。それは全く潔白な、神聖なものである。尤もそれは、彼自身の要望したやうな、また彼を始として當時の大多數の人々から見て基督教的なものと思はれてゐるやうな、そんな神聖さではなかつたけれど。若し彼が何等か慚愧すべきことがありとすれば、それは自分の所業でもなく、また感情でもなく、たゞ彼の言論及び思想だけであらう。然し七十歳の老翁の精神的の赤裸が小兒のそれの如く無邪氣だといふのであるか

ら、あまり不足もあるまい。兎に角今の世に在つて、何人の生活が果して斯くの如き試錬に堪へ得るであらうか。

思ふに、ドストエーフスキイの生活は確かに堪え得ないであらう。

レ・トルストイとドストエーフスキイの兩人の生活を比較する場合、動もすれば謬見に陷り、不當な見解を懷き易い。何となれば、吾々は前者については知らざる所が無いのに反して、後者に就いては殘る隈なく知つてゐるといふ譯に行かぬ。そればかりでなく、ひよつとすると極めて重要な事柄さへ知つて居ない。ほんの唯彼の手簡に現はれた暗示や、人口に傳へられてゐる事どもや、または彼の人格が其作物中に反映してゐる點に照らして見ても、吾々はたゞドストエーフスキイの人格の大部分が全く吾々からかくされてゐることを知るに過ぎないからである。吾々は又、彼の傳記を吾々に與へんと努力した近親の友人等に對しても、公正な見解を持たねばならぬ。これ等の人々は故人の追想に對しては極度に敬虔な恭謙の念を持つてゐる。實は恭謙過ぎる程である。從つて默示錄に「惡魔の深淵」と呼ばれてゐるもので、ドストエーフスキイにはあれ程親しかつたものを理會する力はあまり持合せてゐない人々である。ストラーホフの如き精緻にして徹底せる理會を有する人と雖も、ドストエーフスキイの人格を醇化せずに矢鱈に單純化し、之を

和らげ、鈍らし、圓滑にして、遂に普通凡庸人の程度に引下げてゐる。

何れにせよ、ドストエーフスキイを人間として考究するに當つては、吾々は是非共彼がその凡ての著作に於いて、人間の心の最も危險な最も測り知られぬ深淵、特に肉慾の深淵を究めんとしたる彼の藝術家としての抑へ難き欲求を考慮の中に置かなければならぬ。『天使』アリョーシヤ・カラマーゾフの高尚な、靈感的な、殆んど宗教的歡喜にも近い肉慾に始つて、『自分の雄を喰ひ盡す毒蟲の雌蜘蛛』の肉慾に至るまで、――そこには人間的情熱中最も神秘的な此の情熱をばその最も鋭い最も病的な變態に於いて表現してゐる無限の音色と色彩とが光彩陸離たる虹のやうに示されてゐる。

啻に怪物スメルヂヤコフばかりでなく、啻に『神と闘つた』イワンや、『毒蜘蛛に刺され』たやうな殘忍な肉慾主義者ドミートリイばかりでなく、かの溫厚なる天使アリョーシヤも亦、一樣に彼等の肉の親たる『惡黨』フョードル・パーウロウイチ・カラマーゾフと、それから精神の親なるドストエーフスキイ自身と絶ち難い骨肉の緣を有することは、又注目に値する。實際これ等の人々はもと〳〵彼の家族であつて、彼は之を人々の前には否定するかも知れぬけれど、自らの良心の前には、又神の前に於いては決して否定せぬであらう。

『惡魔』の一節で、スタウローギンの告白の條が印刷されない草稿のまゝ殘つてゐるが、彼はその中に、他のいろんな事を一緒に、一少女の凌辱事件を書いてゐる。これはドストエーフスキイの創作中最も力强いもの〳〵一つであつて、實に恐しい程眞に迫つてゐる。だから彼の死んだ後でも、それを印刷に附することを躊躇した位である。それに藝術の『範圍』を脱したところがある。餘りに活き〳〵としてゐるのだ。

けれども、スタウローギンの罪業の中には、その深い墮落の中にすらも、少くとも嘗て美であつたもの〳〵まだ消え失せない惡魔的な反映を見ることが出來る。惡の威嚴を見ることが出來る。併しドストエーフスキイは又何等の威嚴もない、些細な、日常の不道德を描出すことをも躊躇しなかつた。『地下室雜記』の主人公又は對主人公は、彼の小說の主人公中ドストエーフスキイの心に最も近い一人で、他に劣らぬ精神上の高所に立つてゐるものである。彼は藝術家の宗教的煩悶と疑惑との眞髓を告白してゐる。此の告白に於いて吾々は、トルストイの『懺悔』にも劣らぬ、峻嚴な、またそれにも增して怖ろしい自己鞭韃と苛責とを感じ得るのである。此の『主人公』はこんな、とを自白してゐる。『私は時々……急に暗憺たる、地底の樣な、いやな淫蕩に、淫蕩と云よりは寧ろ放埒に陷つた。私の汚い情慾は烈しくなつて、平素の病的な興奮によつて燃えた。それはヒ

ステリイ性の發作で、涙が流れたり、痙攣が起つたりする……。その上憂愁に襲はれた。矛盾とか反對とかいふものに對するヒステリックな渇望が起つた。かうして私は墮落の底へ突進して行つた……。私は毎夜ひとり離れて、秘密に、恐る〳〵、實に小汚く、而も恥ぢらひつゝ惡事を行つた。が、羞恥の念は最も醜惡な瞬間ですらも、決して私を去らなかつた。そんな折には、よく自己を呪ふ心持にさへなつた。當時私は既に心の中で秘密が好きであつたのだ。私は人に會つたり、見られたり、私と云ふことを知られるのが恐ろしく氣遣はれたものだ。」

ドストエーフスキイは凡てこれ等の描寫に於いて、あまりに力と大膽さとを有ち、あまりに發見と啓示との新奇さを有つてゐるがために、動もすると次のやうな一種不安な疑問が現はれて來る。彼はこれ等のことをみな、單に外面的の經驗によつて知り得たのであらうか、單に他人に對する觀察によつて知り得たのであらうか。これがたゞ藝術家の好奇心といふだけのものであらうか。勿論、彼としてはラスコーリニコフの感覺を經驗するために、自ら一老婆を殺して見る必要はなかつた。勿論、その大部分は天才の透徹せる觀察力に歸すべきである。けれどもそれは大部分であつて、決して全部ではあるまい。今假りに、ドストエーフスキイ自身の行爲と生活の中には、此の犯罪的な、若しくは少くとも藝術家の好奇心以上のものに該當するやうなものが無い

としても、猶彼の想像の中にかくの如き形象が起り得たといふことは注目に値する事實である。トルストイの空想も別種のものではあるが、それに劣らぬ程深い肉慾の深淵に突込んではゐるけれど、上述の如き事象に對しては到底その器でなかつたやうだ。『毒蜘蛛に刺された』ことや、少女凌辱や、フョードル・カラマーゾフとリザウエータ・スメルヂャシチャとの戀愛事件などに對してドストエーフスキイの有する藝術的好奇心は、レ・トルストイには迚も理會の出來ないものであらう。レ・トルストイの目から見れば、このやうな好奇心は或は無意味なものに、或は嫌惡すべきものに思へるであらう。彼に在つては、性慾は時に慘酷な粗暴な、更に野獸的な力として現れてゐることもある。けれども不自然な、畸形的なものとして現はれてゐることはない。人間の罪惡中その最大なるもの、モーゼの復傳律令に『復讐は我にあり、我必ず報ゐん。』との精神に於いて神の容赦なき公義によつて罰せらるべき犯罪は、――『アンナ・カレーニナ』及び『クロイツエル・ソナタ』の作者にとつては夫婦の貞節を犯した罪である。彼が性的生活のあらゆる現象を測る標準は、根元的に單純な、健全な、族長時代の家族的な、貞節な情慾であつて、謂はゞ『生めよ殖えよ。』と神エホバによつて人々に與へられた律法の如きものである。嘗てレーウィンの告白する所によると、彼はその生涯中結婚の形以外には、女との幸福を想像することは出來

なかつた。又、他人の妻を誘惑することは、キッティーと呼ぶ妻のある彼にとつては實に下らないことで、それは恰も立派な贅澤な饗應の後に、街頭の露店の物賣臺から一片の麵包を盜むやうなものであると。レ・トルストイが如何に自分の行つた淫事か何かの事を懺悔すればとて、ドストエーフスキイに比すれば、實に無邪氣なもので、此の點に於いて彼は丁度、レーヴィンか、さもなければ、小間使のサーシャに戀して居りながら純な羞恥のために接吻が出來ないといふ十六歳のイルテニエフのやうなものであるとしか感じられない。

然し私は繰返して言ふ、ドストエーフスキイの生活の研究者は、此點に於いて暗中模索をしてゐる。全く信據するに足るやうな明白な正確な證據は何一つない。あるものは只暗示だけである。そのうちの一つは私の既に引用した所であるが、それは即ちかうである。彼はミンヌシカとか、クララとか、マリアンナとか云ふ女に夢中になつた事や――當時ドストエーフスキイは二十五歳であつた――ツルゲーニエフとベリンスキイにその放縱な生活を批難された事などを、兄弟の前に物語つた後、さて結論として彼はかう言つて居る。『私は神經を病んでゐる、そして熱病や、神經熱を怖れてゐる。だから秩序正しい生活は私には出來ない、これ程私は放埒である』と。かの尊敬すべき貞實な傳記作者オ・フ・ミルレルは、こゝに言はれてゐる『放埒』はたゞフョードル・ミハイロウィチの金錢上の不始末をさすのだと早合點してゐるが、こんな早計な辯解は、却つて讀者の心に疑念を起さしめるものである。

それよりも茲に尙一つの暗示がある。それは、方面こそ違ふけれども、ドストエーフスキイが想像力ばかりでなく、現實に於いてもどの位深く踏み込む人であつたか。その極度を思はしめる。それは彼が一八六七年に外國からマイコフに寄せた手紙で、文面はかうである。『吾が愛するアポルロン・ニコラーエウイチよ。私は、君を私の裁判官に仰ぐことが出來るやうに感ずる。君は同情ある人だ……。君の前に懺悔することは心苦しくない。しかし君一人だけに書く。何卒私を世人の裁判へ引渡して呉れ給ふな。バーデンの近くを通過した時、私は不圖そこへ立寄らうかと云ふ考を起した。拾「リイドル」も賭けたら、それで以て二千 フランクも儲かるか知れないといふ誘惑的な思ひに惱まされたのだ。が、何より私を毒したのは、以前に時々勝つたことがあるといふ考へである。然しそれよりも善くないのは、私の本性が野卑で、餘りに熱し易い事であつた…。惡魔は直ぐつけ込んで私に惡戲をしたのである。私は三日の間非常に易々と贏ち續けて、四千「フランク」を得た……。併し主眼とする所は勝負其物である。御存じの通り、それが亦後を惹くものだからね！ いや全くあの場合働いてゐるのは貪慾一つではない。これは誓つて言ふ

……。で、私はもつと〳〵賭けた、そして負けた。今度は自分の金殘らず賭けて、熱病ほどに興奮してゐたが、――遂々負けてしまつた。私は衣服を質に入れた。アンナ・グリゴーリエウナも自分の持物全部質に入れた、實に最後の一物に至るまで質に置いて呉れた。(何といふ優しい天使であらう！　彼女は私にとつてどれ程の慰藉であつたらう。)』それから先は、金の才覺を賴む所が續いてゐるが、それは實に腰を低くした言ひ方で、特にドストエーフスキイとマイコフとの友誼的親交の全幅を思ひ合せるならば、一層その感を強うせざるを得ない。『アポルロン・ニコラーエウイチよ、君自身の所にも餘分の金はあるまい、それは私も承知してゐる。君に向つて金の無心などは決してしたくはない。しかし私は溺れつゝある、いや全く溺れてしまつた。二三週間經てば私は全く無一文だ。溺れてゐる者は考へてゐる暇など無い、たゞ手を伸ばすだけだ……。君以外には誰も無い、若し君が助けて呉れなければ、私はもうお仕舞ひだ、全くお仕舞ひだ！……。愛する友よ！君私を救つて呉れ！私は友誼と愛着とを以て永久君に報ゐるであらう。若し君の手許にないならば、私のために誰からか借りて呉れ。あゝ、こんな風に書くのを許して呉れ給へ……。どうか私を見捨てないやうに賴む！　神様は屹度君へ此の報ゐをして下さる。曠野で渴してゐる靈に一滴の水を注いで呉れ、何卒々々後生だから！』此の最後の文句に、『一滴の水』

とか、『曠野で渴してゐる靈』とか言つて、まるで彼の小說の中のほろ醉ひのマルメラードフや山師のレビヤードキン大尉などの如き、義理も恥も無くした喜劇的人物が、自分の貧乏を描く時と同じ樣な野卑な雄辯を見せてゐるのは注目に價することである。思ふに、ドストエーフスキイ自身、自分の言ふてゐることを自覺してはゐまい、自分を支配してはゐまい。マイコフが自分のことを何う考へようと、構はないのである。彼は熱中してゐるのだ、熱に浮かされてゐるのだ、まるでヒステリイにかゝつてゐるのだ。彼はまだ〳〵勝負熱に醉ひつゞけてゐるのだ。だから若し彼がそのバーデンに於いて賴んだ金を手に入れたならば、直ぐ又彼は我慢しきれなくなつて、其の金を賭けてしまひさうな氣がする。

レ・トルストイも嘗て若い時に此の勝負事の爲に大變損をしたことがある。然し彼は『熱中』しなかつた。そして、其の認識に於いてはそうでなくとも、その行爲に於いては、彼に特有な自制と理智とを以て適當な時期に止めることを能くした。彼は勝負事を廢して、カフカズへ赴き、コザツクの營所に住み込み、こゝで一ケ月五「ルーブリ」といふ非常な節約を實行して金を溜め、遂にその貯金で賭博の借金を返してしまつた。これは生活上の一小事ではあるけれど、其處にレ・トルストイの眞價が――即ち中庸を保つ感情、克己自制、堅忍持久といふやうなものが――現は

れてゐる。從つて見やうによつては、これがレ・トルストイのドストエーフスキイに優つた道德的資質であると言はれよう。

尤も、こんなことは皆些細な事柄である。吾々は、もつと〳〵重大な場合に當つてドストエーフスキイが『熱中して』しまつた事實を知つて居る。即ち、彼が青年時代の虛榮心にかられて、其の小說『雙生兒』を『死せる人々』以上に想つたのもその一つである。またベリンスキイに對する盲目的な忿怒に驅られて、たとへ聰明の點は不十分であるにしても兎に角非常に恩惠を受けた人に向つて、『卑劣な中傷』とか『鼻もちならぬ迂愚』とかいふやうな咎めだてをしたのもその一例である。あの勝負事の損失をマイコフに書送つた手紙のうちにも、彼は『何時如何なる場合に於いても自分は極端まで行く。一生涯制限を越して行く。』と云つて、自分の道德的性格の意味深い綜合を傳へて居る。が更に附け加へて置かなければならないのは、彼が斯く『制限を越える』のは、力の横溢せる爲めではなく却つてその弱きがため、自制力の不足なためであることである。『世人の裁判に私を渡して吳れ給ふな』と、彼がマイコフ宛んでゐるのは、あの『地下室雜記』の主人公の發した言葉を聯想せしめる。それは『私 [illegible] られたり、人と出會はしたり、人に見知られたりするのを、ひどく恐れた。』といふ文句である。恐らく、彼は、自分が云つてゐる

やうな『卑劣な、そして餘りに熱し易い性質』を、自分自身の前に悔いたり恥ぢたりすることはなからう。けれども彼は、己が意識を以て此のやうな性質を『世人の批判の前に』神聖化したり、辯護したりする力は持たなかつた。これは既に一の弱點である、惡の羞恥である。何となれば惡は彼の行ふ所に在るのでなく、行ふ所を恥づる所に在るからである。すると結局、彼の生涯に、將た所業の中に、彼の想像力の犯罪的好奇心に該當する何等かのものが在つたにせよ、無かつたにせよ、そんなことは如何でも可いのである。重要なのは、彼が思ふことは憚る所なく爲し得たであらうといふ風に考へ且感じてゐた一事である。けれどもレ・トルストイの如く、『私は人々の前に秘すべき何物も持たない。私のすることは誰に知られてもよい。』と言つて、自己の生活から最後の覆ひを取り去り、之を全世界の人々の眼前にさらけ出すことは、ドストエーフスキイには能う出來なかつたであらう。彼の生活はそのやうな赤裸に耐えなかつたであらう。彼は吾々に何かしら隱す所があつた、或は隱さうとしたであらう。だから吾々には、彼の生活のその暗い一面が、汚れた『美しく』ないものであらう、いや少なくとも彼自身にとつて汚い美しくないものに思はれたであらうと感じられる。

若しレ・トルストイの生涯を以て地下の泉の淸く澄んだ水に譬ふるならば、ドストエーフスキ

イの生涯はこれ亦地中の深みから噴出する猛火、而もそれは燈火や、灰やと息の詰まるやうな臭氣や毒氣をまじへてゐる猛火に類してゐる。

レ・トルストイが自己の近者を愛しようとした眞劍な努力は信じない譯には行かない。たゞ彼が實際基督教的に誰かを愛したか否かといふことは疑ふことが出來る。然るにドストエーフスキイの全生涯を貫き、之を淨化してゐる愛の火は、彼の生活の極めて平凡な茶飯事に於いても輝いて居る。彼はある手紙に於いて、自分の繼子となつた孤兒をマイコフに托する際かう書いて居る。『パーシヤは良い兒で、可愛いゝ兒である。それでゐて愛して呉れる人がゐない……。私は最後の肌着をも此の兒と分つであらう、生涯分つであらう！』と。誰でも、自分で愛した事のあるものは、これが空言でないこと、又實際に、自分が貪者に施す權利があるかなどゝ、抽象的に論議してゐないで、彼が直ちに自分の子供に『最後の肌着』を分つ決心でゐることを感ずるであらう。

彼は娘のソーニヤを喪つて後、ある手紙に斯う書いてゐる。『……私は、まだ澤山子供が出來るだらうと云つて、人々から慰められる。だがソーニヤは何うして呉れるんだ？あの愛くるしい人格は何處にゐるのだ。彼女が生きかへつて呉れさへすれば、私は彼女のために十字架のくるし

みをも受ける……、　私はそれを斷言する……。時の經つにつれて、思ひ出は一層鋭くなり、死んだソーニヤの姿はますゝはツきりと見えて來る。そして時々は迚も堪へられないことがある。彼女は既に私を見分けるやうになつてゐた。そして其の死ぬ日などには、私も、まさか二時間後にあの世のものにならうとは思ひもしなかつたので、例の通り、新聞を讀むために外出しようとすると、彼女は凝つと可愛らしい眼を据えて私を見送り、且私をしげゝと打守つてゐた。あの樣子は今に至つても益々はつきりと眼に浮んで來る。私は何時になつても忘れ得ないであらう、そして永久苦しみ續けるであらう。縱令他に子供が生れるやうなことがあつても、私はその兒を如何に愛するであらうか、何處に愛を見出すであらうか、今の私には解らない。私としては矢張あのソーニヤが必要である。』彼はその兒を愛してゐた、彼は自分の肉の兒を愛してゐた。唯、肉體的にばかりではなく、又實に精神的に　即ち基督教的に、自分の爲めではなく、彼女のために、一個の永遠な何物にも換え難い人格として愛してゐた。實際彼は、かの舊約の族長ヨブのやうに、幾人他に新しい子供が出來ても、死んだ兒についての悲歎は慰められるゝことはなからう。『だがソーニヤを何うして呉れるんだ？私にはソーニヤが必要なのだ。』レ・トルストイの爲したこと、語つたこと、感じたことの何處を搜して見ても、こんな單純な愛の單純な言葉に類する

ものは見出し得ないのである。

茲に於いて思はず聯想さるゝのは、レフ・ニコラーエウイチがある時、己が親友中の親友、即ち彼にその全生涯を捧げ、啻に彼を愛してゐたばかりでなく、彼を不憫に思ひ、三十年間も、慈母の優しさを以て彼を愛兒の如く勞はつて來た、自分の妻ソフイヤ・アンドレーエウナに就いて、一人の局外者に語つた言葉である。私は親しき友を求めるなら、之を男子の中に求める。如何なる女性も私にとつては親友の役をなし得ない。何故吾々は、自分達の妻に向つて、彼等を眞の親友と思つてゐるなぞと欺いてゐるのであらう?それは全くの虚僞ではないか』と。何といふ冷たい慘酷な言葉であらう。慘酷ではあるが、恐らく惡意を含んでゐない、無邪氣な言葉であらう。たとへ基督教的ではなくも、異教的には美はしい言葉である。これが抑々彼の全生涯の冷たさではないか、地下の泉の冷たさではないか。だが彼としては此の冷たさを恐れてもゐまい、恥ぢてもゐまい。そして世を果てるまで保持して行くであらう。所詮冷泉は冷泉であつて熱泉となることはあるまい、あつたにしてもそれは微溫な濁水位なものであらう。されば、彼は寧ろ神に造られたまゝの姿で存續するに如かぬであらう。私は彼の偉大な自愛を恐れる者ではない、彼の清い純などん底の異教的な冷たさを恐れるものではない。私の憂ふる所は、彼の表面的な若しく

は中心からの微溫、而も基督教的たらんとするその微溫である。

かうして見ると、その本質に於いてはレ・トルストイも、ドストエーフスキイもその生活は正しいものである。然し正しいと云つても終局まで正しいといふのではない、完全だといふのではない。何となれば地下の冷たさの外に、なほ蒼天の冷たさがあるからである。地下の火の外に、なほ太陽の火があるからである。兩者共まだあの至高なる純一の境地に達してゐない。即ち永遠の蒼天が永遠の太陽に貫かれ、兩者一體たるの境地にまで達してゐない。

何れにせよ、ドストエーフスキイの火もレ・トルストイの冷たさも共に同じく神聖なものである。今假りにドストエーフスキイの生活や行爲を閲して、その中に何等かの惡事、罪科、若しくは名譽を毀損するやうなこと、或は單に之に類する何ものかを認めるやうなことがあり得るとしても、私にとつては、彼の姿が曇つたり、彼を取卷く聖光が薄れ行くことは無からうと思ふ。何となれば、彼の内に燃え立つ火が一切に打勝ち、一切を淨化することを感得してゐるからである。彼自身も亦此の淨化する火の力を感じてゐた。彼は之を以て生きて來た、そして之がために死んだ。『毎夜私を燒きつける一種の内部的の熱がある、惡熱がある、惡寒がある。それがため私はひどく痩せる。』とは、彼が死ぬ二三年前に誌した所である。一八八〇年の後半、『カラマーゾフ兄

弟』を脱稿した時、―ストラーホフの記憶によると―彼は非常に痩せ衰へた。『彼は明らかに神經に依つてのみ生きてゐた。彼のそれ以外の體は凡て、ちよつと觸つただけでも直ぐ崩れて仕舞ふ程度にまで脆くなつてゐた。が此處に何より驚くべきは、彼の精神勞働の不休不息であつた。彼はこんな年に印刷の紙にして二十五枚から三十枚を書いてゐた。そしてその勞働は、彼自ら私に話した所によると、彼にとつては益々苦しくなつて來た。』一八八一年の始め、彼は氣管肢カタルの結果、烈しい肺氣腫の發作に冒され、その生涯の最後の九ヶ月を煩ひ續けた。一月の二十六日喉に出血があつた。彼は死の近づいた事を覺つて神に懺悔し聖餐の禮を受けたいと言ひ出した。ストラーホフはかう云つて居る。『アンナ・グリゴーリエウナの言によれば、フョードル・ミハイロウイチは全生涯中、何かきめたい時になると、いつも監獄で手に入れたあの福音書を手當り次第に開いて、その開かれた頁の上の方の數行を讀む習慣を持つてゐた。で、今もさういふ風にして、そこの所を讀むやうに妻に渡した。すると其所は馬太傳の第三章の十一節で、「ヨハネ彼を制して曰く、我は爾より洗を受くべきものなるに、爾反つて我に來るかと。然るにイエス之に答へて言へり、暫く許せ、蓋し我等はかくして大なる義を遂行すべきなりと。」アンナ・グリゴーリエウナが之を讀み終つた時、フョードル・ミハイロウイチは云つた。

『お前今聞いたか。暫く許せ、――といふのは私が死ぬといふ意味なんだ」と。そして書を伏せた。果せる哉彼はそれから數時間經つと、急に肺動脈破裂を起して本當に死んでしまつたのである。』

彼がその最後の瞬間に考へた所の『大なる義』は彼の全生涯の義であつた。彼はその義をば死に臨んで遂行し、その義によつて彼は、永遠の審判の前に全く辯護さるゝ事を、吾々は期待することが出來る。

ドストエーフスキイは文學上の會合などで、好んでプーシキンの『預言者』を朗讀したものだ。之を聽いた者は、決してそれを忘れないであらう。始めは、とぎれ〳〵の、微かな、低い、抑へつけられたやうな聲で讀み出す。けれども群衆の沈默のうちに、その一音々々がはつきりと分つた。やがて彼の聲はだん〳〵高まつて、遂には超人間的なと思はるゝ力を得て來た。そして最後の一句の如きは、彼はもう發音するのではなく、震撼するやうな叫びで怒號するのであつた。

言葉を以て人々の心を燒けよ！

すると、生氣のない、哀れな、保守的な自由主義のペテルブルグの群衆は、思ふに世界中でも

最も冷やかな、最も月朋た群衆は、此の怖ろしい叫喚を聞いて慄え上つた。恰度四世紀前にマリヤ・デル・フィオレ會堂の群集がイエロニム・サボナロラの説教をきいて驚いたのもかくあつたらうと思はるゝやうに。此の瞬間に不圖感じられたのは、ドストエーフスキイが偉大なる作家以上の人物であること、それから彼のうちには、世界的、歴史的、宗教的の大火を燃えたゝしむる熱火が燃えてゐるといふことであつた。

ある時ストラーホフは自作の詩を彼に讀んで聞かせたことがあつた。その詩のうちに當時のロシヤ人に與へた左の如き一句があつた。

汝等は如何なる力を帶びてゐるかを悟れ！

ドストエーフスキイは聲を擧げて叫んだ。『さうだ、さうだ、たゞ悟ればいゝ――全くだ、全くだ、眞實悟つてくれるといゝが！然し、悟れないだらう……』

ストラーホフの語る所によれば、彼は公開演説などに於いて與へらるゝ叫喚や、拍手や、花環などの後には、いつも斯う繰返した、

『さうだ、さうだ、それは宜しい。だが、一番肝腎なことは矢張り解つてゐないのだ。』

またドストエーフスキイ自身も次のやうなことを言つて居る。『誰の頭の中にも、他人に傳へることの出來ない何ものかゞ常に殘つて居る。それは實に全集を幾つ書き上げても、君等の思想を三十五年間講釋しても、どうしても、君等の頭蓋骨の底から出ようとしないものが常に殘つてゐる、そして永久君等についたまゝ殘つてゐる。君等は到頭それを誰にも傳へずに、自分に持つたまゝ死んでしまふであらう。けれどもそれは君等の思想のうち最も主要なものであるかも知れないのだ。』

此の豫感は彼に於て實現されたのではあるまいか？　彼は言はんと欲したことのうちで最も重要な點を吾々に語らずに世を去つたのではなからうか。その死後二十年を經た今日に於いて、彼が如何に解釋されてゐるかを知つたなら、彼は更に又『一番肝腎なことは解つてゐないのだ』と叫ぶ權利が無いであらうか。殊に彼の大なる競爭者の隆々たる、眩きばかり赫々たる名聲の前に、自分の名聲が薄れ行く今日に於いて。然しながらその『一番肝腎なこと』がレ・トルストイのうちに最も多く感受せられ認識せられてゐるとしても、それがドストエーフスキイに於けるよりもヨリ多く意識され、理解されてゐるであらうか？何れにしても、現在はドストエーフスキイに屬せずして、レ・トルストイに屬して居るやうに思はれる。が、若しこれが事實さうであつて、レ・

トルストイが現在の支配者であるとすれば、未來はドストエーフスキイのものではなからうか。私がこんなことを言ふのは、何もレ・トルストイを卑下するがためではない。私の考では、現在は未來よりも小なるものではない。今日は既に明日である、たゞまだ知られないだけである。然し同様に、或はそれ以上に深遠なものである。何となれば無言にして秘密であるから。で、私は之を以てたゞ次のことだけを言ひたいのだ。則ち吾々は、既に第三者を豫感してゐる、彼等の後から來て、而も彼等より大なる、未だ知られざる者を豫感してゐる。彼は現在と未來とを結合し、現在を未來となすべき人である。最後の勝利の桂冠は此の人の所有ときまつてゐるのではなからうか。此の人こそレ・トルストイとドストエーフスキイのうちにあつた「一番肝腎なもの」を意識し且啓示する人ではあるまいか。その時には、此の人が彼等兩人のうちにあつたことも、凡ての人々にはツきりするであらう。

レ・トルストイはかう言つて居る。『プーシキン、ゴーゴリ、ツルゲーニエフ、オルジャーウイン等の作品は、國民にとつては知られてゐない、不要なものである……。――吾々の文學は國民に接合されてはゐない、また將來も接合されないであらう……。吾々にとつては貴い是等の作品も、國民に取つては粃殻にも等しいものである。』ある時、レフ・ニコラーエウイチは馬丁と話をしてゐるうちに、彼から『幼年及び少年』を呉れと願はれて、かう答へた。

『いや、あれは詰らない本だ。私も若い時分には隨分馬鹿な事を書いたものだ。それよりか、『光ある間に光の中を歩め』といふのをお前に上げよう。これは『幼年及び少年』よりは遙かに好いものである。』

ドストエーフスキイはかう言つて居る。

『私はポーロの如く、人が讃めて呉れないならば、自ら自讃するであらう』と。また死する少し前には、『我』と題する一節の下に、其の手帳へかう書き込んでゐる。『私は素より國民的である。(何となれば私の傾向は國民的なる基督教的精神から流れ出して居るから。)總合現今のロシヤ國民に知られなくとも、未來のロシヤ國民には知られるであらう』と。

二人の見解はこれ程反對してゐるにも拘はらず、その言ふ所は何れもそれ相當の理由を持つてゐる。

無論、彼等兩人共、ロシヤ文化の精神に於いて、ロシヤ國民の精神を繼續してゐる意味に於いて、また實際何時かは國民的たると同時に世界文化的たるべきものに向つて邁進してゐる意味に於いて、同様に國民的である。彼等は斯く邁進してゐる。然し果して到達するであらうか。彼等

はたゞ、文化と國民とを隔てゝゐる深淵を意識してゐた。少くとも徹底的に感得してゐたやうに思はれる。そして共に國民的たらんことを冀つた。然し、此の深淵を意識することの遙かに少なかつたプーシキンですら、彼等以上に國民的である。レ・トルストイにしても、またドストエーフスキイにしても、ホーマアの『イリアッド』や、エスキルの『プロメテイ』やダンテの『神曲』の如き藝術品をして世界的精神としての國民的精神の完全な表現たらしめたあの完全な單純さを所有して居ない。彼等はまだ餘りに複雜である、餘りに階級的である。これは恐らく、餘りに階級から擺脱して『單純に復る』(民衆化)ことを急ぎ過ぎたために他ならぬ。單純化を要する者は、まだ單純でない。國民的たらんと欲する者は、まだ國民ではない。斯くて若し今後も從來通りに進んで行くものとすれば、プーシキンにせよ、レ・トルストイにせよ、又ドストエーフスキイにせよ、まだ長い間『國民にとつては殼』として殘るであらう。

かの自ら稱して『正教信徒の教會』と呼んでゐる新『宗派』の開祖で、今はサハリンに暮してゐる懲役上りのテイーホン・ベロノーシキンといふ百姓は、自らも基督なりと信じ、その歸依者等からも基督と思はれてゐる人であるが、彼はつい近頃のこと、國民風俗の研究家で、所謂『教養ある』一ロシヤ人に向つてかういふことを言つた。

『あなたは油を集めてゐなさるか?解りました……。あなたはお燈明へ澤山油をつぎなされた。人々を照らすやうに、それに火を點しなされ。さもなくばその油を何にします?』

吾々即ち文化と意識とを有する者は、すべて火を點さぬ油ではなからうか?——そして國民即ち原始的な力と信仰の人々は、油なき火ではなからうか?若しも油が火と結合しないならば、その油は失せ、火は消えてしまうであらう。私の見る所によると、レ・トルストイとドストエーフスキイとは、後から來て油に燈心を入れ、火を點ずる者の偉大なる先驅者である。

此のロシヤの二大生命、此のロシヤの二大人物は實にさうした人々である。

此の兩者を箇々に離して觀察する時、私は彼等を審き彼等を比較することも出來る。そしてその各々に特權を賦與することも出來る。けれども、彼等を一と纒めに眺める時は、その何れが自分にヨリ近いか、その何れを自分はヨリ多く好んでゐるか、皆目解らない。

レ・トルストイを眼のあたりに見た者は、彼の外貌を描いて、かう云つてゐる。『彼の顏は百姓のやうに、素朴で、田舍じみてゐて、横廣い鼻と、風雨にさらされた皮膚と、濃い垂れ下つた眉毛とを有し、その眉毛の下からは小さな灰色の鋭い兩眼が炯々と覗いてゐる。』此の眼は時とすると、俄に燃え輝いて、孔のあく程突き刺すやうな視線で相手を見詰める。その目擊者は更に附

加えて曰ふ、その顔がまるで百姓式であるにも拘はらず、『レフ・ニコラーエウイチのうちには一見して直ちに、上流社會の人であることが感じられた。』世慣れた　ロシヤの貴族であることが感じられたと。

概して、ロシヤ文化史上の大人物の顔には、例へば年取つたツルゲーニエフの顔にしても――此の凡夫のやうな、田舍くさい、百姓風の表情と、最も高貴な貴族、最も名門のロシヤ貴族、西歐社交界の紳士といふやうな表情との結合が認められる。而もその結合たるや誠に自然的に見えて、互ひに妨げるやうなことはない。寧ろ反對にその凡俗の奥底にこそあくまで貴族的なあるものが含まれてゐるやうに思はれる。あの粗野な階級的な意味にでなく、最も高尚な意味に於ける『貴族的』な、權威ある、選ばれた、それと同時に纖細な優雅な文化的な――世界的なあるものが含まれてゐるやうに思はれる。

前に述べた、レ・トルストイの外貌の描寫には猶ほ一つの特徴が落ちてゐる。それは彼の顔が、長い間の、恐らくは波瀾の多い、而も稀らしく幸福な、『立派な』自然と融合した生活を經て來た人の顔であるといふこと、そしてそれは實に族長の顔であり、若しくは年老いたる『異教徒』の顔であり、巨人ニムロッドの顔であり、エローシカ叔父の顔であるといふことである。七十翁

の皺が寄つてゐるにも拘はらず、彼からは凋れない若々しさと、清新さとが香つて居る。また一般に異教徒の偉人に通有なる若干倨傲な思ひ遣りのない冷たさも香つてゐる

これと比べて、ドストエーフスキイの顔は青年時代に於いてすら『若々しくは見えなかつた』のである。而もその落ち窪んだ頰には苦痛の影と皺とが刻まれ、その巨大な禿げあがつた額には理性の明哲さと偉大とが感じられ、その薄い唇は『神聖なる病』の痙攣のために歪んでゐるかのやうに見え、些しく斜視ではあるが、預言者か若しくは惡魔に憑かれた人のやうな眼は、内心を見詰むるが如く朦朧として、言ひやうもなく重苦しい眼附をして居る。だが此の顔面に於いて何よりも一番惱ましいものは、――といふと、それは動搖そのものの中の不動とでも云ふべきものである。若しくは極度の努力を以て急に停止された所の化石した衝動とでも云ふべきものである。

かく兩人の顔は、全く反對してゐるにも拘はらず、時によつて非常に似通つたものに見える。――が、これはドストエーフスキイも亦レ・トルストイと同樣に農民的な、平民的な顔を持つてゐる所爲ではなからうか？『フヨードル・ミハイロウイチは全然一兵卒の如き風采を持つてゐた。即ち平民的な面相を持つてゐた。』とストラーホフも言つて居る。然しながら、吾々文化人にとつては、是等の顔が頗る平民的に見えるとしても、國民自身が亦之を同樣に認めてゐるか如何かは

疑問である。國民は是等の顔を以て、ロシヤ『貴族』についてロシヤ農民の考へてゐる最良のものを含んだ顔と見ないだらうか。然しそれと同時に、身分の高い、矢張り別な世界から出た、兎に角自分達とは沒交渉な、隔りのある顔とは思はないだらうか？

若し完成せる天才の顔が特に國民の顔であるとすれば、吾々はレフ・トルストイに於いても、ドストエーフスキイに於いても未だそんなロシヤ的な顔は持つてゐない。彼等はまだ餘りに複雜であり、情熱的であり、不安である。そこには平靜もなければ、晴明さも無い。又國民が無意識的に何百年といふ長い間、自己の藝術に、ウイザンチンの藝術に、己が聖人義人の古い聖像の中に求めて居るやうな『美しさ』も無い。誠に此の二人の顔は美しくない。概してわがロシヤにはかのホーマアや、青年ラフアエルや、老翁レオナルドの顔の如く、麗はしい、國民的な、また世界的な顔はまだ無かつたやうな氣がする。吾々に殘されたプーシキンの肖像ですら、一八三〇年代のペテルブルグの遊冶郎の樣で、あのチヤイルド・ハロルドのやうな外套を引きかけ、ナポレオン流に胸の上で腕組をして、言はゞバイロン式の物思ひを眼附に見せ、黑奴かサティールのやうに髮の毛を縮らし、肉感的な厚い唇をしてゐる所は、どう見てもロシヤ人中の最もロシヤ的な此の人の內面的肖像とは一致しないものである。果してこれがプーシキンの眞顔であらうか？

同時代の人々の語る所をきくと、彼は急にすつかり容子が變つて、見別けがつかなくなるやうなことが折々有つたさうである。たしか此のやうな瞬間にかのアルキウイアデスがプラトンの所へ來てソクラテスの顔について語つたやうな奇蹟が、行はれたものであらう。此のやうな瞬間にサティールの粗野な外殼の中から本當の神が飛び出したのであらう。プーシキンの全存在には、またその外貌には、彼の詩に於けると同樣、何だか餘りに輕快な、瞬間的な、捉へどころのないやうな、ちよつと地を掠めてすぐ飛び去るやうな、そして外面的肖像には到底現はさるべくもない何物かゞ在る。友人等が彼を呼んで『火花』と云つたのは意味のあることである。實際彼はロシヤ文化の上に天體の如く運行したのではなく、たゞ可能的な、然し彼自身によつてすら實現されなかつたロシヤ的調和——即ちロシヤ的『美しさ』——の前兆として、火花の如く、流星の如く一寸閃いて直ぐ消え去つたのである。而も彼は飛び去りながら、たゞ漠とした不透明な己が外殼を吾々に殘したばかりである。外殼を殘したばかりで、それには內に燃え輝いてゐる核心がない、彼の內面的肖像がない。然らば何人が今新たにプーシキンの此の眞の顔を見出し得るであらう？

しかし、ロシヤ國民が今日に至る迄まだ自分の顔を見出してゐないといふ所に、或は吾々の偉大なる希望が存するのではあるまいか。何となれば、それは、顔の寸法が過去のうちに、プーシ

キンのうちに、またビョートルのうちにあるのでなく、未來の、まだ〳〵知られない、もつともつと大きなもの〻うちに在ることを意味するからである。而して此の未來の、第三の、最後の、そして此の上なく『麗はしい』、此の上なくロシヤ的な、同時に世界的な顔は、吾々が之を現代の最も偉大なる二人のロシヤ人――即ちレ・トルストイとドストエーフスキイとの間に求めんとして、求め得ないものではなからうか？

此の故にこそ、吾々は此の兩者を合して一となし、以て、その間から恰も陰陽兩極の間に於けるが如く雷霆の火花が起りはせぬかと心潜かに期待してゐるのである。その火花さへ起れば、その周圍には大なる猛火が燃えさかるであらう。そしてそれは西方の世界にとつては人神の出現となり、東方の世界にとつては神人の出現となり、この兩世界を合したるものにとつては二者一體となるであらう。

第二篇

藝術家としてのトルストイとドストエーフスキイ

（その創作）

第一章

『戰爭と平和』の最初の數ページに於いて吾々の知つてゐる通り、公爵アンドレイの妻ボルコンスカヤ夫人は、『少し薄黑くなつてゐるむく毛の口髭があつて可愛いその上唇は齒並には短いけれど、それがために彼女の唇は一層可愛らしく開かれ、またそれがため尙一層可愛らしく伸ばされて下唇の上へ垂れる事があつた。』二十章程とぶと、此の唇が再び現はれて來る。小說の始まりから數ケ月過ぎて、『姙娠してゐる小柄な夫人は此の頃少し肥滿して來た。然しその眼や、むく毛の口髭と微笑を含んだ短い唇は、從前通り快活に可愛らしく、ふつくりとしてゐた。』それから二頁程過ぎると、『夫人は間斷なしに喋つてゐる。むく毛の口髭の生えた短い上唇は始終瞬間的に下へ下がつた、そして必要次第に紅い下唇へ觸れた、觸れたと思ふとまた眼と齒とを輝かせて微笑が現はれるのであつた。』公爵夫人はその小姑に當るアンドレイの妹、マリヤ・ボルコンスカヤ姫に、夫が戰爭に行く事を告げる。マリヤ姫は夫人の方へ向き直つて、優しい眼付で彼女のお腹を見ながら、『本當に?』といふ。夫人の顏色はさツと變る。そして溜息をする。『本當ですとも。あ

ゝ、怖ろしい……』といふ。此の時小柄な夫人の唇が下がつた。百五十頁程進むうちに、此の上唇が既に四回も現はれる。そしてその都度異つた表情を見せてゐる。二百頁程過ぎると會話が出るが、『その會話も小柄な夫人の白い齒の上に浮上つてゐるむく毛の唇とその聲のお蔭でどこまでもはづんで行く。』小說の第二編に於いて彼女はお產のために死ぬるのである。アンドレイ公爵は『妻の室に入つて來る。絆切れてゐる妻は、彼が五分間前に見た時と全く同じ姿勢で横たはつてゐる。そして眼は動かず頰は蒼褪めてゐるにも拘はらず、薄黑いむく毛に掩はれてゐる唇を持つた此の美しい小供のやうな顏には、依然として、「私は皆さんを愛してゐます。どなたにも惡いことはしませんでした。それだのにあなたは何故私にこんなことをして下さつたの？」といふ同じ表情があつた。』これは一八〇五年の出來事である。『戰爭は勃發して、その舞臺はロシヤの國境に近づいて來た。』戰爭の樣々の記事を述べる最中にも、作者は次のことを忘れずに傳へてゐる。即ち小柄な夫人の墓の上に天使を像つた大理石の記念碑が建てられたが、その天使の上唇がやはり少々持上つてゐて、宛もアンドレイ公爵がその絆切れた妻の顏に讀んだ所の『何故あなたは私にこんなことをして下さつたの？』といつた樣な表情をしてゐたといふのである。幾年か經つ。ナポレオンはその歐洲征服を完成する。そして既にロシヤの國境を越えつゝある。「ルイシ

ヤ・ゴールイ」（禿山）の靜居に於いて、亡き夫人の息子は『成長し、發達し、頰が紅らみ、攣れた黑い髮の毛が生えた。そして自分ではそれと知らずに、笑ひ悅ぶ時には小柄な亡き夫人と丁度同じ樣に可愛らしい口許の上唇を持上げるのであつた。』

此のやうに最初は生者に、次には死者に、その次にはその墓標の記念碑に、果ては彼女の息子の顏にと同一な肉體的の特徵が繰返され、特筆されたお蔭で、小柄な夫人の『上唇』は吾々の記憶に深く刻みつけられ、抹殺出來ぬ程明瞭に印象されてしまふ。だから吾々が小柄な公爵夫人を思ひ出す時には、否應なしにあのむく毛のある、ふつくりした上唇を思ひ浮べぬ譯には行かない。

アンドレイ公爵の妹マリヤ・ボルコンスカヤ姫は、遠くからも聞える程の『重たい歩み』をする。『これがマリヤ姫の重たい歩みであつた。』彼女は『踵で歩きつゝ、重たい歩調で』部屋に入つて來る。彼女の顏は『赤くなると斑點が出來る。』彼女は兄アンドレイ公爵と彼の妻に就いて擦つたいやうな話をする時にも『顏を斑らに赤くした。』また婿になる人が來るといふので身仕度をさせられる時も、彼女は侮辱された者の如くわが身を感じ、『激して、その顏を斑らに赤くした。』その次の卷でも、ピエールと自分の信仰してゐる老人のことや『神の人々』なる巡禮のことを話し

てゐる内に、彼女は當惑して『斑らに赤くなつた。』 このマリヤ姫の赤い斑點に關する最後の二つの記述の間には、アウステルリツツの戰鬪と、ナポレオンの勝利と、諸民族の大戰爭と、世界の運命を定めるやうな種々の事件が描寫されてゐる。而も此の藝術家は自分にとつて興味ある肉體上の特徴を忘れない、いや最後まで忘れないであらう。吾々はマリヤ姫の輝かしい眼と、重たい足どりと、赤い斑點を否でも應でも思ひ出させられる。成程、是等の特徴は外面的であつて重大でないやうだけれども、その實作中人物の極めて深い重大な內面的、精神的の特質と結びついてゐる。即ち或時は樂しげに持ちあがり、或時はいぢらしく下がる上唇は、小柄な公爵夫人の子供の様な呑氣さと頼りなさとを表はしてゐる。またマリヤ姫の無器用な歩調は、彼女の全人物中に外面的の女性的な魅力が缺如してゐることを示し、彼女の輝かしい眼と、彼女が斑らに赤くなることゝは、共に彼女の內面的の女性美や、貞淑な心の純潔などゝ結び付いてゐる。時とすると、是等の個々の特徴が、俄に一つのまとまつた複雜な、宏大な場面に點火して、それに驚くべき光彩と鮮明さとを與へることがある。

即ち、ナポレオンの侵入前、荒れ果てたモスクワに民衆の蜂起があつたが、その際、群衆の野獸的狂暴を鎭めようとあせつてゐたロストプチン伯は、偶然に手に落ちた、然し全然無辜なウェ

レシチャギンといふ國事犯人をば、間諜と云ひ、『惡漢』と呼び、此の男のために『モスクワが滅びた』かの如く稱した。此の場合などでも其の男の細長い頸と、一體に全身がほつそりして、弱く、脆かつたことが、亂暴な野獸のやうな群衆の勢力に對して、此の犧牲者の如何にも無援孤立なことを表してゐる。

『彼は何處に居る?』と、伯爵が云つた。かう云ふと同時に、彼は細長い頸をした一人の若い男が二人の龍騎兵に挾まれて、家の角の後ろから出て來るのを見た……。その男は『磨かない、踏みつぶされた、細い長靴を穿いてゐた。細い弱さうな兩足には重さうに足械が懸かつてゐた』……。『其奴を此處へ連れて來い!』と伯爵は、上り段の下の處を指しながら云つた。若い男は……指示された處へ重さうに足を運んで來ると、吐息をして、勞働に慣れない細い兩手を、おとなしく膝の上に組んだ……。『皆の者!此のウエレシチャギンといふ男が、モスクワを破滅に陷れた當の惡漢だぞ。』と、ロストプチンが金屬のやうな響のする聲で云つた。ウエレシチャギンは顏を揚げて伯爵の視線を捕へようと努める。然し伯は彼を見ない。『青年の細長い頸には、耳の後ろの處に、繩のやうな血管が青く筋ばつて來た。人々は默々として唯ひし〳〵と詰め寄つた。……「此奴を殺せ!逆賊を誅して、ロシヤ人の名を辱かしめるな!」とロストプチンが叫んだ。』……『伯

爵！』と、又元の靜寂に歸つた群衆のたゞ中からウエレシチヤギンのおづ〳〵した而も芝居染みた聲が洩れた。『伯爵！……私共の上には同じ神様が在します……』またしても彼の細長い頸の上に太い血管が充血した。兵士のうちの一人が鈍い劍で以て彼の頭を毆つた……。ウエレシチヤギンは恐怖の叫聲を發しながら、兩手で顏を掩ふたまゝ人込みの方へ突進した。彼がよろめき當つた一人の丈高い青年は、ウエレシチヤギンの細長い頸に兩手を捲きつけ、變な叫聲を揚げながら、彼と一緒に咆え狂ふ民衆の足下に倒れた。』此の兇行の後、それにあづかつた當の人々は、『苦しさうな氣の毒さうな表情をしながら、血と埃だらけになつた青い顏や、斬られた細長い頸のついてゐる死骸を眺めた。』

犧牲者の內面的の精神狀態に就いては一言も無いが、五頁の間にこの『細い』といふ言葉は、種々な結合によつて（即ち細い頸、細い足、細い靴、細い手などゝ）八回も繰り返されてゐる。——而も此の外面的な一特徵がウエレシチヤギンの內面的狀態と彼の群衆に對する關係を遺憾なく描寫してゐるのである。

斯くの如く見ゆるものより見えざるものへ、外面的のものより內面的のものへ、肉體的のものより精神的のもの、若しくは少くとも『魂的のもの』へと進むのは、レ・トルストイ特有の藝術

的手法である。

是等の屢々反復さるゝ作中人物の外貌に於ける特徵が、最も深い根本思想や、全作物の中樞と結び付けられてゐる事も時々ある。即ち、クトウーゾフのだぶ〳〵した體軀の重々しさと、その懶げな老人らしい遲鈍と不精とは、彼の物に動じない靜思的な心の不動、基督教的と云はんよりは寧ろ佛教的な自己棄却、運命若しくは神の意志に對する服從等を表はしてゐる。此の原始的な英雄の——レ・トルストイの眼から見れば最もロシヤ的で國民的なる英雄の——無活動若くは無爲は、かの徒らに活動的な、輕薄な、躁急な、自負心の强い西歐文化の英雄ナポレオンと好個の對照をなすものである。

アンドレイ公爵はツアレウオ・ザイミシチエに於ける第一回の軍隊檢閲の折に總司令官を次のやうに觀察してゐる。『公爵アンドレイが彼と逢はなくなつてから此の方、クトウーゾフは一層太つて、だぶついて、脂ぎつて來た。』彼の顏にもその姿勢にも疲勞の色が見られた。彼はその敏捷な小馬に乘つて、重たさうに搖り動かされてゐた。』やがて檢閲を終つて、宮廷へ騎り込んだ時は、彼の顏には『大役を爲し終つて樂になれると思つてゐる人の安心した歡喜が表はれてゐた。彼は左足を鐙から脫し、上體を前屈みにして、その努力のために額を顰めながら、やつとのこと

でその足を鞍の上に揚げた。それから彼は馬の背中に片膝で以て身を支へ、咳拂ひを一つして、さて、コザツクや副官の支へてくれる腕の上に身を卸した。……そして、潜り込むやうな足取りで歩いて行つて、重たさうに階段を上つた。彼の重みを受けて階段はぎい〳〵と軋つた。『彼はアンドレイ公爵から父公爵の計を聞いた時、『重さうに、胸一杯溜息を吐き、そのまゝ無言でゐた。』が、やがて『アンドレイ公爵を抱いて、その肥滿せる胸に押しつけ、長いこと彼を離さなかつた。彼が彼を離した時、アンドレイ公爵は、クトウーゾフのむつくりした唇がぶる〳〵と震へて、眼には涙を湛へてゐるのを見た。彼は吐息をつき、兩手で腰掛にとり縋つて起ち上つた。』尙次の章に於いても、クトウーゾフは自分の肥つた頸の皺を伸ばしながら重さうに起ち上つた。』

これにも劣らず深遠な、殆んど神秘的な意味を持つてゐるのは、も一人のロシヤの英雄プラトン・カラターエフの『圓み』の印象である。此の圓みは、藝術家の眼から見れば國民的なロシヤ精神の根本要素と思はるゝ、一切の單純なもの、自然と一致するもの、天然的なものゝ永久不變の世界を體現してゐる。閉された完全な自己滿足の世界を體現してゐる。『プラトン・カラターエフは、永久にピエールの心に於いては、ロシヤ的な善良な圓滿な凡てのものゝ、最も強い貴い思ひ出であり體現であつた。翌日、未明にピエールがその隣人を見た時に、何となく圓い

といふ第一印象が全く確められた。即ち、佛蘭西外套を繩の帶で卷いて、頭巾を被り、草鞋を穿いたプラトンの全體の樣子は、ほんとに圓いものであつた。頭は全く圓かつた。背も胸も肩も、それからいつも誰かを抱擁しようとするかの樣に持上げる兩手すらも圓かつた。心地よげな微笑も、大きな鳶色の優しい眼も圓かつた。ピエールには、何だか此の人の匂ひのうちにすら、圓いものがあるやうに感じられた。』こゝに一個の外部的な、殆んど幾何學的の單純と明瞭との極度にまで達してゐるやうな、肉體上の特徴をとつて、宏大な最も抽象的な普遍化を表はしてゐるのである。この普遍化は、單にトルストイの藝術的方面のみならず形而上學的宗教的方面をもまた創作全體の最初の內面的根源と結びついてゐる。

彼に於いては、人體の部分々々でも、此のやうに忘るべからざる普遍的な表現を受けて居る。例へば、ナポレオンとスペランスキイの手、即ち權力ある人々の手の如きそれである。聯合軍の前に於ける兩國皇帝の會見の際、ナポレオンは一人のロシヤ兵にレエジョン・ド・ノオル勳章を與へるが、その時、彼は『白い小さな手から手套を取り、それを引き裂いて棄てる。』そこから數行程行つて、『ナポレオンはその小さなふつくりした手を引戻して居る。』またニコライ・ロストフの思出の中にも『白い小さい手をした得意然としたボナパルト』が出て來る。それから次の卷に

は、ロシヤの外交家バラーシエフとの談話中に、ナポレオンが『その小さなふつくりした手で』力の範つた、問ひ質すやうな身振りをしてゐる。

手ばかりで滿足せず、此の藝術家は吾々に英雄の裸體を丸出しにして見せ、人間的の權力や威嚴の空しき表號を脱がせて、吾々共通な原始的本性——即ち動物的本然性に引戻して居る。そこで、此の『半ば神の如き人』にも亦吾々と同様の無力な肉體がある。使徒ポーロの所謂『死の體』がある、『肉』がある。ナポレオン自身の目には他人が『大砲の餌食』と見へたさうであるが、彼にも亦同様な『大砲の餌食』があることを吾々は會得する。

ボロデイノの合戰の前日、朝、皇帝は天幕の中で身裝を整へた。『彼は鼻をくん〳〵言はせ、咳拂ひをしながら、或は厚ぼつたい背を、或は肥つた毛深い胸を、刷毛の方に向けては近侍の者にその體を擦らせた。もう一人の近侍は指で壜の口を押へながら、唯自分だけが何處にどの位ふりかければよいかを心得てゐると云はんばかりの様子で、皇帝のさつぱりとした體にオデコロンの香水をふりまいた。ナポレオンの短い髪の毛は濡れて、額の上に亂れてゐた。然し彼の顏は、脹れた黄色い顏ではあるが、肉體的の滿足を表はしてゐた。「それもつと、それもつときつく」と擦つてゐる近侍に言ひつけながら、彼はもじ〳〵したり、咳拂ひをしたり、背を屈めて見たり、肥つ

た肩を差し出して見たりした。』

ナポレオンの白いふつくりした手は、そのさつぱりとした肥つた全身と同じく、藝術家の眼から見れば、明かに肉體的勞働の缺乏を意味し、この成上り『英雄』が汚ならしい手をした『下層民』即ち勞働者の肩の上に坐してゐる遊蕩階級に屬してゐることを示してゐる。けれども彼は此の勞働階級の者をば、『大砲の餌食』と云つたやうな無關心で、白い小さな片手を一度動かすことによつて死地へ送つてゐるのである。

スペランスキイも亦『白いふつくりした手』を持つてゐる。けれどレ・トルストイは此の手を描く場合に、その好んで用ひる反復と集注の手法を幾分濫用し過ぎたきらひがある。即ち『アンドレイ公爵はスペランスキイの一擧手一投足を觀察してゐた。こないだまでは何でもない神學生であつたが、今ではその掌中に、——あの白いふつくりした手のうちに——ボルコンスキイの思つた如く、ロシヤの運命を握つてゐるのであつた。』『アンドレイ公爵は何人にも斯様な優しい顏の白さと、殊に心持幅廣いけれども稀らしくふつくりとした優しい白い手を見たことがなかつた。此の様な顏の白さと優しさとを、アンドレイ公爵はたゞ長い間入院してゐた兵卒にのみ見たことがある。』それから少し經つて、彼は再び、『圖らずもスペランスキイの白い優しい手を見る。それ

は普通權力を握つてゐる人々の手に見らるゝ如きものであつた。彼の水晶のやうな眼眸と、此の優しい手とは何故といふこと無くアンドレイ公爵をいら〳〵させた。『これで澤山のやうな氣がする。如何に記憶力の弱い讀者とても、もはやスペランスキイが白いふつくりした手を持つてゐるといふことを忘れるものではない。然るにこの藝術家にはまだ不足なのである。二三の場面を過ぎると倦むことを知らない執拗さを以て同一のことがこま〴〵と繰返されてゐる。『スペランスキイはアンドレイ公爵にその白い優しい手を差しのべた。』そして直ぐまた『スペランスキイはその白い手で娘を撫でた』とある。果ては此の白い手が惡魔的誘惑のやうに追窮して來る。小柄な公爵夫人の上唇と同樣、まるで白い手だけが體全體から離れて、ゴーゴリの『鼻』のやうに、勝手氣儘な行動をとり、自己獨特の、奇怪な、殆んど超自然的な生活を營んでゐるのである。

嘗てレ・トルストイは藝術家としての自己とプーシキンとを比較するに當り、兩人の異る所はとりわけ次の點にあるとベルスに語つた。即ち『プーシキンは藝術的の微細な點を叙述する場合、之を手輕くやつてのけ、それを讀者が氣がつくか了解するかといふやうなことには屈託してゐない。所が彼は讀者に明瞭に諒解さるゝまでは、此の藝術的の微細な點をたち廻つて讀者の身に迫る』と。此の比較は一見して明かなる以上に肯綮を穿つてゐる。實際レ・トルストイは『讀

者の身に逼り』讀者を倦怠せしむることを恐れない。そして一點を掘り下げ、反復し、固執し、プーシキンならば一見不確かな無造作な、然し、其實飽くまで忠實な確かな筆を以て辷り行く所を、彼は一塗また一塗りと色彩を濃厚にする。兎角プーシキンは、特にその散文に於いて詞乏しく、且無味乾燥なるが如く、また彼は少ししか與へないやうに思はれる。それ故に我々にはもつともつと欲しいやうな氣がする。が、レ・トルストイは吾々が最早それ以上望みようの無い位與へる、——從つて吾々は喰ひ過ぎないまでも滿腹してしまふ。

プーシキンの叙述は、古代フロレンスの名匠の輕い水彩畫を思はしめる。或はまた輪廓を隱さない、朝霧のやうな、一樣に薄暗い、輕い透明な色彩を帶びてゐるポンペイの壁畫を思はしめる。レ・トルストイは偉大な北方の巨匠達よりも、もつと重苦しい粗野な、然しそれだけまた力强い油畫の色彩を用ゐる。即ち、深い底知れぬ程黑い、而も生々とした陰影と相並んで、一擧に暗黑を照破して其の中から何等かの個々の相——赤裸々の肉體や、劇しい動搖中の着物の皺や、情慾乃至苦痛のためにしかめた顏の一角など——を現出せしめ、之に驚くべき、殆んど衝き倒してアッと言はせるやうな生命力を與へる所の、突如として眼を眩ますばかりの、何物をも射拔かずには措かないやうな光線を見るのである。かうした所を見ると、此の藝術家はどうも行ける所

まで行きつめた自然的のものに於いて超自然的なものを求め、行ける所まで行きつめた肉體的のものに於いて超肉體的のものを求めてゐるらしい。

思ふに、全世界の文學中人間の肉體を、言語を以て描くことに於いて、レ・トルストイに匹敵する作者を見ない。重複法こそ濫用してゐるけれど、それも先づ稀なことで、大概はこれによつてその必要とする所を把握してゐる。而して彼は作中人物の外貌叙述の際決して他の作者、有力にして經驗ある作者にすら免かれない、様々にして複雑な肉體的特徴の冗慢やその堆積に苦しむやうなことはない。彼は的確で、單純で、出來るだけ簡短である。彼はたゞ僅かの小さな、誰も氣の附かない、個人的な特徴のみを擇び取つて、それを一時にでなく、漸次に一つづゝ拉し來り、そして物語の全經過にあてはめ、事件の綾へ、活劇の生きた織物の中へと織り込んで行く。

だから、ボルコンスキイ老公爵の初めて現はれて來た時なども、吾々は最初たゞ『粉のついた鬘を被り、小さな乾枯らびた手と、何うかして蹙め面をする折に聰明な若々しい輝やかしい眼の光輝を陰蔽する灰色の垂れ下つた眉を持つた身丈の高くない老人の姿』と云ふやうに、ほんの四五行に亘る普通一般なちよつとしたスケッチを見るに過ぎない。此處にも一つ『輝やかしい眼の光輝』といふ餘計な反復があるといへばいへる。彼が旋盤に向つて仕事をするときには『その小

さな足の運動によつて、また筋ばつた乾枯らびた手の確乎とした壓付け工合によつて、(吾々は既に彼が乾枯らびた手を持つてゐることは知つて居る、けれどもレ・トルストイは己が主人公の手に逆戻りするのが好きである。)この老人には未だ頑強な、初老の耐久力が十分にあることが分る。」彼がその娘マリヤ姫と話をしてゐるときには、『冷たい微笑のうちにまだ〳〵丈夫な黄色つぽい齒を出すのである。』それからテーブルに着座して、例の幾何學の課業を初めながら、娘の方に身を屈める時は、彼女は、もう疾うから慣れてはゐるものゝ『父の老人染みた鋭い煙草の臭氣に取卷かれてゐるやうに自分を感ずるのであつた。』こゝに至つて彼の姿は躍如として吾々の眼前に現はれてゐる。即ちその背丈、體格、手、足、眼、眉毛、眉の位置、齒、齒の色、微笑、さては各人特有の香に至るまでも。

ウロンスキイが初めてアンナ・カレーニナに會つた時の彼の印象によつて、吾々は次のことを知ることが出來る。それは彼女の外貌を見ると、一目して、彼女が上流社會に屬してゐることがはつきりする。また彼女が極めて美しいこと、その唇の紅いこと、睫毛の濃いために黝ずんで見える輝やかしい灰色の眼を持つてゐること、更に『或る何物かの過剰が彼女の全身に漲つてゐるので、彼女の意志が伴はなくも、それが或は眼付の輝きに或は微笑のうちに現はれてゐる』とい

ふことなどがはつきりする。それから又物語の進行するに連れて、目立たぬ樣にだん〳〵特性に特性が加はり、特徴に特徴が加はつて來る。即ち、彼女がウロンスキイにその手を差出した時、彼は『彼女が一種特別な力を籠めて、しつかりと握りしめ、思ひ切つて彼の手を振つたのを』悅ぶ。花嫁のドルリと話をしてゐる最中にも、アンナはその『力の籠つた小さい手で』彼女の手を取る。而もその手の關節は『細くてちつぽけで』ある。剩へ吾々は指の形までも見せられる。即ちオブロンスカヤ夫人の娘ターニヤは戲れながら『先の細い白い指から、ゆるい指環を拔いてゐる。』

アンナ・カレーニナの手には、他の多くの作中人物のそれと同じく、顏よりも更に著しい表情がある。(これは恐らく手といふものが、人の身體のうちでたゞ一つ常に露出されて居り、また原始的本性に最も近い動物的無意識的な部分であるからであらう。)即ちアンナの手には、彼女の全人物の魅力があり、力と優しさとの結合がある。吾々の識り得る所によると、彼女は舞踏會などに於いて多くの人々の中に立つてゐると、『常に際立つて直立の姿勢をとつてゐる。』また車から降りたり、部屋の中を歩き廻る時には、彼女は『敏速な思ひ切つた歩調で、不思議にも輕やかにその可なり肥つた體を運び行く。』なほまた舞踏をする時には、その動作に明かな優雅と確實と輕

妙とがある。』更にまた、ドルリの所へ訪ねて來て帽子を脫ぐ時には、その何にでも絡みつく黑髮が『一面にちゞれてゐる。』さてまたある時には『縮れ髮の我儘な短い捲毛がいつも首や頸頸に亂れかゝる。』此の動ともすれば亂れかゝる束髮の手に負へない縮れ毛にも亦、輝き過ぎる程光る眼色や『眼と唇との間に浮ぶ』無意識の微笑に於けると同じく、緊張味と、情火に燃えんとする『或る何物かの過剩』がある。最後に、彼女が舞踏會に出掛けるとき、吾々は、彼女の肉體の肌を見る。黑い天鵞絨の思ひ切つて襟をきり下げた着物は、古い象牙細工のやうに磨きあげられた、肥滿した肩や、胸や、圓々した腕を露出してゐる。此の身體の光澤と、頑丈さと、『圓味』とは、プラトン・カラターエフに於けるが如く、レ。トルストイに取つては甚だ重要な深遠な神秘的な特徴であつて、實にロシヤ美の特性をなしてゐるものである。

是等の散亂せる個々の特徴が、互ひに相補ひ、互ひに相照應してゐる所は、恰も美しき彫像に於いて一肢體の形が常に他の肢體の形と照應してゐるやうなものである。——例へば先の細い指、古い象牙細工のやうに磨き上げられた頸、抑え難い眼の輝き、動作の生々した輕妙さ、一面に縮れてゐていつも亂れかゝる髮の毛の手に負へぬ捲毛、——これ等の微細な個々の特徴が皆實によく調和されてゐるので、それが讀者の想像の裡に、自然と知らず識らず、一つの纏つた、生きた

唯一の、特別な、個人的な、忘るべからざるものに結合されるのである。だから吾々は此の一卷を讀了すると、何だかアンナ・カレーニナをまざ〳〵と自分の眼で見たやうな氣がする。そして若し彼女に出逢つたなら、直ちにそれと分るであらうと思はれる。

彼一人にのみ此の程度に賦與された所の、「肉の洞察」とでも名づけ得べき此の才能は、時に——勿論隨分稀にではあるが——トルストイを驅つて過度にまで引き入れる。

生きた肉體とその動作を記述することは、彼に取つては極めて容易く且愉快であるから、彼は動もするとまるで弄ぶやうに、此の容易さを濫用してゐる。吾々は何も彼を非難するわけではないが、彼は、拍車をいれられた馬がどんな工合に脚を動かし始めるかまでも描出してゐる。即ち『ジヤルコフは馬に拍車を觸れた。すると馬はどちらの脚から駈け出すべきかを知らないで、やきもきしながら、二三度足搔いたが、やがて方針を定めて駈け出した。』と記してゐる。また彼は『アンナ・カレーニナ』の開卷數行の所から、慌てゝ吾々のまだ何も知らぬステパン・アルカーデイエウイチ・オブロンスキイが『肥滿したさつぱりした身體』の持主であることを傳へ、『彼がどんな工合にその廣い胸腔の中へたつぷりと空氣を吸ひ込むか』、また彼が『外向の足でその肥滿した身體を輕々と運んで行く例の輕快な歩調』などを、解剖學的の精緻さを以て描寫してゐる。此

の最後の特徴は頗る注目に値する點である。何となれば其處には兄と妹と、即ちステパン・アルカーデイエウイチとアンナ・アルカーデイエウナとの家族的の類似が認められるからである、——彼女も亦同じく元氣な歩きつきで、『妙に輕々とその肥滿した身體を運んでゐる。』假令これ等のことが皆贅澤のやうに思はれても、藝術に於ける贅澤は必ずしも無駄事ではない。却つて必要以上に必要なことが往々ある。けれどもこゝになほ、『戰爭と平和』に出て來る何だか名も無い聯隊長のやうに、現はれたかと思ふとすぐ消えてしまふ第三流の人物が居る。彼が吾々の目前にちらりと現はれるや否や、吾々は早くも彼が『肩から肩までの幅よりは胸から背までの厚さがもつと厚い』といふことや、彼が『心持背を屈めて、一歩毎にはね上るやうな足取りで』隊の正面を歩くことなどを知る。此のはね上るやうな足取りが僅か五頁のうちに四度も繰り返されてゐる。或はこれは觀察が確實であり、繪畫的であるかもしれない。けれどこればかりは全く不必要なものである。贅澤でなしに、無駄事である。アンナ・カレーニナが『尖端の細い』指を持つてゐることを知るのは、吾々にとつて頗る興味あり且大切なことである。けれどもレーウインとオブロンスキイに食事を出してゐる韃靼人の家僕が大きな臀部を持つてゐたことを傳へて貰はなくも、吾々は別に失ふ所はない。尤もトルストイのこんな缺點は語るにも及ばないやうではあるが、藝術家

の有する最も個性的な特殊的なものは、彼の程よく持ち合して居るものに於いてよりも、彼の餘りに持ち過ぎてゐるものに於いて、最も明瞭に發揮されるものであるから、玆に言はざるを得ないのである。

人間の身振りで物を言ふことは、言葉で物を言ふよりは單調であるけれど、その代り、一層直接で、明白で、感動せしめる力も豐富である。言葉では容易に僞ることが出來るが、體のこなしや、顏の表情ではさうやす〳〵とは行かない。人の眞實なる隱れた本然性をむき出すのは、言葉よりも、體のこなしや、顏の表情の方が一層早い。一瞥の視線も、一筋の皺も、顏筋の一寸した微動も、言語では到底言ひ現はせないことを傳へ得るものである。これ等の無意識的な、不隨意運動の連續が、顏面その他凡ての外貌に刻印され重疊される時、吾々の稱して顏面表情と呼ぶものを形成する。尤もそれは亦肉體表情と名づけてもよからう。何となれば啻に顏にばかりでなく、體の何處にもそれ〴〵表情があり、各自の精神的透明性は各自の顏のやうなものであるから。ある特定の感情は吾々にそれ相應の動作を起さしめ、またそれと反對に、ある特定の習慣的運動は吾々をそれ相應の心的狀態にひきよせる。祈禱する人は腕を組合せて跪き腕を組合せて跪く人は自分を祈禱の心持に近づける。斯樣に、內部的のものから外部的のものへと不斷の流があ

るばかりではない、外部的のものから內部的のものへと不斷の流が存在してゐるのである。

レ・トルストイは其追隨を許さぬ技巧を以て、此の內外兩面の交互的連繫を用ひて居る。音を發してゐる絃はそれに應じて隣接の靜止せる緊張した絃を震動せしめずには措かない。この普遍的な、寧ろ機械的な共鳴の法則によつて、人の泣き若しくは笑ふのを見ると自分も泣き若しくは笑ひたくなる。この無意識的な模倣衝動の法則によつて、吾々は、之に類する記事を讀む際、吾吾自身の體の表情的運動を支配してゐる神經及び筋肉中に、藝術家がその取扱ふ人物の外貌について叙述してゐる運動の始まりを感ずるのである。だから吾々は、吾々自身の身體に於いて無意的に行はれて居る此の共鳴的經驗によつて、つまり、最も確實な、眞直な、手近な途をとつて、彼等の內面的の世界へ立入り、彼等と共に生き、彼等の內に生き始めるのである。

かのイワン・イリイチが苦しさの餘り「ネ・ハチウ！」（厭だ！）と叫び出して、最後の『ウ』を延ばしたため、三日の間『ウ！ウウ！ウ！』と叫び續けてゐたといふことを讀む時、吾々は人間の言葉が無意味な動物的な叫喚に轉ずる恐るべき經驗を想像するに難くないばかりか、親しくこれを實驗することも容易である、——また啻に思想を以て想像を以てばかりでなく、吾々の肉體的感受性や、常に吾々の肉體のうちに感じらるゝ苦痛に對する覺悟の經驗に徵して、吾々とても矢張

そこへ到ればあの怖ろしい無意味な『ウ』といふ叫びを出さねばならないその苦痛の程を推測することも容易である。靜止の絃ですら響ける絃に應へてゐる。讀者の心は、描寫されつゝある主人公等の肉體に本能的に無意識的に模倣してゐる自分の肉體を透して、彼等の心の奥に入り、謂はゞ再籍身するのである。

また、トルストイに在つては、人間の肢體の一運動乃至一狀態と雖も時として、無限に複雜な多樣な意味を受けてゐる。

ボロデイノ戰鬪の後、負傷者を收容した天幕の中で、血に染まつた前掛を着け血だらけの手をしてゐる一醫師が、『葉卷煙草の汚れぬやうに、それを拇指と小指の間にはさんでゐる』が、あの指の樣子は實に、凄慘な仕事の絶間ないことや、嫌忌の情の缺如してゐることや、長い習慣のために傷や血に對して平氣なことや、倦怠してゐることや、氣をまぎらさうといふ願望などを表明してゐるのである。このやうなあらゆる心的狀態の綜合が、一つの小さな肉體的の機微のうちに――僅か半行しか占めない描寫の二本の指の位置に集中されてゐるのである。

クトウーゾフがバグラテイオンの一部隊を確實な死地に送らうとして居ることを知つた時、アンドレイ公爵は、總司令官なるものは斯のやうな自信を以て數千の人命を犧牲にする權利がある

ものかしらといふ疑を懷く。そして『クトウーゾフをしげ〳〵と見守る。その時端なくも彼の眼に入つたのは、彼から半「アルシン」の所に居るクトウーゾフの顳顬に貫通銃創の縫ひ目がきれいに洗つてあること、片眼の潰れてゐることゝであつた。』『いや、此の人なら正しくこれだけの人々の滅亡を平氣で口にする權利がある！』と、ボルコンスキイは思つた。此の場合に於ても亦一寸とした肉體上の微細な點が――即ちクトウーゾフの銃創の縫ひ目と潰れた眼とが――國民の運命を左右する人々の責任とか、軍國的組織と個人的生命との關係といつたやうな複雜な、抽象的な、道德的な問題を解決してゐるのである。

イワン・イリイチの病氣に就いて、醫師の口を籍りて科學が彼に語る一切のことよりも、また彼自身が平素死について考へてゐた條件的な思想全部よりも、偶然自分の髪の毛を鏡に見たことの方が、ヨリ多く彼の現實の恐るべき狀態を彼に示してゐる。『イワン・イリイチは髪を撫でつけ始めた、そして鏡を見た。すると、その髪の毛が蒼白の顏にぴツたりとくツついてゐるのが怖しかつた。特にそのことが氣味惡かつた。』如何なる言葉を以てしても、此の鏡の中に見出されたやうにはツきりと死に對する動物的恐怖を言ひ現はすことは出來まい。また病人に對する健康者の平氣や、死者に對する生者の冷淡をば、イワン・イリイチは人の言葉のうちにでなく、たゞ『そ

の娘婿なるフョードル・ペトローウイチの白いカラーできつくしめつけられてゐる筋ばつた頸や、きちんとした黒いズボンをはめられてゐる強さうな股に於いて』感じてゐる。

ピエールとワシーリイ公爵との間には甚だこみ入つた擽つたいやうな微妙な關係がある。ワシーリイ公爵はその娘エレンをピエールの許へ嫁はせたいと思ひ、ピエールの方から申込んで來るのを待ち兼ねて居る。ピエールはなか〳〵決心がつかない。ある日彼は此の父親と娘と三人して話してゐたが、急に起ち上つて歸る用意をし、そして最早時刻の晩いことを口に出して言つた。

『ワシーリイ公爵は恰もピエールの言つたことがあまりに突拍子もないので聞き分けることが出來なかつたといふやうな顏付をして、さも不審さうにきツと顏を視た。が、忽ちこの嚴格な表情は一變してしまひ、ワシーリイ公爵はだしぬけにピエールの手をひつぱツて彼を着坐させ、親しげに微笑した。『レーリヤ、お前何してるんだ?』と彼はすかさず娘を顧みた。『それからまたピエールに打向つて、籤から棒にセルゲイ・クジミチとかいふ男の詰まらぬ挿話を話しかけた。『ピエールは微笑した。然しその笑ひかたによれば、今ワシーリイ公爵のねらひ所がセルゲイ・グジミチの挿話にあるのでないといふことは彼に解せたらしかつた。ワシーリイ公爵も亦ピエールが之を解したことを感づいた。と思ふと、ワシーリイ公爵は不意に何かつぶやきながら出て行つた。ピエー

ルの眼には、ワシーリイ公爵でさへ當惑したらしく見えた……。彼はエレンを顧みた、——すると彼女も當惑してるらしかつた。そして彼女はその眼付で『あら、あなたこそ罪な人だわ。』と云つてゐた。レ・トルストイに在つては、一つの微笑も、一つの顏面表情も、斯くの如く複雜な多角的な價値を有して居る。即ちその一表情が掴み難い半意識的の思想や感情となつて、多くの鏡に對する一光線の如く、また樣々な反響に對する一高音の如く、どこまでも周圍の人々の顏に心に反映して來るのである。

ピエールはナターシヤの最初の許婚者アンドレイ公爵の死んで後、長い間の別れの後に、彼女と再會する。彼女の變りかたがあまりに甚しいので、彼はすつかり見違へてしまう。『いやさうぢやない。こんな女でない。此のきつい、痩せこけた、蒼褪めた、ふけた顏つき！　これが彼女であつてたまるものか。これは彼女の影に過ぎない。』と、彼は考へる。所が此の時マリヤ姫が『ナターシヤ！』と呼びかけた。『すると、あの注意深い眼を持つた彼女の顏が、まるで錆びついた扉でも開く時のやうな根氣と無理とを帶びて、漸くにつこりと笑つた。と同時に此の開かれた扉の中から、急に、思ひも寄らなかつた、殊に今の今思ひも及ばなかつた、長く忘られてゐた幸福が薫つた。そしてピエールを囚へた。薫つて、彼の全身を囚へて、彼の全身を丸呑みにしてしまつ

た。彼女がにツこり微笑すると同時に、最早何等の疑念もあり得なかつた。これが正しくナタ
ーシヤであつた。で、彼は急に彼女に對して愛を感じた。

此の場面に於て、マリヤ姫の發した言葉は『あなたはあの方が分らなくつて?』といふ四語に過ぎなかつた。然し此の場合、ナターシヤの無言の微笑の方が言葉よりも遙かに力あることを、また事實此の微笑がピエールの運命を決定し得たことを、いや決定させずには措かなかつたことを、吾々は感ずるのである。

トルストイに於ては啻に生きた人ばかりでなく、死んだ人まで『物を言つて居る。』小柄な公爵夫人の顏は棺の中に横たはつても亦、生きて居た時と同じく、依然として『まああなたは私に何をして下すつたの?』と語つてゐた。

動物の眼と雖も『物を言つて居る。』競馬の折、ウロンスキイの馬が脊椎を折つて倒れたので、彼がそれを起たせようと思つて、胴腹を靴の踵で蹴飛すと、『馬は動かずに、その鼻を地に衝込んだまゝ、その物言ふやうな眼つきをして主人を見あげた。此の動物の眼付はあらゆる人間の言葉よりも表情に富んでゐる。

彼はまた肉體の動作を以て、音樂や歌曲の諸調のやうな摑み難い特殊の感じを描いてゐる。『聲

樂隊長なる皷手は兵卒の合唱者一同を屹つと見やつて、眉を顰めた。が、やがて凡ての眼が自分に集つたのを見てとると、彼はまるで腫物にでも觸るやうに、兩手で以て、何だか眼に見えぬ貴重品を頭の上に持ち上げ、そして約數秒の間それを支へてゐた。と思ふと突然絶望的にそれを投り出した。『あゝ汝、わが伏屋よ、伏屋よ!わが新しき伏屋よ!』と。そして二十の聲がそれに和した。

同じ筆法で、最も肉離れのした內面的狀態を、手にとるやうな外面的肉體的動作の言葉に移しながら、彼はボロデイノ戰鬪の後にナポレオンを襲ふた精神的無氣力の感を傳へてゐる。『夢の中で、よく惡漢に襲はれる時には、その人は夢ながらも腕をしごき、その惡漢を毆り殺さずには措かない(自分ではさう思つてゐる)やうな怖ろしい怪力をこめて、相手を毆るのであるが、而も自分の手は力なくぐにや〳〵になつてボロか何ぞのやうに垂れ下つてゐるのを感ずるものである。彼は全くこんな夢心地の裡に在つた。』

トルストイに取ては、原始的な根元的な大伽籃のやうな感情も、吾々の內面的雰圍氣のうちに埃の如く浮遊して居る微細な分子のやうな感情のアトムも同樣にすなほなものである。山をも動かすその手はこれ等のアトムをも操縱して居る。そして後の場合は恐らく前の場合よりも更に驚

くべきものであらう。彼は、概括的な、文學的、條件的、藝術的なものを皆傍に打捨てゝ置いて、あらゆる感覺のうちに、その最も小さな刺とも言ふべき最も特殊な、最も個人的な、最も獨特なものゝみを探索し、且その刺をば磨いで〳〵、始んど病的な程の鋭さにまで細くする。だからさうなつた刺は針のやうに突き刺さずにはおかない。從つて吾々はもう何うしたつて此の刺から免れるわけには行かない。斯くして彼の感覺の特性は永久に吾々の所有となる　遂に吾々はそれを讀んでゐる間のみならず、現實生活に立歸つた後に於いてまでも、彼と同樣な感じをするに至るのである。謂はゞ、レ・トルストイの作品を讀んだ人々の神經の感受性はそれを讀む前に比べて幾分別なものになつてしまふのである。

レ・トルストイの効果の秘訣は、就中彼が人の氣のつかない、餘りに平凡なものを觀、また平凡なればこそ意識の光に照らされる時は非凡なものに見える所のさういふものを把握した所にある。例へば、微笑は顏面のみならず、音聲のうちにも反映するものであるから、聲も亦顏と同樣に微笑し得るといふやうな、一見あまりに平凡な、容易な、而も數千年の間多くの觀察者の注意を逸してゐた所の發見をまつさきに彼がして呉れたのである。プラトン・カラターエフは夜間、ピエールにその顏も見えないやうな闇の中から、『微笑のため變つて行く音聲で』彼に何事か話し

かけてゐる。

かうした、原始的細胞からの如く、小さな驚くべき觀察と發見から成立つてゐるのが、彼の作品の基礎であり、その生ける織物の全部である。

善良なる主婦アニシヤ・フヨードロウナは、極めて感じの好い微笑を含んだ女であるが、彼女は手製の食物でお客達を饗應して居る。『その凡てにアニシヤ・フヨードロウナの香があつた、彼女が反映されてゐた、彼女の味があつた。その凡てに豐潤と、清楚と、純白と、快い微笑が反映してゐた。ピエールにとつては『プラトン・カラターエフの香のうちにも何となく圓いものが』あつた。して見ると、顏の表情や身體の表情は、啻に音聲にばかりでなく、食物の味にも、人々の香にも在り得るといふわけである。彼は亦聽覺に於いても同樣な思ひがけぬ發見をして居る。即ち、彼は、馬蹄の響が『透明な』ものにきこえるといふことを氣づいた第一人者である。

彼の言語は常に單純で、中庸を得て居るから、附加語の過剩に苦しむやうなことはない。けれども、一旦或る感覺の特性を傳へるやうな場合になると、その時は彼も附加語を惜みなく用ふる。『突然彼（イワン・イリイチ）は（一）既に知つて居る、（二）古い、（三）微かな、（四）づきゝする、（五）執拗な、（六）靜かな、（七）重い痛みを感じた。』一つの名詞に七つの形容詞

がついてゐる。而もそこに重複もなければ一つの冗漫もない。それ程イワン・イリイチの痛みは、そのあらゆる細かな委曲に於いて吾々に興味がある。

感覺があまりに微細で新らしく、最早や如何なる言葉の綾を以てしても迚も表現出來ない場合には、彼は個々の音の接合や、小供又は原人が言葉を造る際執つた表現法――即ち自然音の模倣を用ひて居る。『アンドレイ公爵は』夢うつゝの中に、『何だか低い、囁くやうな聲を耳にしたが、その聲は「イ、ピチ・ピチ」、次に「イ、チ・チ」、そしてまた「イ・ピチ・ピチ・ピチ」と、「イ、チ・チ」と、ひつきりなしに調子を取つて續けるのであつた。それと共にアンドレイ公爵は、此の囁くやうな音樂を聞きながら、自分の顏の眞上のあたりに、細い針か木片かで成つて居る何とも不可思儀な透明な建物が建てられてゐるのを感じた。

その上彼は、（これは隨分苦しいことであつたけれども、）その出來上つた建物の崩れぬやうに氣を揉みながら釣合を保たねばならぬ義務をも感じた。けれどその建物は、やつぱり崩壞した。するとまた調子よく囁く音樂に合せて、一本一本と建直された。『伸びる！伸びる！擴がる、ます〳〵伸びる。』と、アンドレイ公爵は獨語する。『そしてピチ・ピチ・ピチと、チチとピチ・ピチ――ブーンと、蠅が彼の顏に突當つた。』

イワン・イリチは今や死なうといふ時に、其日食べさせられた梅の煮たのを想ひ起し、それと同時に、『小供の時の生の皺寄つたフランス梅のことを』想ひ出した。このちよつとした話はこれで十分表明されてゐるやうに思はれる。然し此の藝術家は尙一層深入りして、こゝにもつと〳〵大きな特質を見出して居る。即ち、イワン・イリイチは梅の『一種特別な味』や、『種子に觸れる程食べて行くと唾液の澤山出ること』を思ひ出した。梅の種子から生ずる此の唾液の感覺に伴ふて、イワン・イリイチの胸中には、それからそれと色々な想出が湧いて來る。それは乳母のことや、兄弟のことや、玩具のことなど――その全幼年時代のことどもであつて、それ等の追憶は今度は彼の心中にその當時の生活の歡喜と現在の絶望並に死の恐怖との比較を喚起してゐる。『こんなことは考へまい……あまりに痛々しい。』とイワン・イリイチは獨語した。梅の種子を味ふ時の夥しい唾液といつたやうな、何でもない一些事も、實に此のやうな綜合にまで吾々を導くのである。だから若し讀者の少年時代の想出のうちに何か之に類したものがあつたならば、此の描寫は迚も打勝つことの出來ない誘惑力を以て、主人公の內部の心的悲劇の中へ讀者を引込むのである。

ソーニヤはニコライ・ロストフと戀に陷つて、彼に接吻した。プーシキンならばこの位で接吻の記事を限つてしまふ。けれどもレ・トルストイはこんな大ざツぱな表現を以て滿足するもので

ない。彼は最も確實な、最も特殊な、最も精密な特質を求める。これは降誕祭週間の出來事で、ソーニャは騎兵の假裝をして、その唇の上には燒いたコルクで口髭を描いてある。こゝが不思議な、複雜な、眞にトルストイ的な感じの出てゐる所であつて、ニコライは『コルクの香と接吻の感觸との混合』を思ひ出すのである。

最も捕捉し難い感覺の濃淡と特質とは、感ずる人の個性と、性と、年齢と、教養と、階級などに應じて區別される。思ふに此の方面に於いては彼にとつて閉されたところは無いらしい。彼の感覺的體驗は實に無盡藏であつて、恰かも彼は樣々な人間や動物のうちに數百年も生きてゐたかの感がある。

彼は舞踏會に出掛る前の若い處女の裸體の感覺に透入して居る。即ち『キッティーはその露出された肩や腕に、大理石の冷たさを感じた』と書いて居る。また彼は、年增女の產後の疲勞の感覺に通じて居る。即ち彼女は『殆んど赤ん坊を產む每に經驗した乳房の張り裂けるやうな痛みを想ひ起して戰慄した。』と書いてゐる。また兒を育む母の感覺も知つて居る。彼女に在つてはまだ自分の肉體と赤子の肉體との神秘的な結合が切れてゐないので、『乳の張つて來ることによつて、赤兒の呑み力の不足を推測する。推測する所か確實に認知する。』また彼は動物の感覺や考へをも知つ

て居る。例へばレーウィンの獵犬は、主人の顏を『狎れた顏』だと思ふが、その眼は『いつも怖ろしいものと』見る。そして『私は行くことが出來ない。何方へ行つたらよいのか？此處から私はあの（鷸の）香を感ずる。が若し先へ出て行くなら、私はそれが何處に居るのか、またそれが何物だかわからなくなる。』など、考へてゐる。

古代の希臘人羅馬人は言ふに及ばず、多分十八世紀の人々ですらも、馬蹄の『透明な』音とは何のことやら、また『燒けたコルクの香と接吻の感觸とが如何樣に混淆し』得るものやら、また食物が何うして人の顏の表情を——快い微笑を『反映し』得るものやら、また人間の香のうちに何うして『圓み』があり得るものやら、迚も解らないであらう。若し新しい所謂デカダン藝術のわが批評家、乃至ロ八釜敷き批判者等が、飽くまで眞劍に、飽くまで追究的であるならば、彼等はレ・トルストイが『病的に扭ぢ曲げる』ことのために、彼を責むべきではなからうか。しかし事實、藝術に於ける健全不健全の確固たる境界を定めることは、古典的約束の擁護者等が考へてゐるよりは遙かに難かしいことである。彼等が『扭ぢ曲げる』と思つてゐることは、寧ろ健全なる感覺の研磨であり、自然的な不可避的な發展であり、精練であり、沈潛ではあるまいか？悲「らく吾々の子供等は、その潑溂たる新鮮な感受性を以て、現代の批評家の解せざる所を理解して、

レ・トルストイの辯護をなすであらう。何となれば子供等は、その父等の夢にも見なかつたものを既に知つてゐる、――とりわけ、所謂『五官』の各方面は決してそれほど嚴密に區分されてゐないこと、これ等の方面はその實際に於いては互に混淆し合ひ、縺れ合ひ、隱蔽し合ひ、抱擁し合ふこと、從つて音聲が輝かしい華やかなものにも思はれ得れば、(プーシキンの所謂『鶯の輝やかしい聲』の如く。)また運動や色彩や果ては香氣の綜合が音樂的の印象を與へることも出來ること(所謂オイリトミイ即ち運動の諧和や、繪畫に於ける色の調和の如く)を知つてゐるからである。通常、人々の肉體的感受性はその精神的感受性と反對に、人類の歷史的發達を通じ、あらゆる時代に於いていつも不變であると考へられてゐる。が、其の實前者は後者と同樣變易するものである。吾々は吾々の祖先等が見なかつたもの、聞かなかつたものを見且聞いて居る。古典的な往時の嘆美者等が如何程現代人の肉體的衰頽を慨けばとて、吾々が『イリアッド』及『オディッセイ』の英雄達以上に炯眼で、敏感で、肉體的に纖細であることは疑ふべくもない。例せばスペクトラムの最後の色彩の如き或る種の感覺は、人類生活の比較的近世に屬する歷史時代に於いて漸く人類一般の知得する所となつたこと、又ホーマーの如き人物が綠色と藍色とを混同して、海水の色を名づくるに『綠青色』――即ち $\chi\lambda\alpha\upsilon\kappa'o\varsigma$ といふ一語を用ひてゐたことは科學も認めて

ゐるではないか?斯くの如き自然的な成長と練磨とは人間の感受性の他の方面に於いても行はれて來たのではないか、そして今も行はれてゐるのではないか?吾々の子供等のそのまた子供等は、吾々の未だ見ないもの、聞かないものを見且聞くのではないか?啻に吾々の親達や、吾々の批評家や、感受性の衰へた人々ばかりでなく、吾々のうち最も大膽にして最も新しき人々にも未だ曾て夢想されなかつた未知の境地が、彼等の前には展開されるのではないか。さうなると、今日藝術界の舊派を驚かしてゐる、吾が現代の『デカダン的』纖細も、その時になれば矢張り亦原始的な、ホーマー流の健全若しくは粗野と認められるのではなからうか。此の不可抗的な發達と進轉と流動とに於いて、合法的なものと不合理なもの、健全なものと病的なもの、自然的なものと不自然なものとを分つための確乎とした標準が何處にあるか?昨日の例外であつたものが、今日の規則とならないであらうか?而して、何人か生ける肉、生ける靈に對して、『此處に止まるがよい――これ以上行くことは出來ぬ。』と敢て言ひ得る者があらうか?

何はともあれ、レ・トルストイの名聲は、實に此の新しき、何人(なんぴと)にても開かれなかつた、また何人にても開かれ得ない、吾々の纖細な靈肉的感受性の世界を、初めて開いて吳れた點にあらねばならぬ、それを恐るゝことなき眞劍味を以て表明してくれた點にあらねばならぬ。此の意味に於

いて、彼は吾々に新しき肉體を與へたのだ、新しき酒を盛るための新しき容器を與へたのだと言ふことが出來る。

使徒ポーロはアレクサンドリヤ學派の哲學者の說を借りて、人間の實體を肉的、靈的、及び魂的の三要素に分つた。そして最後の魂的要素は始めの二つの間の連鎖で、中間的な、二重的な、過渡的な、曖昧なものである。それは最早肉ではないが、まだ靈ではない。謂はゞそれによつて肉が完成されて、靈が始まる所のもの、半ば動物的な、半ば神的なもの、現代科學の語で言ひ現はせば、精神生理學の範圍に屬するものである、——即ち肉體的なると同時に精神的な現象の範圍に屬するものである。

レ・トルストイは此の肉體的でもなく、精神的でもなく、つまり肉體的にして而も精神的なる『魂的人間』の偉大なる描寫家である、——即ち靈に向ふ肉の一面と、肉に向ふ靈の一面、更に換言すれば、人間の中に於いて獸と神との鬪ひが行はれて居るその神秘的な境地を描寫した最大作家である。而もそれが彼自身の全生活の苦鬪であり、又悲劇でもあるのだ。かくて彼自身は遂に完全な異教徒でもなく、完全な基督教徒でもなく、專ら『魂的な』人間である。永久に復活し、歸依しつゝ而も復活出來ない又基督教に歸依出來ない半異教徒であり半基督教徒である。

彼が此の中間的境地を脫して、何れかの一方に遠ざかれば遠ざかるほど——この際人間的及び動物的存在を脫して動物前の生氣なき本性へ、或は單に外見上生氣なき情熱なき苦惱なき『物質的な』ものと見ゆる本性へ遠ざかつても（此の方面の怖るべきまた幸福なる平安を能く描いて居るのはツルゲーニエフとプーシキンである。）またこれと反對に肉を脫し、動物的本性を脫しつゝある人間的靈性即ち純思想の範圍へ遠ざかつても（此の方面の熱烈なる激動を能く體現して居るのはドストエーフスキイとチュッチェフである）、そのいづれにしても——レ・トルストイの藝術的表現力は減少し、果ては遂に全く彼を見棄てゝしまふ。だから、彼には全く永久に到達することの出來ない限界があるわけだ。然しその代り、魂的な人間の範圍に於いては、彼は限界を知らぬ權能者である。

藝術の他の領土に於いては、例へばイタリヤ文藝復興期の繪畫や、古代希臘の彫刻等に於いては、レ・トルストイ以上の完全さを以て肉的人間を描寫した所の藝術家があつた。また現代の音樂及び一部の文學も、より深く精神的な思索的な人間の內面世界へ肉薄して居る。然しながら、レ・トルストイの作物に於けるが如く、人を震駭するやうな眞實と露骨とを持つた『魂的人間』は、未だ曾て何處にも現はれなかつた。此の點に於いて彼は全世界の詩壇に、將た全世界の藝術

界に競爭者を有しないばかりではない、彼に匹敵すべき何人をも見ないのである。

第二章

トゥルゲーニエフは『戰爭と平和』に就いてこんなことを書いた。『トルストイの小說は驚くべきものである。けれどもその最大の弱點は、世人が喜んでゐる點にある。即ち其の歷史的方面と心理描寫とにある。彼の物語は手品である、微細な些事を並べて人の眼を掩ふものである。時代の特色など何處にあらう?歷史的色彩など何處にあらう?デニソフの姿は立派に描かれてゐる。けれどもあれは背景の模樣として美しいものであらう。が、その背景が無い。』

これは思ひも寄らぬ宣告で、一見すると當を失したものゝやうに思はれる。トルストイの抒事詩の宏大にして、限りなく多種多樣な流れは、最初あまりに多くのものを其の途中で與へるので、實際最初の程は、此の筋途が彼の豫定した最後の主要目的にどの位貢獻して居るかなどいふ疑念は、吾々の念頭に登つて來ない。然し結局此の『戰爭と平和』と稱する、兎に角後にも先にも無い歷史小說が、果してどの位歷史的であるかといふ忘れ易いまた忘れるのが自然なこの疑問を回避することが出來ない。クトウーゾフ、アレクサンドル一世、ナポレオン、スペランスキイの如

き名の知れた人々の像が吾々の目前を通り、アウステルリツツの戰、ボロデイノの役、モスクワの大火、佛蘭西軍の退却の如きよく人に知られた事件が行はれて居る。而して動的なまた不動な歴史の相、『走つてゐるうちに急に氷結する波の如く、』波打ち流れつゝ、その流動中に永久に化石した歴史の相、歴史の骨組が吾々の眼に映つて來る。然しその嘗て生きてゐた骨格は今尙生ける肉を以て蔽はれてゐるか、今尙その肉には生きた精神が呼吸して居るか？」

歴史の精神、時代の精神、トゥルゲーニエフが『歴史的色彩』と名づけたもの、――それは一體何を指したのであるか。之を決定することは實に難しい、いや殆んど不可能である。吾々の知つゐる所はたゞ各時代には、それ獨特の空氣があり、各々の花、各々の人に於けるが如く何時如何なる處に於いても反復されない唯一無二の香ひがあると云ふことである。ボツカチオの『デカメロン』には初期文藝復興時代の伊太利の香があり、ミツケーウイチの『パン・タデウシ』には十九世紀の始めのリトゥアニヤの香があり、『エウゲニイ・オニエーギン』には一八三〇年代のロシヤの香がある。而して此の色彩、即ち歴史的時期の特別なる反映はたゞ大なるものに映るばかりではない、小なるものにも映つて居る。それは宛ら朝夕の空燒が嘗に絶頂に映るばかりでなく、空燒に照された山嶺の一木一草にまで映つてゐるやうなもので、賢者の言說や英雄の行爲に於て

のみならず、衣服の流行の仕立方や、婦人の髪飾の附方や、小さな家具の一つ一つにも映つてゐる。

或る一の文化が强ければ强いだけ、また生氣があればあるだけ、その文化の凡てを浸してゐる此の歴史的の香は益々執拗であり、益々膠着力がある。そして我々が此の文化の研究に沈潛すればする程、そこからは、恰かも長年封じられたまゝになつてゐた祖父の手箱から出る臭を衝くやうな鋭い疲れた香氣に似た匂が漂ひ來つて吾々を捉へる。その匂たるや吾々にとつては無關係のやうで、而も懷かしく、吾々の心に、不思議な、靜かな、心を慰する音樂のやうな思出や、諸調をそれからそれと呼び覺すのである。そのやうに、ナポレオン時代と、その帝國式の反映は、單に埃及のピラミッドの前に於いて軍隊へ與へた大皇帝の嚴然たる命令の文句、若しくは法典の各章に於いて感じらるゝばかりではない、ジョセフイン皇后の白い下衣に施されたローマ紫の花刺繍や、古代執政官の圓椅子と同じく滑かな白木から作られた、背の眞直な、緣を金渡金(メッキ)した、クラシカルな凱旋の棕櫚の枝をつけた、長椅子や肘掛椅子に於いても感じらるゝのである。

『戰爭と平和』を讀むと、描かれてゐる事件が皆、吾々の知つてゐる歴史的の俤を持つてゐるに拘らず、如何にも今日の時代に行はれてゐるやうに思はれ、また叙述されてゐる人物が皆肖像畫であるに拘らず如何にも現代人であるやうに思はれて、最初はあまりそれを怪まないでゐても、深く

入れば入る程奇異に感じられて、遂にはこの感を脱することが至つて困難である。讀者は絶えず想像力と記憶とを緊張させてゐないと、特に一の行動が世界的事件の舞臺から個人的な家庭的な内面的生活に移るやうな所を注意してゐないと、その行動が前世紀の第五年と第十五年との間に行はれてゐるので、過ぎ去つたばかりの六十年代と七十年代との間に行はれてゐるのでない事や、讀者と是等の人物乃至事件との間には殆んどまる一世紀の――それは猛烈な歴史的事變の比較的少ない二三世紀にも相當するやうな一世紀の深淵が介在してゐる事などを忘れてしまふ惧れがある。『戰爭と平和』及び『アンナ・カレーニナ』に於いて吾々の呼吸する空氣は同一のものである。此の兩篇に於ける歴史的の香ひは同一のものである。その何れにも同樣な雰圍氣がある、吾吾に知られてゐる十九世紀後半期の雰圍氣がある。それも事件の外面的相貌に於いてゞなく、『歴史的色彩』の内面的陰影に於いて、アウステルリッツの戰やボロディノの戰と、『セワストーポリ物語』中の諸戰鬪との間に本質的な差異が存してゐるだらうか?或る歴史的の名稱を外にすれば、前者の殆んど凡ての事件を直ちに後者に移し、また後者のそれを直ちに前者に移すことが出來る。描かれてゐるのは或る歴史的時期の特色を有つた戰鬪ではなくて、一般的な戰鬪といふものである。ピエール・ベズーホフの共濟組合(フリーメーソン)主義とレーウィンの民情主義の間に、又はロストフ家

の家庭生活とシチェルバツキイのそれとの間にも、等しく歴史的色彩に於いてあまり差異がない。十八世紀の五十年代乃至七十年代に生れ、デルヂヤーウイン、スマロコフ、ノウイコフ、ウオルテル、デイドロ及びヘルベチウス等に從つて養育された人々は、啻に吾々の現代語を以て語るばかりでなく、最も秘密な、最も新しい、漸く昨日生じたばかりのやうに思はれる、そして未だ何人によつても發表されてゐない吾々の思想及び感情を以て考察し且感じて居る。吾々はアンドレイ公爵をば、あの過度に鋭利な、綿密な、冷やかな、極端に纖細な、まるで病的な、吾々の如き感受性を以てして、猶且『憐れなリーザ』や、『ワディイム』や、『グロモボイ』や、『ロシヤ戰士の陣營中の歌ひ手』などゝ同時代人だと考へることは殆んど不可能である。彼はバイロンやレルモントフのみならず、スタンダルや、メリメや、はてはフローベル、ショペンハウエルの如きも讀了し且つ感識してゐるらしいではないか?レーウインは、ピエール・ベズーホフの奇怪とし不可解とするやうな宗教的疑惑は、一つも懐いて居ない。彼等は單に精神的雙生兒たるのみならず、同一年齢であり、また歴史的に同時代者である。彼等の凡ての外部的文化的包被は、即ち彼等の凡ての裝束は、『衣裝(コスチューム)』といふ語の廣い意味に於いて、實に現代の包被であり裝束である。「チヤイルド・ハロルド式の外套」なしに、半ロシヤ式半英國式の洒落者の流行服なしに、エウゲーニイ・オネ

ーギンをシヤトブリアンやバイロンの同時代者と想像し、また一八二〇年代の田舍娘の服裝なしに、タチヤナを想像するのは、六ケ敷いことである。それは恰度短い靴下や締金の附いた靴を履き、光つた鈕のある彩色したフロックを着て居るピエール・ベズーホフや、吾々がアレクサンドル時代の色褪せた肖像に見るやうな吾々の曾祖母の服裝をしたナターシヤ・ロストワを想像するやうなものである。とは言へ、吾々は是等の人物の文化的包被や、彼等の『粧ひ』について考へてゐるのではない。彼等の外貌や、彼等の肉體や、その肉體に向けられた彼等の心の方面、即ち彼等の『魂的人間』は、極めて高い程度に於いて吾々に明白である。吾々が彼等に親めば親む程、彼等と吾々との間には遠景の屈折プリズムは益々消えて行く。それは吾々が彼等の時代に移動するためではなく、反對に彼等が吾々に近づくためである。

時には讀者ばかりでなく、作者自身までが恰も此のプリズムを忘れ、そして折々氣づいたかのやうに、何か歴史的生活の事實を引いて來るやうに思はれる。然しそれは極めて力無い、貧弱な、賴りないものである。即ち髮粉をつけた假髮や、近衛中尉の股にぴッたりついてゐる牡鹿皮の股引などがちよい〳〵現はれて來る。またボルコンスキイ老公が自分の娘を『孃』と呼びかけたり、伯爵夫人ロストワが或る日自分の息子のニコルシカの手紙を見て嬉しさの餘り『あゝ、何と

いふ文章だらう！』などと叫ぶ。然し是等の朦朧たる個々の歴史的特色は、一層明白な一層深い生ける重大な現代的特色と比べては色が薄く、跡方もなく消失するか、若しくは作者の期待してゐるのと全然反對の結果を生じてゐる。そして是等はその思ひもよらぬ突發性によつて一般的な現代的背景の上に顯はに出現し、且つ作の根底に歴史的色彩の缺けてゐることを思はしめて、却つて時代錯誤の如き奇觀を呈する。アレクサンドル一世時代のロシヤ貴人の家庭の內部の調度に就いては、『戰爭と平和』の全篇中に、唯一度、しかも半行の記述を見るのみである　即ちベズーホフ老伯のモスクワの邸宅には『壁の凹所に二列の彫像を裝置した硝子張りの大廣間がある』といふのだ。レ・トルストイは確かに、アルキナス王の御殿を際限もなく記述し、人間の住居の內外、室々の配置、壁、天井、柱、桶、梁、其他家具調度を殘る隈なく描寫したホーマー程に多くの言葉を費さなかつた。人間の手に成つた製作物は、イリアツド』の作者にとつては神々の手に成つた物と同じく神聖である、善美である。彼は大地や海や空を描くのと同じやうな愛を以て、その主人公等の日常生活の環境を描いてゐる。ホーマーに於いては、ペネロープの織物も、アキルレスの楯も、オディツセイの筏も、香水を入れた油壺も、ナウシカアが洗濯のために河邊に特つて行く繻絆類を入れた籃も、みな人間に共鳴する生命によつて生氣を得てゐる。人間の文化によつて原始的自

然の世界に加工された凡ての物の中に、人間の發明した凡ての物の中に、啻に美術品のみならず、手工品、工藝品の中に、また彼には『藝術的』とは思はれなかつた所の人間の技藝一切の中に、此の聰明な老人は、何等か超人間的な神的な美を感得し、老獪なる鍛冶工ヘフエストスの考案と製作とを見、天より奪つたプロメトイスの火に燃え立つ何物かを認めた。荒々しい大自然の美をあれ程よく了解してゐたプーシキンは、同時にまたピョートル大帝の創造の美を喜んでゐる。ドストエーフスキイの語を藉りて言へば、『あらゆる都市中最も工夫された都市』の美觀を喜んでゐる。またペテルブルグ公園の桓根の『鑄鐵の飾』や、月なき白夜の微光に輝く『海軍省の尖塔』や、更に又オネーギンの流行を追ふ心、彼の衣裳部屋に於ける樣々の小鑷子(はぬき)や、刷毛や、それから鑪などをも喜んでゐる。がまた、オデッサの給水の不備を——非常に響のよい詩句で——嘆き、ニジエゴロド定期市の愉快な雜然たる光景にも見惚れてゐる。すべて文化的なもの、すべて人間的な、技巧的なものは、プーシキンにとつては原始的なものと同じく注目の價があり、又ある見地よりすればそれと同じく自然的である。ミツケーウィチの『パン・タデウシ』に於いて、リトゥワニヤの地主等の氣樂な舊時代生活の描寫は、自然の描寫と渾和して一つの生きた實體となり、彼の尊き祖國リトゥワニヤの生ける姿となつてゐる。プリューシキン若しくはオブローモ

フの家庭的環境は彼等の內面的本性の續きである。彼等は蝸牛が殼の中に這ひ込むやうに、その環境の中に這ひ込んでゐる。

他の方面に於けるレ・トルスイの無限なる豐富さに比して、その作品に於ける歷史的色彩の貧弱、否概して文化的實社會的色彩の貧弱は、實に驚くべきものである。人間生活の溫順なしい沈默の伴侶たる所謂『事物』、生命は無いが容易に生氣づけられ、人間の形相を反映する所の物體は、レ・トルストイに於いては何等活躍してゐない。唯『幼年及び少年』に於いてのみは、ロシヤ地主の家族の家庭的環境の親切な描寫がある。が後になつては、自分の出て來た此の階級に對する同情も、彼のうちに消えてしまひ、彼はその貴族的生活と普通民衆の生活との比較對照とによつて豫想された道德的批判のために毒せられてゐる。然しこの民衆の生活も『ポリクシカ』より『闇の力』に至るに及び益々暗い影を伴ふて現はれる。即ち渾然とした叙事詩的に整つた美しいもの(コリツオフ及びプーシキンに於けるが如く)としてゞなくつて、都會文明のために半ば破壞せられた、病的に傷ついた、見苦しいものとして現はれるのである。結局、彼にはあらゆる實生活や、あらゆる人間文化の描寫が、獨立なる藝術的活動の手段とならずに、たゞ抽象的な道德的な歸結や非難や辯明の爲の前提となつてゐる。

曾て彼に裏切らない眞實な藝術的啓蒙力は、既に吾々の見た如く、レ・トルストイに於ては作中人物の肉體の相、外部の運動、及び內部の狀態や感覺、即ち彼等の『魂的人間』に集中されてゐる。此の中心點を多少なりとも離るゝにつれて、光は色褪せる。だから吾々は彼等の衣服や、彼等の家庭生活の委曲や、その住居の內部の調度や、彼等の住める都市の市街生活を見分けることが、だん〳〵不鮮明になり、最後には凡ての眞實なる永遠なるものによつてばかりでなく、あらゆる時代に特有な偏狹な制約的な人工的なものによつても形造らるゝ所の、かの智的並びに道德的雰圍氣やかの文化的歷史的空氣を認めることが頗る難事となる。ピエール・ベズーホフの共濟組合主義は此の種類の試みとしては不成功に終つてゐるので、レ・トルストイは其後決して同じやうな試みに歸らなかつた。プーシキンのタチヤナは其の乳母のお伽噺を聞いて、邪氣のないマルチン・ザデカや、感傷的なマルモンテルの身の上を考へた。ダーウインやモレショットが如何なる影響をバザーロフに及ぼしたかと云ふことも、バザーロフがプーシキン若しくはシクスチンのマドンナに如何なる態度をとつたかといふことも、吾々の明らかに知る所である。又ボワリイ夫人の讀んだ愛の情熱を描いた書物及び是等の書物が如何に彼女自身の情熱の發生と發展とに影響したかといふことも吾々によく分つてゐる。けれどもアンナ・カレニナが、レルモントフ、プーシキン、

チユツチエフ、バラチンスキイのうち何れを多く好んだかを探索するは無益な努力であらう。彼女としては本などは何うでもよいのである。かくも泣き又笑ひ、かくも愛憎の情に輝く彼女の眼は、全然讀書をしたり、藝術品を觀照したりする力がないやうに見える。

然し事實に於いて現代人の心は、啻に抽象的思想のみならず、最も生々とした自己の感情に於いても過去の諸世紀及び過去の文化の無數の影響、積層、誘惑から成り立つて居る。吾々の中誰か實生活及び反映生活の兩生活に生きないものがあらうか。現代人の精神の探究者は此の兩生活の結合を復讐無しには蔑視することが出來ない。所がレ・トルストイはそれを蔑視してゐる。彼の如く內部の動物的原始的な、『魂的』人間の核心をば、外的な文化的歷史的掩ひより引剝ぎ、且つ暴露した藝術家は他にない。自然に加へる人間の仕事は、即ち文化的のことは、彼に取りてはみな條件的な技巧的なものに過ぎない。從つて虛僞な興味なき無意義のものである。彼は此の人間の呼吸のために感毒し腐敗したと思はるゝ此の雰圍氣を拔け出して、藝術的の描寫に價する唯一の對象たり、又永久的な眞實と自然の對象たる、凡ての動物的原始的自然的なものゝ清新なる空氣の方へと急ぎつゝ氣も輕やかに通過してゐる。

然しこの一風變つた非人間的生活に依つて正氣づけられたやうな、人間以前及び動物以前の、

人間離れをした世界的自然の最高階段に於いても、人間的靈性及び意識性の最高階段に於いても、永久彼の近づき難い限界がある。

プーシキンは此の人間的意識と自然の原始的な無意識との對立を解決して、絶望的ではあるが全く明瞭なる調和に導いた。

かくて墳墓の戸口にも、
若き生命は躍り、
冷かなる自然は
永遠の美に輝くであらう。

レルモントフにありては此の對立が更に病的に、更に解決し難くなつてゐる。

天はいと莊嚴に、美妙に、
地は蒼き輝やきの中に眠る。

なぞ我が胸はかく痛く、かくわびしきや。
……

果て知れぬ曠野の上高く
青空を無造作に飛び行く
捕へがたき雲の
縞の如きむれ。
……

耐え難き不幸の日に
君はせめてそれ等を思ひ出でよ、
そして地上のものに無關心となり、
それ等の如く平氣になれ。

彼は最早自然との完全なる結合を望んではゐないかのやうに、『それ等たれ』と云はずに、『それ等の如くなれ』と言ふ。

チュツチェフに至つては此の矛盾は尙更鋭くなつて、堪へ難き『不調和』にまで達してゐる。

此の不調和は何處より如何に來れる？
また如何なれば普ねき合唱の中に、
心は海のごとく歌はざる？
そして思物ふ葦はなぞつぶやくや？

最後にツルゲーニエフの自然に對する關係の眞髓を成すものは、この『思物ふ葦』のつぶやきと、無思慮な自然の明るさとの極度の不調和である。

レ・トルストイにありては、自然に對する態度が二重である。基督敎的たらんとする彼の意識にとつては、自然は何となく暗黑な、意地惡い、野獸的な、或はあまつさへ惡魔的なものである。『基督敎徒が自己の裡に征服し、且つ神の國に變改しなければならないもの』である。レ・トル

ストイの無意識なる異敎的の要素に於いては、人間は自然と融合して、大海中の一滴の如く自然の中に沒してしまふ。オレニンはエロシカ叔父の睿智に貫かれて、森の中で自己を昆蟲中の一昆蟲、葉中の一葉、動物中の一動物と感じてゐる。彼はレルモントフの如くに『それ等の如くなれ』と云はないであらう。何故なら彼は既に『それ等』であるから。レ・トルストイの『三つの死』に於いて瀕死の貴婦人は、その身分相應な外面的敎養あるに拘はらず、殆ど考へるといふことをしない。だから此の場合『物思ふ葦』のつぶやきと瀕死の樹木のあきらめとを比較することなど思ひもよらぬ。いづれの場合にしろ、即ち基督敎的の意識に於いても、又異敎的の要素に於いても、レ・トルストイには自然と人間との對立が缺けてゐる。初めの場合に於いて自然は人間の中に沒し、後の場合には人間が自然の中に沒する。

プーシキンは夜の靜寂の中に聞いてゐる、——

運命の女神等の老婆のやうなつぶやきを。

チュツチェフにとつては夕闇の濃くなる時『世界的沈默の或る一時』がある。

……夕闇が混沌の如く水の面に濃くなる時。
アトラスの如く、忘却は地面におしかゝる。
唯ミューズの處女の如き心を
神々は預言の夢の中に騒がす。

而して死んだやうな七月の夜に彼は聞く、——

唯火の如き稻妻のみが
つんぼなる啞の惡魔の如く、
かたみに相語らふ。

ツルゲーニエフに於いても亦、荒凉たる薄綠の空に聳ゆるフインステル・アアホーンとシュレツクホーンの氷の嶺きは、惡魔の如くに、人類について、地球の表面に於ける此の憐れむべき微

について對話をしてゐる。

自然の神々も惡魔も『預言的の夢』のうちにレ・トルストイのミューズを惱ましたことはなかつた。彼には深夜の靜寂の中にも『運命の女神の老婆のやうな舌縺れ』が聞えたことはなかつた。彼にはレルモントフの如くに天穹が透明に深くは見えなかつた。レルモントフは曰ふ、——

心用ひて眺むれば
天使の飛翔すら見える。

又溪河にしてもレ・トルストイには、呼かなかつた、——

その馳せ來りし不思議な國の
秘めたる傳說を。

またチュッチェフに語りし如くに、夜の風は『不可解な惱み』をレ・トルストイには物語らな

かつた、——

人の心に了解し易き言葉もて、

……

太古のなつかしき混沌のことを、

彼は自然を愛してゐるか。彼の自然に對する感情は或は人々の『自然に對する愛』などと呼ぶものよりもつと強く深いのかも知れない。若し彼が自然を愛してゐるとすれば、それは全く別な、人間とは沒交渉な、しかも人間に類似したる、神的及び惡魔的の力に滿てる、宇宙的存在としてゞはなく、『魂的人間として』の彼自身の存在の動物的本然的な延長として、之を愛してゐるのである。彼は、病的な歡喜の戰慄なしに、陶醉なしに、かの古人にのみ特有にして現代人の何人も最早解し得ないやうな偉大な醒めた愛を以て、自然の裡に自己を愛し、また自己の裡に自然を愛してゐるのである。レ・トルストイの强味と弱味とは正にこゝにあるのである。即ち彼は極度まで、換言すれば完全な明瞭さまで原始的なるものと文化的のものとを區別したり、又自然と人

間とを區別したりすることが出來なかつた。

彼にとつても自然の中には此の世ならぬ薄暗と此の世ならぬ神秘とが潛んでゐる。けれどもそれは近づくべからざる恐怖のみに滿たされてゐる薄暗と神秘である。時としては彼にも亦現象の幕即ちチユツチエフの所謂眞晝の光の『黃金の絨氈』が突然揚げられることもある。チユツチエフは曰ふ。

聖なる夜は地平線上に登り來りて、
歡喜の日を、親愛の日を、
黃金の絨氈の如く包んだ、
深淵の上に擴げらるゝ絨氈の如く。

けれどもレ・トルストイは此の揚げられた幕の背後に『見る〳〵天の聖殿にかけり行く生ける創造の車』や又は『天使の飛翔』を見ることなく、たゞ底知れぬ怖ろしき穴、即ちイワン・イリイチが『私は嫌だ、嫌だ』といふ恐ろしい非人間的な叫聲をあげながら突き出ようとして突き出

ることの出來なかつた『囊』をのみ見たのである。だから『夜の風』の聲の中に於いて、レ・トルストイに聞えるものは、たゞ『主人と下男』の中の凍死に瀕して居るブレフーノフを酷く怖れしめた吹雪の中の雪野原の枯れ果てた艾草の絶望的な耳語のみである。けれども日中の幕の下りてゐる間は、一切が明瞭で判然としてゐるので、彼は自然を在るがまゝに見るのである。だから此の黄金の絨氈も彼にとつては決して透明にも、綾の如くも、また半透明にもならぬのである。

夢か現實か、まつたき暗黑かまつたき光明か、兩つ一つである。然し彼にとつては暗黑は決して光明と融合せず、又夢は現實と融合しない。チユツチエフやレルモントフのために自然を『預言的の夢』で包んでくれるやうな朝霧も夕靄も無い。レ・トルストイの自然に對する態度には、かの色彩多き音響豐富なる天才に於けるが如く矢張り幻影的な薄暗い星のやうな微かなものは些も無い。レルモントフの『秘めたる傳説』や或はプーシキンのいふ『アポロ神殿の運命の女神のつぶやき』に類するものはない。物語めいた蠱惑的な不可思議なものは少しも無い。

吾々は後に至つて、彼の宏大なる創作中ただ一度だけ、永久彼の近づき難いと思はるゝ、超自然と自然とが相接せる境界に觸れたことのあるのを見るであらう。此の刹那彼は自分の外へ出て自分を超越し、自分を貫き通した樣に見える。而してそこでは彼は自分自身を征服したかのや

うである、『自己を擺脫した』かのやうである。これは明らかに最大なる天才の標徴たる非凡である、自己の本性に對する最後の勝利である、不可能の如く思はるる眞の奇蹟である。

第三章

『戰爭と平和』の最初の數編が出た際、フローベルはツルゲーニエフに書を送つて、かう言つた。『私にトルストイの小說を讀ましてくれたことを君に謝する。あれは第一流の何物かである。何と云ふ畫家で又何といふ心理學者であらう。最初の二卷は實に優れてゐるが、第三卷は恐ろしく落ちる。彼は繰返し〳〵哲學をこねてゐる。結局旦那といふものが見えてゐるのだ。即ち作者及びロシヤ人が見えてゐるのだ。ついそこ迄は唯自然と人類とのみが現はれて居たのに。』

此の批評は幾分躁急にして皮相である。フローベルは恰もこの半野蠻的な未知のロシヤに斯くの如き偉大な現象を、謂はゞ一種の藝術的巨獸を豫期しなかつたかの如くに、自己の印象を餘り深く究めたと云ふよりも、寧ろ驚いて、あまつさえ幾分自己の印象を信じないかのやうに彼はかう自白してゐる。『私は讀んで居る最中歡喜の餘り叫んだ。然しそれは長い、そして實に力强い、全く力强い！』

兎に角フローベルが一見してレ・トルストイの作物に、驚くべき不統一、『恐るべき墜落』、蹉跌

及び崩壞を認めたといふことは極めて面白い。實際『戰爭と平和』及び『アンナ・カレニナ』を皮相的に讀んでも、二つの構成、二つの言語、二つの流が相並んで流れ、水と油との樣に接觸しながら混合しないといふことだけは認めざるを得ない。

彼が現實を描く時、殊に動物的原始的な『魂的』人間を描く時、彼の用語はロシヤ文學中嘗て何人も達しなかつたやうな單純と力と正確とを以つて勝れて居る。そして彼が時として非常に力を入れ、意を用ゐ、頑固を張り通し、『讀者に肉迫する』やうなのは、又事物に殆ど觸れずして謂はば其上を翱翔するプーシキンの散文の飛鳥のやうな輕快さに比して、レ・トルストイの言葉が重苦しく見えるのは、それは塊に塊を積み重ねるティタンの重苦しさと執拗さである。が、是等の巨大なる塊は、寶石の針の樣にとぎ澄まされた、然し强い感覺的觀察の細やかさと並んで如何に驚くべきものであらう。

けれども彼が『魂的人間』でなく、靈的人間の抽象的心理に入るや否や——即ちフローベルの言葉に從へば、『哲學的考案』、レ・トルストイの言を以てすれば『思索』である所の抽象的心理描寫に入るや否や、更に詳解すればベズーホフやネフリユードフやポズドヌイシエフや又はレーウインの道德的轉機に筆が及ぶや否や、ある特殊の變態が生じ、『彼は恐ろしく低下する』。忽ちにして

彼の言葉は枯渇し、乾燥し、力を失ひ、青白く、頼りなくなる――そして言葉は心の思ふやうにならず、その描かるゝ事物にしがみつきながら、卒中の發作にある人の手の如く、それを掴み得ずに落してしまふ。

多くの實例の中から、私は當るにまかせてそのいくつかを引證しよう。

ピエールは言つて居る。『私が善をなさうと願つたことに如何なる誤りがあるか？假令私がそれを拙く爲し又は少なくなしたとしても、尙ほ私はその目的で何事かを爲したのである。だから諸君は私のした事を善でなかつたといふことを私に承知させることは出來ぬ。また諸君自身がそんなことを考へたといふことを私に承知させることは出來ぬ。』

ナターシヤの病氣に對する其の父ロストフ伯及び其の姉ソーニヤの態度について彼はかう書いてゐる。『若し伯爵にして、彼の愛嬢が回復しなかつた場合に數千ルーブリを投じて彼女と外國へ旅をしようといふことを覺悟しなかつたとすれば、伯爵はどうして彼女の病に堪えただらう――。そして若しもソーニヤが常に醫師の指圖を綿密に履行するために三晩の間帶も解かず、又丸藥を服藥させる時刻を過さぬやうに、今夜もまんじりともせぬといふことの嬉しい意識を持つてゐなかつたとしたら、彼女は何うしただらう……。それに彼女は醫師の指圖を忽せにすることによつ

て、醫療の方法を信じないといふことを示すことが出來るといふことについても喜びを感じた。』

病めるイワン・イリイチの妻の僞善的な配慮に就いて、彼はかう書いて居る。彼女が彼に對してなしたことは畢竟皆自分のためであつた。それに彼女はこれまで自分のためにして來た通りのことを今も自分のためにしてゐると彼に言つた。彼が彼女の言つたことを反對に考へなければならなかつた程あるまじきことを言つた。『これが本當の謎だ。最も單純な思想を含む此の文法上の縺れを解くがためには、どれ位想像力の緊張を要するか知れない。

同じ種類の、然し一層複雜で、一層紛糾した謎を今一つ擧げる。『彼の豫期したことが實行された故に、といふのは、彼が到着の際に、彼の心は兄がどうなるだらうといふ心配で一杯になつてゐたのに、彼は兄の方へ急がずに妻のことを心配せねばならなかつたことのために、レーウインはその妻に腹を立てゝ、妻を二人のために設けられた室へ伴れて行つた。』

この同一箇所を何度も徒らに繰返すこと、『ためそのため』、『するその代りに』、『といふそのことが』といふやうな同一語の不必要な反復は、多辯で吃りの老人アキムのもぐ〳〵した呟きを思ひ出さしめる。この一樣に縺れ合ひ躓き合つてゐる文章の中には囈言の重苦しさがある。何だか、あれほどの震撼させるやうな力と、正確さと、單純な言葉を以て、戰爭、國民運動、子供の遊戯、

狩獵、病氣、分娩、死を描いた所の偉大な藝術家でなく、別な人が別な言葉を以て語り出したやうである。何だか、雙生兒の如く似通つては居ながら、其本質に於いて彼に反對し、彼を滅しつゝある、全然別箇な人で、偶々レ・トルストイに不思議に似てゐる人のやうである。何だか、それは敬虔なるアキムが『偉大なる異教徒』エロシカ叔父の後で語り始めたやうである。

若しあれ程執拗に何度も繰返してなかつたら偶然な書き誤りとして許されたでもあらう所の文法上の規則の破壞が隨所にある。例へば『戰爭と平和』の第四編の中に『彼にとつては愉快な此のやうなひまつぶしも、誰か他の人にとつては不愉快であり得るだらうといふことなどは、彼の念頭に浮ばなかつた』とある。此の『得るだらう』『など』は中學の三年生でも爲さない誤謬である。尙レ・トルストイの其他の文法上の誤にしてもみな、ロシヤ文法の教師は誰でも容易に修正することが出來よう。彼は故意の不用意からこんな誤謬を其の儘にして置くやうに見える。

あらゆる偉大な文章家に通有なる、ニーチエが『耳の良心』と呼んだ、言語の音樂的構成に對する敏感な强要的な感受性すらも、かうした場合には彼を見棄てゝゐる。彼の文章中には往々『夫は實にみじめである』(ムージュ・ウージュ・ヂヤーロク)といふやうな「非音樂的」な音の並べ方に出會す。伯爵夫人ソフイヤ・アンドレーエウナが『戰爭と平和』を七度も淨書し、又レ・トル

ストイ自身が少くとも四十回乃至五十回の通覽を經た後、依然として此の醜い嘯き且つ泡立つ「ジュ」の音を三度も連續する事がレ・トルストイに分らなかつたらうとは受取れないことである。察するに、恐らくこの音は彼には『自然的に』見えたのであらう。生きた會話に於て、美しい、響のよい音を並べることに、氣を使ふ人々はあるまいから。

彼の言葉は、例へば馴らされてはゐるが氣儘な荒い獸が、森を見て時々急に激して終ひには仕事を拒む樣な風に見える。此の藝術家は言葉と死物狂ひに鬪つてゐる。彼は言葉を思想や感情の緣遠い構成の下に屈服せしめてゐる。彼は基督教的『思索』といふ「プロクラステスの寢床」の中へ押入つて强ひて言葉を打碎き、切斷し、不具にしてゐる。世に此の大藝術家の自己の言葉との戰ひよりも悲しく又教訓に富める觀物は無い。

レ・トルストイは言葉を屈服せしめた後、長くそれを其の儘に許して置かない。恰も自分で言葉を等閑視し、顧慮しない事を誇るかの如く、尊大な氣分から、又復讐心から、必要もないのにそれに暴力を加へる。且つ又彼は啻に言葉に關してのみならず、禁慾家に固有なる、シニズムとか、外面的禮儀作法の破壞とかいふことに對する特殊の矜を持つて居る。彼は恰も讀者に向つてかう言はうと欲するものゝ如くに見える。『私の文體は諸君には十分美しくは見えまい。私は文體

などを苦にしてゐるのではない。私は自ら考へた事を話すのだ。私の思想は外に待たず、自分で立つであらう。』けれどもこの單純を求め、會話の自然性を求める法外な努力のために、彼は、彼自らの最も惧れてゐる缺點に陷つた。即ちある特殊の洗練に陷つた。恐らくは最も纖細なる『單純の洗練』に陷つた。若し云ふことを許すならば無技巧者の技巧に陷つたと云へよう。

ツルゲーニェフには『戰爭と平和』の心理は薄弱に見えた。フローベルは同じ作を讀んだ時に『何といふ心理學者であらう！』と歡喜して居る。是等の二つの判斷は非常に相反するやうであるが、是を一致させることが出來る。

レ・トルストイが肉體に、又は肉體と精神とを結合するものに――即ち動物的原始的なる『魂的人間』に――近ければ近いだけ、彼の心理、もつと嚴密に言へば彼の精神生理學は、益々正しく且つ深くなつてゐる。けれども、彼がこの足下の常に確實にして効果多き地盤を見捨てゝ、その探究を肉から抽象された精神的な意識的なものゝ領分に移せば移すだけ、換言すれば心情の情熱でなくて、理智の情熱の領分に移せば移すだけ、レ・トルストイの『心理觀察』は益々怪しくなつて來る。（玆に理智の情熱といふわけは、人間の理智にも人間の感情に劣らない複雜にして深遠なる情熱があるからである。――ドストエーフスキイは即ち此の理智の情熱の偉大なる表現

者である。）

ニコライ・ロストフが、或る澤地に於いて獵犬の群と獵り立てられた狼と咬み合つて居る際、その中の一匹の犬がこの猛獸の喉に喰ひついたのを見た其の瞬間が、實際ロストフの『生涯中最も幸福なる瞬間』であつたといふことを信じないわけには行かない。けれども基督教的の感情、殊にイルテニエフ、オレニン、ベズーホフ、レーウイン、ポズドヌイシエフ、ネフリユードフ等の人々の基督教的思想に至つては、吾々に無數の疑問を起さしめる。別な言葉で書かれたばかりでなく、恰も別な人によつて書かれたやうな、是等の宗教道德的轉機の描寫は、作物の根本的な布地に於ける補布の樣に著しく目立つ。是等の抽象的な思索の斷片は、離散しつゝある霧の巨大な斑點の如く、明瞭な叙事の經過を中斷してゐる。またそれ等は不變なる內部の必然性によつて生ける活動から出たものでもなければ、其の活動から生長したのでもなく又この活動に何等加ふる所もない。それ等を略し、或は又全然除いても、別に缺陷を生じないのみか、寧ろさうする方が作全體の建築的構圖に有利である。

是等の個所に於いて、レ・トルストイの『心理觀察』は正に東方に古く傳はれる右の寓話を想ひ起さしめる。その若者といふのは玉葱の中には何があるかを知らうと思つて、包被又包被、

皮又皮と剝ぎ去つて、遂に最後の皮を剝いた所が、何物も、殆ど何物も殘らなかつたといふのである。それと全然同じくレ・トルストイは永遠の眞實、人間感情の終局の自然的な核心を求めて、包被又包被、因襲又因襲、虚僞又虚僞と取り去つた。けれども結局不純な、曖昧な、無邪氣に敗頽した、基督敎的で而も異敎的な、だが兎に角本統に生きた、諒解し易い人間的な感情からは何も殘らない、——疑もなく存在してゐた『玉葱』からは殆ど何も殘らない。吾々としては概してそこに何等かの感情が存在して居なかつたか、又は全くそれが無かつたのかといふ疑念すらも浮んで來る、——かくてこれ等一切の心理的發掘や、穿鑿や暴露の後、吾々はこの感情について知る所が前より少くなる。

○吾々は『幼年及び少年』の主人公イルテニエフを最後まで見てゐる。彼は吾々自身の幼年時代や、少年時代の忘れ得ない懷しい仲間の如くに、吾々に明瞭で且つ人間的に吾々に近しい。吾々は又これ程に明かではないが、兎に角人の善い隱し立てのない顏と、近視で思ひに沈んだやうな、然し痴鈍な眼付をした百姓風な屈强なロシヤの貴族ピエール・ベズーホフを見る。ピエールは生きてる人格でないにしても、少くとも生きた顏とそして無論生きた身體とを持つて居る。更にそれよりも一層不明瞭に吾々の前に立つのは『勞働者—哲學者』レーウインである。尤も吾々

は此の人が獨立自依の存在を有してゐるとは信じきれないけれども。レーウインの蔭からは益々多く『貴族にして作者』なるレ・トルストイの顏が覗いてゐる。けれども『クロイツェル・ソナタ』に於けるポズドヌイシエフや、『復活』に於けるネフリユードフの姿に至つては、最早全く吾々の眼に見えない所である。ポズドヌイシエフはわざとらしく、暗い汽車の中で恐らしい物語を語つてゐる。で、彼の顏は見分けられぬ。レ・トルストイはいふ。『黃昏の中に私は最早全くポズドヌイシエフを識別し得なかつた。たゞ彼の益々昂奮した、苦しげな聲が聞えてゐたばかりだ。』彼全體はたゞ此の苦しげな聲の音丈のやうである。それと、つけ加へるならば熱病やみのやうな半狂亂の火に『輝ける眼』だけである。この兩眼と、音聲とに、彼の智と彼の心と彼の肉體の全生活が集中されてゐる。けれども『復活』の主人公ネフリユードフに至つては、その聲も聞かれない。それは規則正しく結晶せる透明にして生氣のない抽象と、宗敎道德的の斷定に達するための宗敎道德的の前提である。自分の創造者に對して曾て謀反をしない人は決して豫期しない事を云つたり爲たりする事はない。彼は普に非人格的であるばかりでなく形態なき者である。基督敎的『思索』といふくすんだ灰色の網を織り出すくすんだ灰色の蜘蛛である。彼は音調を强め且つ集中するために用ゐらるゝ機械的に從順なる樂器である。その蔭にゐる『作者なる旦那』が自己の

道德說を宣傳せしむる一種の饒鈸若しくは傳聲管の類である。

レ・トルストイは人間の肉體及び一部人間精神の偉大なる創造者である。特に肉體即ち無意識な動物的原始的生活の根原に向けられたる方面の創造者である。然し彼は果して吾々が『性格』と呼ぶ所の生ける人間的な人格の創造者であらうか。

疑もなく諸々の性格は彼の許に胚胎し發生し形成せられて居る。が然し彼等は解決されて居るだらうか、完成せられてゐるだらうか、個々別々な唯一な完全な生ける存在となつて居るだらうか。

レ・トルストイに於ける人間の人格の描寫は高浮彫に於ける半浮彫の人體を想起せしめる。それは時としてその彫刻されてゐる平面から今にも離れ出やうとするやうに見えるが、それを平面が支へてゐる。けれども結局拔けだして來て、四方八方から見られ觸れられる完全な彫像として吾吾の前に立つやうに見える。然しそれは眼の錯覺である。彼等は決して離れてしまふことはない、半圓から完き圓になつてしまふことはない、――だから別な側から彼等を見ることは決して出來ない。

プラトン・カラタエフの描寫に於て、此の藝術家は不可能なるものを可能にしたかの觀がある。

彼は生きた人格を、少くとも一時は生けるが如く見ゆる人格を、ある定まつた特色や鋭い角度を全然なくして、非人格的に、即ち一種の『圓み』のうちに描くことを能くした。この圓みの驚くべく明かな、幾何學的とでも言ひたいやうな印象は、然し內的精神的姿によつてよりも寧ろ外部の肉體的姿によつて換起されてゐる。カラタエフは『圓い身體』、『圓い頭』、『圓い動作』、『圓い言葉、』あまつさへ『その香の中にも何か圓いもの』を持つて居る。彼は原子である。最初であつて最後である。最小にして且最大である。始であつて終である。彼は獨立に存在しない。彼はたゞ全體の一部であり、且つ全民族的な全人類的な全世界的な生活の大海に於ける一滴である。而して恰も一滴がその完全な圓さを以て宇宙を再現してゐるが如くに、彼は彼の人格若しくは非人格によつてこの世界的生活を再現してゐる。それは兎も角として――藝術の奇蹟、若しくは天才的な視覺の錯覺が行はれ、しかもそれが殆ど完成せられたのである。プラトン・カラタエフは沒箇性的であるにも拘はらず、人格的で個性的で、そして唯一なやうに見える。然し吾々は又彼を殘りなく見んことを欲する、彼を他の方面から見んことを欲する。彼は善人である。けれども或は其の一生涯に一度なりと誰かに對して腹を立てたかも知れぬ。彼は貞潔である、然し一度なりと女を別な眼で見たことはなかつたか。彼は諺で話をする。けれども其の金言の中に一度も自己の言葉

を交へたことはなかつたか。もしたツた一つの言葉、一つの思ひがけぬ特色が、この餘りに規則正しき、數學的に完全な『圓み』を犯したならば、吾々は彼が血と肉とからなつた人間であり、彼が實際に生存することを信じ得たであらう。

けれども吾々の最も熱心な最も緊張せる注意の刹那に於いて、プラトン・カラタエフは殊更らしく死ぬる、消え失せる。大海に於ける水の泡の如く溶けてしまふ。而して彼が死に於て一層はつきりとして來る時、吾々は彼が實生活に於いて、人間的な感情、思想、行爲に於いて明瞭に現れることの出來なかつた事を認めようとする。即ち彼は生きて居たのではなく、たゞ存在した。そして實に『完全に圓かつた』のであつて、この圓いといふことによつてのみ其の使命を完ふした。だから彼に此の上殘つてゐるのは、唯死ぬるといふことだけであつた。而して吾々の記憶には、恰もピエール・ベズーホフの記憶に於けるが如く、プラトン・カラタエフは生きた人としてではなく、單にロシヤ的な、善良な『圓いもの』の生きた化身として、即ち一個の大きな世界的歴史的な宗教道德的な象徴として永久に殘つて居る。

アンドレイ公爵の人格に關しても之に似た事がある。

吾々は既に彼を見、或は、推測してゐる。彼はその活ける多くの矛盾によつて、冷い理知と燃

ゆるが如き空想との結合によつて、人間に對する侮蔑と名聲乃至『人間愛』に對する抑え難き渴望によつて、外觀の貴族的な峻嚴と隱れたる優しさ乃至一種子供の如く賴りない感じ易い心情との結合によつて、吾々には益々よく分つて來る。

けれど恰も故意にさうした如く、もう一二度鑿を振へば人間の顏がすつかり彫り上げられるといふその刹那に、アンドレイ公爵は死に始める。カラタエフと反對に、彼は長く苦しんで死ぬる。何となれば彼の全人格は極めて一定せぬ特徴や極めて鋭い角度から出來て居るから、この生きた角度や特徴を、原始的な微分子や、大海と溶け合はうとしてゐる水の泡の完全な『圓さ』にまで擦り減らすには、死ぬのに長い時を要する。その故に死はさながら海の浪が角立つた岩を徐徐に圓く擦り減らす如く、徐々に彼を搖り動かし且つ彼を圓めて行くのである。

彼が幻想や苦痛や絶望や光耀の中に、果てしもなく死んでゐる間に、彼の生ける顏の背後から一つの新しい、見知らぬ、恐ろしい顏が出て來る。そして此の第二の顏によつて、第一の顏は昏まされ、更に呑み込まれてしまふ。アンドレイ公爵の全生涯も、彼のあらゆる生ける思想や感情や行爲も、今は極めて些細なものになつてしまふ。だから吾々の記憶には、生活でなくて唯『アンドレイ公爵の死』のみが永久に殘り、生きた特別な人格ではなく、たゞ彼の摑み難い、人間ら

しくない、世ばなれのした彼の第二の顔のみが殘るやうになる。

今度はナターシヤ・ロストワを取つて見よう。彼女は全く吾々にとつては生きてゐて、身内の者の樣に吾々に近しく、どこまでも此の世の人らしい特殊な唯一の女性であるやうに思はれる。彼女の人間らしい人格の結び目は如何に優しく且つしつかと結び付けられてゐるか。如何ばかり捉へ難く細やかな、そして多樣なる精神的肉體的生命の濃淡から、この『最も純潔なる美の最も純粹なる典型』が織りだされてゐるか。プーシキンのタチヤナの如くに、彼女は謂はゞ此の詩人のミューズを具現して居る。彼女は『久遠の女性』の鏡の裡に彼女自身の面影を反映して居る。

所が此處でナターシヤの姿が完成して美の最高度に達した刹那に於いて、此の藝術家は一つの瞬間的な、驚くばかり深い、忘るべからざる特徴を引出してゐる。それは狩獵中に野原で起つたことである。犬共が漸く一疋の野兎を追ひつめた。すると一人の獵人は血を流してしまはうと思つて兎の臟腑を取出して振つた。人々は皆殘らず興奮し、面を赤くし、息をはづまして、いつにない活氣を以て獵の模樣をいろ〳〵と誇り語つてゐた。『恰度此の時である。ナターシヤは一寸息をするのを止めて、嬉しさ嵩じて、總ての人の耳がが—んと響くばかりの勞くやうな歡喜の叫聲を發した。彼女は他の獵人等が異口同音に言はんと欲した所の凡てを此の叫聲で表現した。そして

この叫聲は、他の場合だつたら彼女自身その荒々しい叫を恥かしく思ひ、他の人々も驚き呆れただらうと思はれる程異樣であつた。』

この若い世俗的な娘の荒い獵人見たやうな叫びの中には、記憶されぬ程太古の、原始的動物的な、狩獵時代の、森林生活の、森の精のやうな或るものが現はれてゐる。それは何千年の文化を經たにも拘はらず、尙今でも野獸狩のやうな一見して極めて無意味な殘忍な娯樂を、吾々の中の最も感情の優しい人々にすらも喜ばせる所のものである。だがナターシヤの美しい容貌は、この原始的な情熱によつて害はれて、此の瞬間解らなくなる程、失はれてはゐないか。この愛らしい、慣れ切つた、親しみある顏の蔭から、レ・トルストイの全作品中最も獨創的なそして最も深遠な人物の顏、——即ち野猪でも打殺した時ならば狂喜の餘りきつと同じ樣に叫び且つ吼えたであらう所の『主の前の偉大なる獵夫』エロシカ叔父の顏を想ひ起さしむるやうな、別な、見知らぬ、變な、殆ど恐ろしい第二の顏が彼女に現はれて來はしないか。これは瞬間的な跡方もなく消え失せるやうな姿であるが、而もそれは消え失せず、同じ種類の、然し一層鋭く、そして一層深いためらひ勝ちな姿と結合し乍ら、その後何度も繰返され、そして絕へず繰返される所の姿である。

ピエール・ベズーホフには、此の荒々しい叫び聲に似たあるものが、お產の時にナターシャの發した尙一層恐ろしい、無意味な動物的な叫の中に聞えなかつたか。あのレーウインが、分娩中のキツテイの非人間的な叫喚咆哮の中に聞いたと同樣なものを聞かなかつたか。ナターシャが妻となり母となり、『身持になり、子を生み、而して哺育する』樣になつた『戰爭と平和』の結末に於いて、作者の計畫に從へばこの全叙事詩を一貫する彼女の姿は正に完成せられねばならなかつた。それは事實完成せられて居る。然し頗る不意にである。

結婚生活後七年の後ナターシャは『非常に肥つて、この强い體の母の中には昔のすらりとした活潑なナターシャの面影を見ることが出來ぬ程であつた。』――『…彼女はその衣服やその粧髪やそのぞんざいな投げやりな言葉や、それからソーニヤに對しても、女家庭教師に對しても、醜くとも美しくとも女といふ女に對する嫉妬が近しい人々の笑草になつた程に、勝手氣儘な振舞をした。』今や『彼女は自分の樣子にも物の言ひ方の優しさにも、夫の前に最もよく自分を見せようといふことにも、また化粧にも心を煩はさなかつた。强情なことを言つて夫を困らせまいといふやうなことも氣にしなかつた。彼女は凡てこれ等の規則に反したことばかりしてゐた。』『……しだらなさと、ぞんざいとに加ふるに、彼女は更に吝嗇であつた。』彼女と夫との間には何等精神的の連

鎖がなかつた。夫の『學術的の仕事に對して彼女は少しの理解もなかつた。』『彼女は自分自身の言葉を持つて居ない』と、自分でも決して理解力や『自己の言葉』の豐富に於て優れてゐなかつたニコライ・ロストフがあきれて居る。彼女にとつては夫と子供の世話をする以外の人間的のことは皆無關心なものとなつてゐる。彼女は家庭に於てはまるで荒んでゐる。人々を逃れて、唯『髪を亂したまゝで、寢衣を引つかけて、大股の足取で小供部屋から出て來て、嬉しげな顏付で、綠色の汚物の代りに黃色い汚物の付いて居る子供の襁褓を見せて、小供はもう大分よくなつたと聞かせ得るやうな身內の人々とのみ交はりをする氣でゐる。』作者は言ふ。『今往々見ゆるものは唯彼女の顏と體だけであつた。心は全然認め得られなかつた。見ることの出來たのは一個の强壯な、美しい、多產な雌鷄であつた。』

然らばナターシャの姿に對する此の藝術家の態度には何が起つたか。此の姿は彼にとつてその以前の意義を失つて了つたのか。小さくせられ、ぼんやりとなつて了つたのか。あれ程親しく又不思議な魅力に充たされてゐた處女のナターシャ、――プーシキンのタチヤナの姉妹か、レ・トルストイの聰明なミューズとでも云ひたい――あの『至純なる美の至純なる典型』と、それから『顏と體ばかり見えて全然心の認められない』此の懷妊して、子を生んで、哺育してるだけの、

人間らしくさへもなくて、動物的、原始的な母性なる『多産の雌鶏』との間に、何等かの豫知されなかつた、元の意匠に嵌まらない樣な矛盾があるか？

是等の二つの姿の間には、少なくとも作者その人の眼には、啻に何等の矛盾がないばかりでなく、却て有機的な論理と發展との必然的な繋がりがあるとしか見られない。作者はたゞ此の一點を狙つて、即ちナターシヤの『母性』への變化を狙つて、更に詳言すればあらゆる人間的、人格的な、然し條件的な有限的なものゝ、原始的、非人格的、無條件的、無限的なものへの變容を狙つて、恰も自然が花の子房を果實に導き來るが如くに、廣大な叙事詩全篇を通してわざ〳〵彼女を導いたのである。——彼が彼女を愛したのもたゞそのためにである。彼女の姿は弱くも朦朧ともなつたのでない、寧ろ反對に無上の完全に達したのである。今や始めてレ・トルストイの見地から見た久遠の女性、即ち永遠に多産な、子を生む母性がナターシヤの姿のうちに現はれたのである。

處女ナターシヤの美を形造つたかの『絶間なく燃ゆる生氣の火』は、母ナターシヤに於いて消えたのではなく、彼女の中に一層深く隱れた依然として神聖なものである。たゞ以前にもさう思はれたやうに精神的な神聖でなくて、肉的な神聖である。然し後者が前者よりも劣るのではなく、たゞ他の方面から觀照さるべき前者といふに過ぎない。ナターシヤに於いて吾々の目に人間

らしい人格の内的核子と見えた所のものは、——彼女の本質の凡ての魅力、凡ての神秘的な音樂や香氣は、——ほんの一時的な外皮であつた、輝かしい春の裝ひであつた。それは自然がその性的生活の間、花には芳香を與へ、鳥類には音聲と羽毛とを與へ、魚や水棲動物には蠱惑的な色彩を與へると同じやうに、自然が彼女に與へたものであつた。けれども此の一時的な美は同時に久遠の美である。何となれば、たゞ此處に、此の開花に於いて、この性の成熟に於いて、愛に於いて、翼を持ち且つ凡てに翼を與へる慾望のエロスに於いて、多樣な動物的感興の唯一神聖な意味と、總ての呼吸せる生物と宇宙生活の聖靈との聰明な結合とが、最も深く最も判然と表明されて居るからである。ナターシヤの第一の姿は毀損されたのではなく、たゞ變化して第二の姿の中に沈潛した丈である。トルストイは云ふ。『彼女は曩に本能の教ふるがまゝに自ら用ゐた魅力も、初めから自分の内心の最も小さな隅々までも少しも隱し立をしなかつた程に全心を擧げて全然自分を捧げたその夫に、今はたゞ可笑いしとばかり見えるだらうといふ感じを持つた。彼女はまた自分と夫との連鎖は、夫を自分の方に惹き付けたあの詩的な感情に依つて維持されたのでなく、何かもつと別な曖昧ではあるが、併し強固なもの、例へば彼女自身の心と彼女の肉體との間の結合の如きものに依つて、繋がれてゐるといふ感じを持つた。』

いつも至る所に於いてさうであるが如く、此處に於いても、レ・トルストイは、一切を『心と肉體との結合』に歸してゐる。肉と精神とをつなぐ動物的原始的なる『魂的人間』に歸してゐる。ホーマーの所謂、神々が天より地上にたれて、それで以て地と天とを結び、一の性を他の性と結合し、宇宙の半分を他の半分と結合して、『圓い』渾然たるものにし、生ける生命ある一つの全にする所の慾望のエロスの『黄金の鎖』に歸してゐる。

ナターシャの詩的な美は、花の色彩や魚の鱗や鳥の羽などが春の性的生活を終り、そして已に授胎し落ちついて、今は生産のため哺育のため養育のために默々と內部の力を集中するやうになつて色褪せるのと同じく、跡方もなく消盡したかのやうに見える。然しながら曾て此の美によつて與へられた夫に及ばす彼女の力は、減少せられないばかりか寧ろ增大した。『自分の家では、ナターシャは夫を女奴隷の足下に置いてゐた……。』ニコライ・ロストフは曰ふ。『ナターシャはおかしな女である。彼女は夫を臀に敷いて居る。然し何事か判斷する段になれば、彼女には自分の言葉といふものがない、彼女は夫の言葉を使つて物を言ふ。』又『一般の考は結局ピエールがその妻の臀に敷かれてゐるといふことに歸して居つた。そして實際さうであつた。』とレ・トルストイも既に自ら附言してゐる。

ピエールは思索したり、基督教的『復活』に向つて努力したり、氣のむくまゝに隣人の幸福や民衆の利益について空想することが出來る。けれどもその空想の實行になると、即ち財產の實際的分配になると、ナターシャはそのやうな事に同意するよりは寧ろ彼に後見人をつけさうである。かくて『夫の女奴隷』として、子供を保護する雌鷄として、雄鷄に爪を露出して、屹度雄鷄を鎭壓するであらう。何となれば、彼女は全自然を自分の後盾としてゐるからである。(『彼女は母として之に、即ち財產の分與に、反對することを自分の義務と思つた。』と、ベルスはソフイヤ・アンドレーエウナに就いて書いてゐる。)

けれどもそれ程極端にまで及ぶことはなかつた。ナターシャは安心してゐる。『ピエールは常にたゞ空想し、たゞ考察し、不斷「復活」するであらう。かくて彼の生活は平穩に過ぎ行く。彼は見かけよりも穩和で且つ聰明である。夫が六ケ敷い理窟を考へるのはよいが、然し子供の方も何かで慰められねばならぬ。』と、ナターシャは、動物的に賢い權威ある微笑をたゝへ乍ら、考へてゐる。

全然同樣な關係が伯爵夫人マリヤとニコライ・ロストフとの間、及びキツテイとレーウインとの間にもあるのではないか。

伯爵夫人マリヤの心は常に無限な、永遠な完全なものに向けられてゐる。その故に彼女は安住を見出し得なかつた。彼女には『肉體になやまさるゝ心の高潔なかくれた苦痛がある。』それでも彼女はその財産を分與するといふピエールの基督教的夢想に關しては、卒直な皮肉を以て次の如くに語つてゐる。

『彼は、神自ら吾々に指示し給ふた手近な義務がまだ他にあることを忘れてゐる。吾々は自身に冒險することとは出來る、しかし子供を冒險してはならぬ、といふことを忘れてゐる。』――伯爵夫人ソフイヤ・アンドレーエウナは殆んど伯爵夫人マリヤと同じ言葉で、『私に小さい子供さへなかつたら、私は彼と一緒に出かけただらう。』と言つて居る。すると、マリヤは永遠無限のものに對する希求あるに拘はらず、またその『肉體になやまさるゝ心の高尚な苦痛』あるに拘はらず、ナターシヤが人間の雌の智惠を具現してゐる如くに、その荒々しい露骨な赤裸の中に人間の雄の動物的智惠を具現せる夫のニコライ・ロストフと全然一致して居るわけである。

レ・トルストイの作品中の主人公は悉く死するか、でなければ今云つたやうな點に到着する。――他に出口は無い。

ピエールとレーウイン、即ち二つの作品の理屈ばつて居る理性と基督教的良心とは、その妻の

キツティ及びナターシヤの臀に敷かれてゐる。多産なる此の雌鷄達はその夫達のあらゆる思索に對して、無言の辯駁し難き論證を以て、即ち新らしい子を世の中に出すことのみを以て答へてゐる『それも亦幸福である。今後常に變らぬであらうし、又さうでなければならぬ。』と、此の偉大なる肉の洞察者は、彼自身の意志に逆らひ彼自身の意識に逆らつて、是等の事實を云つて居るやうに思はれる。

ナターシヤは『自分の言葉といふものを持たぬ。』然し宏大な複雜な建物の一番の尖端に聳えて、それを支配し完成して居る、かの彫像と同じく、『戰爭と平和』の結末に現はれてゐる母親ナターシヤの姿は、無言のまゝ必然的にこの宏大なる叙事詩全體を支配してゐる。だから世界的歴史的悲劇の事件たる戰爭も、國民の運動も、諸英雄の偉大も沒落も、青い汚物の代りに黄色い汚物のついてゐる襁褓を誇り顔に見せてゐる此の母性の踏台としか見えない。アウステルリツツもボロデイノも、モスクワの大火も、ナポレオンも、『祝福の人』アレクサンドルもあつてよしまたなくてもよい。一切は過ぎ行き、一切は忘れられ、渚の砂上に書かれた文字の如く、次の波にて世界歴史の板上から掻き消されるであらう。けれども母性等は如何なる文明の時代に於いても、又如何なる世界的歴史的嵐の後にも、決して襁褓の上の青い汚物の代りに黄色い汚物を喜ぶ

ことを止めないであらう。曾て人間の手で建てられた最も偉大なる建物の一つである此の作物の絶頂に於いて、『戰爭と平和』の作者は、このシニツクな旗を、黄色い汚物のある襁褓を、人類の道しるべの旗として打ち樹てゝゐる。

アンドレイ公爵の此の世ならぬ非人間的な第二の顏は、死に於て示され、ナターシヤの第二の顏は子を産む事に於て現はれてゐる。そしてこれに藏はれ、これに併呑された第一の、人間的な、一個特別な彼女の顏は、その人格は、最早之を見ることが出來ない、それツきり二度と見ることが出來ない。今やナターシヤはたゞの母に過ぎない、或は寧ろたゞの雌鷄に過ぎない、世界の一の性たる女性的半面に過ぎない。水の泡は完全なカラタエフの『圓さ』にまで圓くなつて世界的動物的生活の大海中に溶けて消え失せてゐる。かく沒箇性的な、非人間的なものゝ中に、あらゆる個々の人間的な箇性が消失し併呑されるといふことは、レ・トルストイの藝術の支配觀念の一である。

エロシカ叔父を自然が呑み、(『俺が死んだら草が生える。』) プラトン・カラタエフやアンドレイ公爵を死が呑み、ナターシヤを分娩が併呑したるが如く、アンナ・カレニナも亦産むことなき、結婚外の、酒宴的な、破壞的な、レ・トルストイの自から見れば惡しき罪ある愛の元素、『死を齎

らすエロス』の元素によつて併呑された。

ウロンスキイの最初の出現以來、殆ど其の最初の無言の一瞥を彼に投じて以來、最後の息を引取るまで、アンナは戀してゐた、たゞ戀してゐた。彼女がそれまで如何なる事を感じたり考へたり、または如何に生活し來つたかは吾々の殆ど知らない處である。彼女の戀愛以前には、彼女は全然存在してゐなかつたと見える位である。人は唯戀する女としてのみ彼女を考へることが出來る。彼女は全身愛である。恰もサラマンダーの身が火から生じ、ウンディンの體が水から生じた如くに、彼女の全人物、肉體も心も共に戀愛から織りだされてゐる。

彼女とウロンスキイとの間にも、ナターシヤとピエールの間、キツティとレーウインの間に於けるが如く、何等意識的な、概して精神的な結合が無い。たゞ暗い、そして固い、肉體的、魂的なる結合、即ち『心と肉體との結合』があるのみである。彼女は戀愛以外のことは決して彼と話さぬ。然し彼等の戀愛の話は下らないものである。

『私はペテルブルグで一冬踊るよりも、このモスクワのあなたの一つの舞踏會で踊つた方が餘計なんですもの。私旅行前に一と息つきたいわ。』

『ではあなたは本當に明日行らつしやるのですね?』と、ウロンスキイは訊いた。

『え、私その積りで居りますの。』と、アンナは男の思ひ切つた質問に驚かされたやうに答へた。けれども彼女の眼と微笑との抑へ切れぬ顫へる輝きは、彼女がかう云つた時男の心を焼いた。

この世俗的な諺言の中には、言葉としては別に何物も言はれて居らぬ。然しその『眼と微笑との』無言の『顫へる輝き』は、言葉に表はされなかつたものを云ひ盡してゐる。そしてそれは情熱の大切な瀬戸際である。

ウロンスキイがアンナにその戀を打ち明ける時も亦言葉はやつぱり下らないものである。

『私にとつてはあなたが生命の全部であるといふことをあなたは御存じないですか？私にとつてはあなたと私とは一つものです……。そして私はあなたのためにもこの先どうせ平安がありえないことを見てゐます。私は唯絶望や不幸のありさうなことを見ます、さもなければ幸福のありさうなことを見ます、――そしてそれは何といふ幸福でせう……。それは本當にあり得ることでせうか？』彼は唇だけでかう附け加へた。然しそれでも彼女は聽きとつた。

『彼女はありツたけの智惠をしぼツて、云ふべきことを云はうと思つたが、さうはせずに、戀に満てる眼附を彼に据え、そして何とも答へなかつた。――ウロンスキイの此の頼りない平凡な下らない切れ〴〵の舌縺れは、サクンタラや、ソロモンとスラミタや、ロメオとジュリエット等の

『戀の凱歌』と比較すれば、實にそれは貧弱に見える。けれどもアンナとウロンスキイとは言葉を以て語つてゐるのでない、――惚れ合つた動物の如くたゞ『輝ける目色と微笑』、聲の調子、表情若しくは身振で語り合つてゐるのだ。此の動物的、原始的な無言な愛の言葉は、人間のあらゆる言葉よりもどれ程深いかしれない。

尤もレ・トルストイの作品に於いては、概して、藝術的重心乃至描寫の力が戯曲的な部分に存せずして、寧ろ物語的の部分に存し、作中人物の會話や彼等の語ることに存するのでなくて、寧ろ彼等に就いて語られてゐる所に存すると云ふことを認めなければならぬ。彼等の言葉は空しく、無意義であるが、その代り彼等の沈默は底知れず深く且つ聰明である。レ・トルストイはウロンスキイの馬フルウ・フルウに就いてかう云つて居る。『その馬は單にその口の機械的構造が物言ふことを許さぬと云ふ理由に依つて、物を云はない動物の一つである』と。レ・トルストイの作中人物のある者についても、例へば、ウロンスキイやニコライ・ロストフに就いても、彼等は口の機械的構造がさうすることを許したが故に、物を言つてゐるのだと云ふことが出來る。

夫の言葉を用ゐて物を言ふナタ―シや、農民の言葉と諺と格言とを用ゐて物を言ふプラトン・カラタエフ等の如く、アンナも亦『自分の言葉を持つて居らぬ。』吾々の記憶の中にはアンナ・カレー

ニナの忘れることの出來ない彼女獨特の感情や感覺が一ぱいあるが、一つの思想もなければ、人間的に意識せらた個性的な特殊な彼女その人に特有な一つの言葉も無い、戀愛に關してすら無い。けれども彼女は決して愚かな女とは見えない。それ所でなく、反對に、吾々は彼女がドルリイやキッティや又はウロンスキイなどよりも一層智的に複雜で一層顯著であるやうに思ふ。或は又(誰もさうは思はぬだらうが)多辯な、餘りに多辯なレーウインよりも顯著であるとさへも推測するのである。けれども此の小說の構造に於ける彼女の地位もさうだし、彼女自身も全然情熱的要素の中に併呑されてゐるので、此の方面から、即ち知性や意識や高尙な淸廉な無慾な精神生活の方面からは、彼女が吾々の目に遮らるゝやうになつてゐる。戀愛なくして彼女は誰であり又何であるか?吾々は單に彼女がペテルブルグの上流社會の一婦人なることを知るのみである。けれども彼女の階級を外にしては、彼女が如何なる歷史的生活から出たか、彼女が如何なる文化から生れたか。ロシヤの土地にふみ込んでゐる彼女の本質的な根は何處にあるか。然し彼女の本質は、此の根を待つ可く十分深く、且つ獨創的である。彼女は彼女の愛のみならず、廣く愛なるものについて何を考へてゐるか。啻に彼女の家族のみでなく、槪して家族といふものについて、子供に就いて、人間に就いて、義務に就いて、自然に就いて、藝術に就いて、生活に就いて、死に就い

で、神に就いて何う考へてゐるか。之に關して吾々は何物をも、或は殆ど何物をも知らない。けれどもその代り吾々は、彼女の縮れ髪が如何に顴顬や後頭にちゞれかゝつてゐるか、彼女の細い指尖がどういふ風に尖細くなつてゐるか、また彼女がどんな圓い、しつかりした、まるで磨きをかけたやうな頸を持つてゐるかを知つて居る。彼女の顏の一つ一つの表情も、彼女の一つ一つの身のこなし方も、吾々は知つて居る。吾々は彼女の肉體を、また一部は動物的、原始的方面から見た彼女の心をも、即ちチユツチエフの所謂『夜の心』をも、驚くべき程明瞭に見てゐる。然し馬フルウ・フルウの肉體や心乃至箇性すら吾々はそれ程はツきりではないが見て居る。何となれば此のウロンスキイの馬にも亦自己の『夜の心』があり、自己の動物的、原始的箇性を持つてゐるから。そして此の箇性は悲劇の人物中の一つなのである。若しそれ誰かの主張した如くウロンスキイが侍從武官の制服を着けた牡馬のやうな印象を喚起すといふことが眞實だとすれば、彼の馬も亦一個の立派な婦人のやうに見えるだらう。そしてフルウ・フルウの美に於ける『久遠の女性』とアンナ・カレーニナとの類似が、最初は殆ど捕へ難いものでも、次第々々に深くなり、遂には奧妙な前兆に滿ちたものとなつて來るのは偶然でない。

フルウ・フルウは『その體の釣合に全く難が無いではなかつた。』けれども此の唯一な不規則に見

える『個性的な』特色こそ、實にウロンスキイを魅惑したものである。彼が初めてアンナを見た時に、女の外貌全體に亘つて驚かされたものは『門地』であつた、『血統』であつた。フルウ・フルウも亦『あらゆる缺點を忘れしめる特性を最高度に持つてゐた、――此の特性とは『血統』であり『門地』であつた。即ち『體軀の貴族的性質であつた。此の馬といひ婦人といひ共に同じ様に、力と優しさが結合し、高雅と強健とが結合した肉體輪廓の一定した表現を持つてゐる。アンナには『尖細りの した指を有つた小さな手』があるがそれは『精力的で』又『優美』である。フルウ・フルウの脚の骨も『膝から下は、前から見れば指よりも細く見えたが、その代りに横の方から見れば非常に大きかつた。』『薄い動き易い繻子のやうに滑らかな皮膚の中に漲つてゐる血管網の下からはつきり現はれてゐる筋肉は、恰も骨でもあるかの如く固く見えた……その姿全體には、殊にその頭には、ある定まつた、力强い、そして同時に優しい表情があつた。此の兩者には一様に恰も翼を持つてゐるかのやうな運動の輕快さと確實さがあつた。又それと同時に餘りに熱烈で緊張した怖ろしいやうな嚴めしい酒宴的な生命の過剩があつた。』『フルウ・フルウの骨張つた頭部には飛び出た輝やかしい快活な眼』があつた)が、此の頭は鼻孔で息をする時、その内部に血を滿たしてゐる膜と共に突き出た鼻端に擴がるやうに見えた。』アンナ

と全く同じ様に此の馬は『物を言はずとも』自分の主人を理解した。『少なくともウロンスキイには、彼が今馬を見ながら感じてゐることを此の動物も總て理解したと、思はれた。彼等の間には不思議な、實に肉體的、動物的、原始的連鎖のみならず、まるで『魂的の』結合があるのである。馬は彼の愛を知り、彼を愛し、その愛を希ひながらもまたそれを恐れてゐる。『ウロンスキイが彼に近づくや否や、馬は深く息を吸ひ込む。そして白眼が充血する程その飛び出た眼を歪めて、反對の側から、來た主人を見て、口籠を搖り動かしたり、彈みよく足踏みをしたりする。』(アンナも亦『彈みのよい歩き方』をした。)

『おゝ可愛い奴、――おゝ。』と、ウロンスキイは馬の傍に寄つてそれに話しかけながら言つた。

『けれども彼が近づいて行くにつれて、馬は益々昂奮した。でも彼が馬の處へ近づくと、不意に靜かになり、そして其の筋肉は薄い柔かな毛の下でをのゝいた。ウロンスキイはその固い首をなで、他の一方の側に垂れた鬣の、尖つた頂の邊の一房を直し、そして自分の顏を蝙蝠の翅のやうに擴がつた柔かい馬の鼻面に押し當てた。馬はすうッと空氣を吸ひ込んで、やがてそれを緊張した鼻の穴から吐き出し、身體を慄はし、それから尖つた耳をひきつけて、主人の袖を捕へんと

するものゝ如くに、その丈夫な黒い唇をウロンスキイの方に伸した。けれども口籠のある事を思ひ出して、馬はそれをゆすぶりつゝ再び滑らかな脚で似て足踏をし始めた。』

『滑らかな』とか、『柔かな』とか、『丈夫な』とか云ふ言葉が、フルウ・フルウ及びアンナの外貌の叙述に於て一様に繰返されてゐる。

ウロンスキイは彼の馬を、動物のやうではなく、殆ど理性あるものゝやうに、女の様に愛してゐる。手短かに言へば彼は馬に惚れてゐるのである。

『靜かにしろ、可愛い奴、靜かにしろ！』と、彼は尙片手で馬を撫でながら言つた……。馬の興奮は彼にも傳はつて、彼は其の心臟に血の漲るのを覺え、そして馬と同じやうに彼も亦身を動したり、咬んだりしたくなつて來る。彼の心持は嬉しくもあれば怖しくもあつた。何だか『惡魔的な』、『慘酷な』所のあるアンナの美しさからも、彼は『怖しさと同時に嬉しさを感じた。』フルウ・フルウと出會つた後には、彼はいつもアンナとの密會に急いだ。彼が自分自らに於いて、また美しい『神の創造』である動物に於いて、今しがた感じたのと同じ荒い掠奪的な、拘束なき動物的生命の過剩が、彼を同じ様に美しい別な『神の創造』であるアンナと結合させたのである。

フルウ・フルウも女と同じく、自分に及ぼすその主人の支配力を愛してゐる。そしてアンナと

同じく、此の恐ろしい而も甘い力に、死に至るまでも、最後の息を引取るまでも、最後の一瞥を投げかはすまでも從順である。そして兩者の身には、避けがたい戀愛の惡戯、永遠の悲劇、死を齎らすエロスの子供らしい戯れが働いてゐる。

競馬の時、ウロンスキイが既に皆を悉く拔いて、そしてフルウ・フルウが決勝點めがけて、あらりッたけの力を張りつめて、彼を乘せたまゝ飛鳥のやうに走つてゐる時、彼は無量の優しさと愛情とを以て『お！可愛い奴！』と思ふ。馬はその騎者の運動や思想や感情を一つ一つ推測して居る。此の兩者には一つの意志、一つの身體、一つの心しかない。兩者の間には――『心と身體との結合』があるのみである。――彼等は一つである。かくて、殆ど超自然的な飛翔の歡喜のうちに、飛翔の甘い陶醉のうちに、人間と動物とが融け合つてゐる。此の刹那にウロンスキイはヨリ多く不可思議な秘密な愛を以て、アンナよりも寧ろフルウ・フルウを愛してゐるかも知れぬ。

然し恰度その時、氣まづい動作、認容し難い呪ふべき一つの動作が生ずる。馬の運動に間に合はないで、彼は鞍の上に尻をつけた。と、俄に彼の姿勢は一變して、何か怖ろしい事が起つたやうな氣がした……。ウロンスキイは片足が地に觸はつた。すると馬は彼のこの足の上に轉んだ。彼がその足を拔く間もなく、馬は一方の側にどうと倒れて、重苦しげに喘ぎながら、身を起

さうとして、その細長い汗の滴る頸で空しくもがきだした。そして射られた鳥のやうに彼の足許の地上で震へ出した。ウロンスキイのやつた唯一つのへまな動作は馬の脊骨を折つたのであつた。

けれどもこれは彼が餘程後になつて認めたことである……。今彼はよろめきながら汚らしい動かぬ地の上に突立つてゐた。彼の前には重苦しげに喘ぎながら、フルウ・フルウが横たはつてゐた。そして頸を彼の方に向けつゝ、その美しい眼を以て彼を見詰めてゐた。

まだ如何なる事が起つたかを知らずに、ヴロンスキイは手綱を引張つた。馬は鞍の緣をきしらせながら、またもや小魚の如くに藻掻いた。そして前足を前の方に伸ばした。けれども體の後部を揚げることが出來ずに身を顫はしてまたもや横に倒れた。

忿怒のために顏を醜く青くして、下顎を震はしながら、ヴロンスキイは靴の踵で馬の横腹を蹴つて、またもや手綱を引張つた。けれども馬はもう動かなかつた。そして唯鼻面を地につけて、物言ひたげな眼をしてその主人を見た。

『おゝ！』自分の頭を手で掴んで、ヴロンスキイは呻吟した。『おゝ、私はとんでもないことをした。』と叫んだ。『競爭も失敗だ！自分の責ではあるが、不面目な忍び難いことだ！それに此の可愛

い不幸な潰れ馬！……あゝあゝ、私はとんでもないことをした。』

生れて初めて彼は最も苦しい不幸といふものを味はつた。取返しのつかぬ不幸を、而も自分自身の責に歸すべき不幸を。

實に彼はこの動物の『物言ひたげな』人間らしい最後の目色の中に恐ろしい譴責を讀んだ、又了解した。彼は、自分の愛した、美しい神の造物を、この慘酷な遊戯に於いて自分の虚榮心の犧牲に供したといふことによつて、本當に取返しのつかぬ惡行をやつたことが解つた。

そして運命がフルウ・フルウの死に依つて彼に警戒を與へんと欲したのでないかといふことを、神ならぬ身の彼がいかで知り得ようか。彼はアンナをも此の慘酷なる遊びの中に殺すのではなからうか。前の如く此處にも『一個のまづい呪ふべきゆるしがたい動作がある。』しかし、それは故意ならぬ無意識的の動作ではあるが、餘りに緊張した彼女の存在は過度の重荷に依つて壓し潰され、そして倒れて『射られた鳥の如くに彼の足許で打震える』だらう。

死と破滅とを弄ぶ盲目なる兒童のやうな神エロスの此の慘酷なる法則は、換言すれば愛を憎惡に似たものとなし、肉體の支配力を殺害に似たものとなす所の情慾の慘酷性は、戀に溺れた人々の最も熱烈な愛撫の中にも示されて居る。

アンナを見た時ウロンスキイは『殺害者が自分の殺した者の屍を見た時に感ぜざるを得ないやうな心持を感じた……。かういふ恐ろしい恥辱の代償を拂つた事柄を回想すると、そこには恐るべき、そして忌はしい何ものかが存してゐた。自分の精神的暴露に對する羞恥がアンナを壓倒して、その感じが彼にも傳はつた。けれども殺害者は、殺された屍に對して恐怖を懷くにも拘はらず、死體を切りさいなみ、屍を隱し、殺害に依つて得た所のものを利用せねばならぬ。更に殺害者は怒つて、殆ど狂氣の如く屍の上に身を投じ、それを引き摺り廻し、引き裂くのである。斯くの如くウロンスキイも亦彼女の顏や肩を隈なく接吻した。』

アンナが自殺した後、彼は少しも變らぬその屍體が『廠舍の卓上に見も知らぬ人中に猥らに擴げられてゐるのを見た。その血に染つた身體はまだ去りやらぬ生命に滿ち、損はれなかつた頭は重い捲髮と顆顆に波打つてゐる縮毛と共に後ろに曲げられ、そして其の半ば開いた紅い口のついた美しい顏には、硬ばつた異樣な、憫むべき唇の表情があり、それから閉ぢられない眼の中には、喧嘩の時に彼によく云つた「後で後悔しますよ」といふ恐ろしい詞を宣告してゐるかの樣な怖ろしい表情があつた。』

死んだ眼の此の『物言ひたげな眼色』の中に、彼は曾て殺した動物の『人間的な』眼色に於け

ると同じ叱責を讀まなかつたらうか。そして又もや新たに、あの時の如く『最も苦しい不幸、而も自ら其の責を負ふべき取返しのつかぬ不幸が自分の生涯に起つた』といふことを悟らなかつたらうか。

人間の死にも、動物の死にも、同じ悲劇が行はれたのである。弱者に加へる强者の永久的な暴力が行はれたのである。即ち曾て神に向つて『みな一にならんことを。父よ、爾吾に在り、吾亦爾に在るが如く、彼等も我儕に在りて一にならんことを。』と言つた無慾な人に對する、情熱のエロスの犯罪が行はれたのである。

かくの如く、人間を探究して動物に至り、動物を探究して人間に達することによつて、レ・トルストイは兩者の最後の奥底に最初の共通な唯一な結合的な象徴的な或るものを見出してゐる。

けれども此の地下の深みに達する迄に、彼は實際どの位の石の壁や、どれ程の肉や血の深淵を通らねばならなかつたか知れぬ。拘束なき、然し兎に角無意識的な罪無き生命の過剩に滿てるアンナ・カレーニナから（彼女の罪はみな彼女が餘りに美しく『燃えてゐて、戀せずには居られないために戀をした』といふことに存しないか。）『廠舍の卓上に猥らに擴げられた此の血塗れの屍體に至るまで』――それは實に何といふ恐ろしい徑路だらう。

レ・トルストイが、情慾に於いて、病氣に於いて、出産に於いて、死亡に於て、人間からあらゆる人間的なものを殘らず引剝ぐ時、神の肖像をば野獸や家畜の像に變へる時、彼は時として目的なき惡意の慘酷に接觸してゐると思はれないだらうか。彼は恐ろしいものを以て滿足しない。彼は最後まで赤裸なもの、シニツクなものを求める。ダンテの作に於いて惡魔の歡喜の中に、罪人の絶望の中に存するあの喜劇的な同時に恐ろしいものを求める。

ボロデイノの戰の後、負傷者を收容する天幕の中の繃帶所に、『側に脫ぎ棄てゝある制服によれば多分コザツク兵らしい一人の韃靼人が卓の上に坐つてゐた。四人の兵士が彼を抑へてゐた。眼鏡をかけた一人の醫者が、彼の褐色の筋ばつた背を切開してゐた。

ウフ！ウフ！ウフ！と韃靼人は豚のやうに呻つてゐたが、不意に頰の廣い、黑い、獅子鼻の顏を上げ、白い齒を露出して、もがいたり痙攣つたり劈くやうな長く引つぱつた悲鳴を揚げ始めた。』

此の白い齒をむき出してゐる獅子鼻の黑い顏は、地獄』若しくは『最後の審判』の幻影ではないか。何處かの呪はれた『社會』の一隅に於いても亦惡鬼に苦しめられてゐる罪人が、やつぱり『豚のやうに呻つてゐる』やうなことはないか。

同じ天幕內の別の卓上には一人の大きな肥つた男が横たはつてゐた。『數名の看護長が此の男の

胸のあたりに寄り掛かるやうにして彼をしツかと抑へてゐた。彼の一方の肥つた大きな白い脛は、素速くまた斷へず熱病のやうにふるへながら引きつツてゐた。此の男は痙攣的に喚いたり咽び泣いたりした。その間二人の醫師は――その一人は眞靑になつて慄へてゐた――默つて彼の片方の紅い脛を何うかしてゐた。』此の不幸な男は女から好かれてゐるナターシヤの未來の夫で、公爵アンドレイの競爭者なる美男子のアナトーリであつた。人々は彼を助け起して、彼を落着かせた。

『私に見せてください……おゝ、おゝ、おゝ！』と云ふ喚き聲で杜切らされた驚いたやうな、苦痛に征服された彼の呻きが聞えた。――此の負傷者に、まだ長靴を穿いたまゝ切斷された血塗れの脛が示された。

『おゝ、おゝ、おゝ！』と、彼は女の樣に喚いた。

熱病のふるへ見たやうに時々素速くひきつける此の柔弱な美男子の白い脛にも、それから最後の別れでも告げる爲めか何うか自分の身體の切斷された部分を見ようといふ、此の負傷者の動物的に無意義な、子供らしい憐むべき願にも、恰度韃靼人の『豚のやうな呻吟』に於けると同樣、恐ろしい而も同時に滑稽な、恐ろしい中にも滑稽な何ものかが存してゐる。

『主人と下男』に於いて凍死せる商人ブレフーノフは、『凍り豚の様に固くなつてゐた。そのはだかつてゐた足をそのまゝはだからして置いて、ニキータの身體から下した。』萬事は最早終つたかのやうに見えた。有德の老翁アキムなるレ・トルストイは、不幸なるブレフーノフに對して必要なことは皆した。この燦石のやうに固い人間を驅つて、際限なき恐れや肉の苦痛を透して、基督教的の柔和や復活にまでつれて行つた。そして彼の人格の嶮しい角を悉くすりへらし、カラタエフの完全な『圓さ』にまでまるめた。ブレフーノフは兄弟のために自分の靈を棄てゝ、神に於いて死んだ。この最後の天才的に生き〳〵した、畫のやうな、而も又動物的なシニツクな姿を取去つて、かの古代の悲劇作者等がその死に行く主人公等の害はれた顏の上に擴げかけたやうな迷信的な羞恥の被覆で以て、此の姿を吾々の目から蔽ふてもよからうと思はれる。所が、恰も忽焉と基督教的な老人アキムの背後から覗き出す手のつけられぬ異教徒がある、老いたる『森の精』がある、エロシカ叔父がある。彼は一見無邪氣な氣まぐれのやうな、その實たちの惡い嘲笑を浮べ、此の見苦しい畜生の樣な屍の有樣を以て、自分の雙生兒の基督教的復活に復讐をしてゐるかの如くにも見える。——恐らく此の屍も何時かしら喇叭の音の響く時には復活して不朽となり、そして神の懷に受け容れられるであらう。が、それまでは兩足を不樣に、ふしだらにはだけて、

恰も『凍り豚』のやうに硬ばつてゐるのだ。これは、賴りなく朽ち易いのにも拘はらず、神に似たる人間の肉體の神聖に對し、かの希臘の異教徒が野蠻人の異教徒と反對に生に於いても死に於いても尊んでゐた所の、人間の肉體の神聖に對して、加へられた不必要な、冒瀆的なことのやうに思はれる最後の打擊である。

イワン・イリイチの病氣の物語と來ては、亦隨分恐ろしい滑稽味が含まれて居る。こゝに此の藝術家は、宛も殊更に自己を欺き、自己の肉體の究極の野獸性に眼を蔽はんとする强い〳〵人間の習慣性を嘲弄して居る。それは或は取るに足らぬものであるかも知れないが、吾々の超動物的靈性にとつてはどれ程根强い、どれほど感動すべき特性だか知れぬ。例へば、『イワン・イリイチの排泄物に對しては特殊の裝置が用ゐらるゝこと、又この手續が彼には其の度毎に苦痛であつたといふ事を吾々は知つて居る。その苦痛は、不潔とか尾籠とか臭氣とかのためであり、又他の人が立合はねばならぬといふ意識からだ。給仕の役目を勤めるゲラシムといふ百性が、彼の所へ排泄物を運び出しにくるのであつた。一度イワン・イリイチは便器から起ち上つたけれど、半股引を引きあげる力がなくて、柔かい安樂椅子の上に尻餅をついて、恐る〳〵筋の著しく現れた裸の力無いわが股を見守つてゐた。』

若くて、健康で、潑溂として、清潔で、輕快で、力强く、善良で而も單純な百性のゲラシムと、不潔で、いやな臭がして、人間の品位を失ふ程やつれて、疾病のために辱かしめられ勝な旦那イワン・イリイチとの對照をば、此の藝術家は實に假借する所なき執拗さを以て描いてゐる。

苦痛を和げるがために、彼は高く揚げた自分の足をゲラシムの肩にかつがせた。

『それでよし。然しもつと高くあげるわけにいかんか。』

『いきますとも。』ゲラシムは少し高く足を揚げた。

此處に於いても、人間の身體のかうした下品な有樣の中に、自分の裸かな股を見守ることの中に、またゲラシムの兩肩に高く載せられた兩足のうちに、商人ブレフーノフのはだかつて凍つた屍に於けると同じやうに、意地惡くシニックな怖ろしい滑稽味が現はれて居る。

レ・トルストイが、その主人公或は更に適切に言へばその犧牲者なるイワン・イリイチに嘗めさせた苦痛の奇拔さ、綿密さ、種々雜多なる肉體の苦痛、心の苦しみ、悔恨、懺悔、恐怖等の『火責癖』、『吊刑』、『頸紐』などは、よしそれが善良な基督教的目的を伴ふてゐるにしても矢張レ・トルストイの祖先の一人でピョートル大帝の寵臣であり秘密法院長であつた、有名なピ

ョートル・アンドレーウイチ・トルストイ伯爵の主宰した神聖宗教審問所若しくはプレオブラジエンスキイ裁判所の拷問室を想ひ起さしめると認めなければならぬ。

イワン・イリイチは果して自分の性格、自分自身の生きた顏、自分獨特の唯一な何者にも變へがたい人格を有して居るか。結局彼に殘存するものは、決して苦痛のために『吼え』、叫び、『豚の如く呻る』動物でも亦肉體でもない。たゞ苦痛によつて引裂かれ咬切られた半分腐つた肉の一片たるにすぎない。

斯くの如く、レ・トルストイの作中には、性格も人格もない。人物すらも居ないで、たゞ靜觀し、懊惱して居る人々のみがある。——主人公は居なくつて、ただ、戰はず、抵抗せず、動物的原始的生命の流れのまゝに動く犧牲者があるばかりである。これ等の人間の像は、浮き上つて表面に現はるゝや否や、直ちにまた原始的な暴力のために併呑せられて、永遠にその中に沈み、そして溺れ死ぬる。

然し主人公がないから、又悲劇も無い。致る處に個々の悲劇的葛藤が出來てはゐるけれど、それが人間的な姿に依つて解かれないから、それ等は再び非人格的な無意義な無意志な非人間的なものに復歸する。從つて統一的な大團圓は無い。即ち古人の所謂カタストロフといふものが無

い。かの渺茫たる叙事詩の大海のうちに一切が個々の波の輝きとして波の戰慄として波立ち動いてゐるのである。一切のものが始めなく終なく、生れ、生き、死し、而してまた生れるのである。

人間を自由にする恐怖がないやうに、又自由にする笑ひもない。レ・トルストイの作を讀む時には、決してから〳〵と笑へないばかりでなく、一度も微笑の刺戟すらない。恰も萬物の上に雲無き夕立空のやうな、低い、『銅のやうな』空が壓しかぶさつて來るやうなものだ。だから心臟は遂に苦惱のために硬くなつて了つて、呼吸が出來ず、空氣が無いやうに思はれる。

レ・トルストイの主なる『主人公』即ち犧牲は、皆悉く利發な、正直な、善良な、少くとも人の好い、單純な、素朴な人々である。それにも拘はらず、吾々は何となく彼等と親しみ難い氣がする。彼等は何處となく人を不安にする、重苦しい濁つたやうな、甚しきに至つては恐怖の念を起さすやうな點がある。時々彼等の總てから、甚だしきは『至純なる美の至純なる典型』たる、至つて無垢な處女からすらも、老いたる『森の精』エロシカ叔父に持有なる森の香、動物のにほひが漂ふて來る。この根據が彼等自身にあるか、又は彼等を創造した藝術家にあるか、それは別として、吾々は決して、吾々に知れて居る彼等の人間的な顏の蔭から、別の、見知らぬ、動物的、原始的な顏が覗いてゐないといふことを確信することは出來ぬ。吾々は決して、それが、ルソーの『自然

狀態』についてウオルテールの皮肉つたやうに、四ん這ひになつて森に逃げ、狩獵の時に於けるナターシヤの樣に異樣な荒い叫聲を發し、背中を切られた韃靼人のやうに呻り、若しくはイワン・イリイチのやうに『う〜』といふ恐しい叫を『叫ばぬかどうか』を確言する事は出來ない。

既にツルゲーニエフもこの壓迫の感を認め、レ・トルストイの作品は心や呼吸や精神を爽やかにする高尙な自由乃至山の空氣といふものを缺如してゐることを難じ、そして此の缺點を『知識』の不足によつて說明しようと企てた。けれどもツルゲーニエフは此の『知識』といふ言葉の下に、『意識』といふ意味を持たしたとする方が一層正しくはなからうか。

『私は君に自由を——精神的の自由を望む。』と、彼は曾てレ・トルストイに書き送つたことがある。ツルゲーニエフは『戰爭と平和』を世界文學中の最大なる創造の一つで、而もまた同時に『眞の知識の缺如に基因する眞の自由の缺けて居る最も悲しむべき一例』として觀た。いや、『最も廣い意味に於ける自由といふものなしに、吾々は眞の藝術家を考へることは出來ぬ。この空氣がなくては呼吸することが出來ぬ。』と、彼は云つて居る。

ボロデイノの戰の前、アンドレイ公爵が軍隊の後についてスモレンスク街道を行つた時、土堤の傍の小さい池で水を浴びてゐる兵士等を見た。それは蒸暑い八月の日の午後二時であつた。『塵

の中に紅い球のやうに見えた太陽は、堪らない程熱く照りつけた……風はなかつた。彼が土堤の上を騎馬で通る時に、泥の香と池の涼しい風が吹いて來た。水は非常に汚いけれども、浴びて見たいといふ氣が彼を襲つた。そして彼は叫聲や笑聲の起つて來る池の方を見遣つた。小さな、濁つた、青草の生えた池には、見た所水嵩が約四分ノ二高まつて土堤から溢れようとする位であつた。何となれば、裸の白い身體や、煉瓦のやうな赤い手や顏や首をその中でぴちや〳〵いはしてゐる兵卒で一杯であつたから。此の裸の白い人間の肉が總て、水桶の中の鮒か何ぞのやうに、此の汚い沼の中で、笑つたり歡聲を發したりしながらぴちや〳〵水を撥ねてゐた。そしてぴちやぴちやいふ音が陽氣に響けば響く程、それによつて生ずる印象は益々悲しかつた……。互にたゝく音や、歡聲や　叫びなどがよく聞えた。水際に、土堤に、池に、到る處、白い强壯な逞ましい肉が見られた……。

『閣下、なか〳〵よござんすよ。一つお仲間入りをなさつては。』と、水を浴びてゐる一人の男がすゝめた。

『汚い。』と、アンドレイ公爵は答へて顏を顰めた……。』彼は小屋で水を浴びた方がよいと思つた。

『肉、體、大砲の餌食！』と、自分の裸體を見守りながら彼は考へた。そして寒さのためと云ふ

よりは寧ろ汚い池で身を洗つてゐたあの多數の身體を見た時の、自分にも分らない嫌惡と恐怖との爲めに、全身を慄はした。

これと同じ身體を、『肉』を、彼はその後負傷者を收容する天幕の繃帶所で見た。彼が周圍に見た所の凡ては、彼にとつては、人間の裸體といふ一般的な印象に混じてしまつた。その體は恰も數週間前、かの暑い八月の日に、スモレンスク街道の側の汚い池を一ぱいに充たしてゐた肉體と同じやうに、此の低い天幕を一ぱいにしてゐた。然り、それは全くあの肉、あの『大砲の餌食』であつた。その姿はその當時既に、今のことを豫言するものゝ如く、彼のうちに恐怖を喚起したのであつた。』

人間の肉體、人間の肉に對する恐怖は、レ・トルストイのあらゆる創作の上に浮動して居る。時としては、全世界が彼にとつては、恰も垂れ下つた低い空と、塵の中の赤い球のやうな熱い太陽の下に、ぴちや〳〵水を撥ねちらす無數の裸體の身體が一ぱい入つてゐる汚い池のやうに見えるらしい、——或は引き裂かれて、血塗れになつた肉體の充滿せる低い負傷者收容所の如くに見えるらしい。

此の故に蒸暑いのだ。此の故にレ・トルストイの作には、『それがなくては人の呼吸することの出

來ない空氣を缺いて居るといふのだ。』ツルゲーニエフの言葉に從へば、――肉と血とのために――『人間の肉のために』蒸暑いのだ。凡てが餘りに肉的である、餘りに肉體的である、あまりに血腥い。――あの嫌な臭のする人間の巣である。子供部屋に於ける襁褓の臭氣か、さもなければ負傷者の天幕に於ける血の臭氣である。まるで雷雨の前のやうに蒸暑い。然し雷雨ではない。一切のものがたゞぶツつかるだけである、集合するだけである。而も破裂することが出來ぬ。たゞ期待することの退屈があるばかりだ。『そして一切のものが、のびて、のびて、のび擴がる。』恰もアンドレイ公爵の囈言のやうである。雷鳴もない、――恐怖の電光も、笑の閃影も無い。たゞ豫感があるのみだ、たゞ恐ろしい『死の白光』の氣味惡い反映があるのみだ、――

つんぼな啞の惡魔が
互に話をして居るやう、

な音もなき電閃があるのみだ。

時々は主人公の犧牲者自身が謀反するかのやうに見える。痙攣的に此の肉や血の惡夢と戰ふや

うに見える。肉なき所へ、血なき所へ、――抽象的な基督教的『思索』へ逃れるやうに見える。然しこれは實に憐むべき、そしてまだるつこい逃避である。『心と肉體との聯結』がそれを許さない。產み出す肉と、產み出さるゝ肉との結合が、家族的結合である。『吾々は自分には冒險をしてもよい、然し吾々の子供をさうする譯には行かない。』と、伯爵夫人マリヤが言ふ通りである。彼等は、身を揚げるか揚げないに、再び一層重く一層深く汚い泥沼の中に、裸の身體がそこいらをぴちゃ〳〵いはしてゐる泥濘の中に落ちる。肉體とは、彼等の始にして終であつて、死に於いて壞れ、出產に於いて繼續さるゝ肉體のことである。彼等は苦痛のうちに死するか、但しは新しい苦痛のために、苦痛のうちに生むか――他の出口はない。

作家自身にとつても實際他の出口はないのだらうか。これが果して彼の藝術の最後の限界、最後の階段であるか。尙ほ一つの階段があるやうに見える。然し彼がこれに到達するには、肉なき者に達せんがためには肉に抗爭する意識を以てせずに、たゞ肉を超えて、肉の背後に横たはる所のものに行く洞察によるのである。

ただ此處にのみ、この最後の階段に於いてのみ、この最後の地下の深みに於いてのみ、彼にとつては、世界の他の半面に、他の天に通ずる一つの出口がある。

第四章

『俺はもうそれを、獸を知つて居る。』とエロシカ叔父は言つて居る。

レ・トルストイはこの年老いたる異教徒の言葉を自分自身に適用し、

『俺はもうそれを、獸を知つて居る。』

といふ言葉を取つて、彼のあらゆる作品の題銘とすることが出來よう。

『だがお前はどう思つた?』と、エロシカ叔父は牝猪の物語を結んだ。其牝猪は『自分の子猪を嗅ぎ』ながら『危いよ、子供達——人間がそこに待臥せして居る。』と彼等に言つた。『お前はどう思つた?お前は大方獸は馬鹿だと思ふだらう。いや〳〵獸の方が、名はたゞの猪だといつても、人間よりは賢いぞ。獸は何でも知つて居る。早い話が人間だと足跡をつけて行つても、素通りして一向に氣がつかない。所が猪がおまえの足跡に出會はせば、ひどく噴噎をして直ぐと姿を隱す。實際獸には智惠がある。お前は自分の臭ひを嗅ぎわけないが、獸は嗅ぎ分ける。つまりかういふわけだ。お前は獸を殺さうとするが、獸の方では生きてゐて森の中をあちこちぶら〳〵した

いのだ。お前にはお前の法則があり、獸には獸の法則がある。そりやあ猪さ、然しそれだからつてお前に劣りはしない、同じやうに神様の造物だ。あゝ何といつたものか。馬鹿なのは人間だ、馬鹿だ、馬鹿だ、人間は!』と老人は何度も〳〵繰返した。そして頭を垂れて思ひに沈んだ。』

『神の造物』は單に『神の人間』ばかりではない、『神の獸』もさうだ。一見してあまりに月並な當然な平凡な通俗な言葉の中に、尙ほ究め盡されない或秘密が、尙ほ解決せられない不可思議な謎が感づかれないか。

人間も亦『神の造物』である、——神の獸である。全世界は一個の生ける全體である、一個の動物(se'oy)である、——一個の神的生物、寧ろ神的動物、即神獸である。

『凡て神の創造を愛せよ、全體として愛せよ、一粒の砂と雖も悉く愛せよ。』と、ドストエーフスキイ作の聖なる長老ゾシマはかういふてゐる。『一つの葉、一筋の光線をも皆愛せよ、動物を愛せよ、草木を愛せよ、凡ての物を愛せよ。凡ての物を愛して始めて事物の中にある神の秘密を握り得るのだ……。そして汝は終に全世界をば、世界的な完全な愛を以て愛するであらう。人よ、己を獸の上にあぐるな。』

『神の造物』とは基督教的な、『百姓的な』、『教會的な』名稱である。けれど敬虔な、殆ど

も、その中には何となく基督教以前の、歴史以前の、印度—歐羅巴的な、汎アリアン的な所が含まれてはゐないか。

最も純粋なアリアン人である古代希臘人は、如何に造作なく手輕く神人を神獸に變化せしめたか知れぬ。神々しく美しく輝やかしき人體の四肢は動物の四肢と、甚しきに至つては植物の枝と結合せられ、編み合されて居る。例へば偉大なるパンの四肢は山羊のそれと、パジフアエは牡牛と、レダは白鳥と、ダフネは月桂樹と結合されてゐる。而も人間の裡に於いて人間的な、神的なものが何處に終り、そして野獸的な、動物的な、甚しきは植物的なものが何處に始まつてゐるかを定むることは困難な程である。即ち虹の一つ一つの色のやうに、一方は他方に移り行いて、他方は一方に溶け込んで居る。希臘人は是等の變態乃至『變化』を深く思索するよりも寧ろ肉慾的の面白い寓話として慰み、子供のやうなやりツぱなしを以て、子供のやうに是等の神聖な恐ろしい宗教的な容器を弄んでゐる。即ち遙かの古代東洋から彼等に傳來して、而もその玄妙な意味は殆ど彼等のためにも不可解なこれ等の結合を、シムボルを弄んでゐる。

そこにエルリン人と同じやうに明瞭な、單純な、快活な、そして同時に一層沈潛的な靜かな國民エジプト人が現はれて來た。彼等が一度人間に於ける神と動物との結合や『神の造物』の神秘を

考察の圈内に引き入れるや否や、その刹那より彼等は決してその思索から出なかつた。そして己が千年の文化をそれに費してしまつた。彼等の異樣な神々、黑光りする壞れない花崗石より彫出した半人半獸の像——猫、犬、鰐、紅鶴の頭を持つた人體——若しくは何時か人間に現はれたやうな最も細やかな生氣づけられた微笑や人間の顏を有するスフインクスの獸體、近眼者流の歐羅巴的な見方にはたゞ怪物に似たる迷信的偶像とのみ見えるところのそれ等の彫像は——今に至るまであの動かすべからざる、永遠なる、而も終局まで究められてない、恐ろしくも明瞭なる彼等の思想を證明してゐる。

も一つの小民族、即ち遊牧を事とする僅少のセミチツク人の一團は凡ての者にうとまれ、凡ての者に逐はれ憎まれ且つ侮蔑され、曠野に彷徨ひ、數千年の間たゞ頭には天を戴き、周圍には裸裸たる不毛の死地を眺め、またその前方には全自然の中の唯一の最も單純にして最も偉大なる線を、即ち天と地とを結べる地平線を見て來た所の種族であるが、彼等は肉的精神的超動物的乃至動物以前の世界と外的な原始的な世界との合一なことを思索した。信じ難い程の自負と無類の尊大とを以て この憐むべき民族は、己れをあらゆる『異教徒の』種族や國民の中の唯一の『選ばれたる神の民』即ち『イズラエル』と認め、又その神を唯一なる眞の神と呼んだ。即ち『我は汝の

神である、爾は我の外に他の神々を持つてはならぬ』とある。そして凡ての樣々な異教徒の肉に於いて、彼等はたゞ靈魂なき肉體を見、たゞイズラエルの神に奉る血の犧牲及燔祭の用をなす『肉』を見たばかりである。そして人間の像を――此の種族自身の像を神の像と肖として異教徒の動物的な造物全體から分ち離すために越え難い深淵を以てした。此の恐ろしい單一孤獨の觀念、燒き盡す火の如く嫉妬する神の觀念の中には、此の種族が出て來たところの、また彼等の忘るゝことの出來ない燃ゆるが如き曠野の精神が氣息が存してゐる。此の氣息は忽ちと熱する、從つて時としては驚くばかり創造的な氣息であるが、然し同時に死を齎らす所の焦し乾かす所の氣息である。

猶太教はその生存の終に當つて、即ち多神教及び『エルリン分散』の異端との鬪爭時に於いて自己の宗教的隔離と孤立とを最後の恐るべき狂信的迷信の極度にまで鋭くし、アレクサンドリアの新プラトン學派や新ピタゴラス學派やグノスチツク學派に於いて末期の希臘主義と衝突した。そして種々の金屬を混和してコリント眞鍮を作るが如くに、この坩堝の中で基督教的叡智と呼ばるゝ合金が造られたのである。此處に始めてセミチツクの精神、即ち曠野及び荒寥の精神は、美しく荒々しく生え擴がれる樣々な、枝葉多き、傳說的な印度歐羅巴世界の森に出會はした。そして尙ほ生き生きした綠りなすアリアンの樹木のさなきだにもう枯れてゐた一本の枝をその毒で毒

したばかりではあるが、然し此の毒は實に强烈であつたから、唯の一滴で以て、非常に若い、從つてあらゆる文明の毒に對して抵抗力のない、やつと亞細亞から歐羅巴の方へ突入して來たばかりの新しいアリアン族を毒するが爲には充分であつた。つまり老人が小供を毒したのだ。

今始めて森の茂みを拔け出た北方の半野蠻人等は、小兒の如き單純と、野蠻人の野性とを以て、二つの結合せられ、そして既に力を失つた、何百年も年を經た文明の最も細やかな最も危險な成果を受取つた。基督教に於いて、彼等を驚かし魅惑し、深淵の如くに彼等を引きつけたものは、恰も彼等自身の本性と最も緣の薄く且つ最も相反せる方面であつた。即ち純然たるセミチツク的な方面であつたのである。更に詳言すれば肉の死滅、世間よりの離隔、怖ろしき精神的曠野への逃避、又は柱上苦行者がそのまゝ凍死したといふ柱の頂に於ける孤獨を以て道德とすること、――自分の肉體を救濟の見込なき程罪深き動物的、畜生的なものとする見方、彼等自身が唯今やつとそこから出て來て、今尙ほ甚だ愛して居る全動物的原始的本性を地獄の所產と見る見方などであつた。

この復興せる猶太教の精神、即ちイズラエル人の彷徨ひたる荒野の精神は、中世紀に至つて愈愈益々强くなり、火の旋風の如くに、全歐羅巴の文明を吹きまくつて、希臘羅馬の古代の最後の

花や實を乾からびさせたが、文藝復興の直前には其の精神は殆ど消え失せたかのやうに見えた。

然しながら今日此の精神は既に究極まで滅盡したかどうか。現代歐羅巴の人々の中にも、セミチツク的な古い宗教的な酵母が、消えて尙ほ滅び盡きない傳染病の黴菌のやうに含まれては居ないか。無意識的に吾々の血となり肉となつた精神崇拜、『純粹なる精神』の崇拜、死せる荒野の中に孤立せる唯一の抽象的な精神的な、血もなく、肉もなく、亦實もないものの崇拜が、あらゆる破壞や解放を吾々の中に於て經驗しなかつたか。又たとへ最早罪惡的惡魔的なものとしてではなくとも、卑むべき畜生的なものとして、動物的自然に對する見解、そして最後にかの古代のアリアン人の些しも知らなかつた恐怖、即ち耻づべきもの、姦通的なもの、褻瀆的なものとして、蔽はれざる肉體に對し裸體に對する純セミチツク的な恐怖が、今も尙ほ依然として吾々の特性をなしては居らないか。

萬物を枯渴せしむるセミチツクの大風は、それでも單にアリアンの森の梢に觸れたゞけであつた。その茂みには、地に近く民衆に近く、地下の泉や根に一層近い所に、東方の熱風の物を荒す熱に抵抗し得るだけの古い西方のアリアン的な水氣と潑溂たる生氣とが依然殘つてゐた。そこには即ち傳說の影及びお伽噺の微光の中には、なほ樣々の國語を語り、多神教を奉ずる者が殖え

て、そこらにうよ〳〵とゐた。これ等はセミチツクの立脚點からは『動物的な、惡魔的な不淨』で、アリアン人の見地からは、たとへ非理性的ではあつても無垢なる『神の造物』である。印度歐羅巴の叙事詩に似たる、アリアン民族の中世期の教會の國民傳說には、此の『神の造物』、此の神の獸、此の神聖なる動物が常に現はれて居る。——角の間に十字架を輝かしてゐる聖フベルツス獵師の神秘な牝鹿、教會に入り來り聖餐の供物捧持の間敬虔なる鳴き聲を發して跪ける小羊、——救世主が苦しんだのは此の羊のためであつたかと思はせるやうな神の小羊の前の小羊、魚を祝福して居るパヅアの聖アントニウス、鳥に說教して居るアツシジの聖フランシスク、十字架の印にて荒れ狂ふ熊を鎭めたわがロシヤの隱者ラドネジの聖セルゲイ、家畜の保護者なる聖ウラシウス、フロリアン及ラウンチウス、また今に至るも猶ロシヤ人の尊崇する聖殉教者フリストフオル。この人に就いては十七世紀に出た或る聖像畫譜に次の如く言つて居る。『犬の頭を持つてゐた此の不思議な殉教者は食人國の出である。』食人國とはエチオピヤ即ち下埃及のことである。『カラマーブフ兄弟』中のゾシマ長老の物語に於いて若者は尋ねる、『然し、どうして彼等（即ち獸類）までが基督を有するといふやうなことがあり得るのですか。』

『私は彼に言つた、「どうして違ひのある譯があらう。何故なれば道（ことば）と全宇宙とあらゆる被造物と

は、人ての物のために造られて居るから、木の葉は悉く道に向つて居り、神を讃へてゐる、基督に泣いてゐる、それは自分の罪なき生命の秘密によつて、無意識にそれを行つて居る」……。

私は彼に言つた。「御覽、森には怖ろしい熊が獰猛殘忍な性を以て彷徨ついて居る、然しそれだから」と言つて一つも罪ではない。」それから私は彼に話した。一匹の熊がある日森の中の小さい庵で行をしてゐたえらい聖者の許にやつて來た、所が、此のえらい聖者は熊に同情を感じて恐るゝ所なく出でて熊に接し、そして一片の麵包を手づから熊に與へた。「向ふへ行け、基督がお前と一所に御座る！」と彼は言つた。すると猛獸は素直に柔順に、一つも害を加へずして向ふへ行つた。かう話すと若者は熊が害を與へずして向ふへ行つたこと、基督が熊と一所に御座るだらうといふことによつて心を動かされた。彼は言つた。「あゝ、これは實に美しいことだ、神のものなる一切は實に善良で不可思議なものだ」と。こゝに於て彼は坐つてそして靜かに樂しげに考へ込んだ。』

其處に一種の歴史以前に屬する太古の思想がある。今尙ほ最後まで考へ盡されてゐない、絶えず歸つて來る、抑壓することの出來ない、人類の宗教的思想がある。これはたゞ肉を絶した聖者に關するばかりでなく、神聖なる肉に關する思想である。啻に靈的なものを通じてばかりでなく、動物的なものをも通じて神に至る人間の徑路に關する思想である。これは歴史以前に屬する

太古の思想であつて、而も同時に最も若い新しい思想である。偉大なる恐怖と偉大なる希望とに充ちた豫言的の思想である。これによつて見ると、人間は自己の本質に存する動物性を、即ち不完全な動き易い變化すべきものを思ひ起す。(何となれば動物性は主として生ける者、凍結しない者、靜止しない者、容易に自然に發展する者、一の肉體の形から他の形に移り行く者であつて、これは現代科學も動物の變化について認めて居る所である。)それと同時に、彼人間が、最後に到達せられたる目的點でもなく、自然の動かすべからざる最後の冠冕でもなくて、たゞ道であり、過程であり、ほんの一時深淵の上に架せられた、人間以前から超人へ、獸から神へ渡す橋に過ぎないといふことを豫感してゐるかのやうである。

動物の暗い顏は地に向けられてゐる、——然し動物は翼を持つてゐるが、人間にはこれがない。

聖ヨハネの默示錄は、世界滅亡の時、基督再臨の前に『深淵より上り來る』動物の出現を豫告して居る。天國に棲めるあらゆる動物の中にて最も賢い動物である最初の動物、『太古の龍』——汝等が之を食ふ日には、汝等の目は開き、汝等は神の如くになるであらう。』と言つて人間を智惠の樹の實を以て誘惑した翼ある蛇は、此の第二の動物に『己れの能力と玉座と大なる權威を與へ』るであらう。——『而して全地はこれに驚いて動物につき從ふ。そしてこの獸を拜して言ふ、何

者か此の獣の如き者があらう、何者か之と戦ひ得る者があらう』と。そこで『かれは口を啓いて神を瀆す。かれは聖徒等と戰ふことを許され、之に打勝つ。また諸族、諸派、諸語及び諸民を宰る權を與へられる。かれは大なる異象を行つて、人々の前で火を天より地上に下す。』

天に謀反したプロメトイス――即ちかの『洞察者』にして、蛇體を有する地下のチタンの兄弟も亦『天より地に火を下した。』

恐らく默示錄のこの所ぐらゐ力强く古代セミチツクの動物に對する恐怖を表はしてゐる處は他にあるまい。

此の動物は實に、若し許さるれば、反基督(アンチクリスト)の如く基督に謀反し、そして世界に打勝つた基督と爭ふがために一種の無盡藏な力を持つてゐる。此の動物は、まだ啓示されざる一種の恐ろしい叡智と知識を持つてゐる。

『獸は何でも知つてる。』とエロシカ叔父は主張する。よし總てでなくとも少くとも人間の知らないことを知つて居る。獸は人間が已に忘れてどうしても思ひ出せないことを思ひ出す。獸は或る種の直接な知識、『善惡の彼方』に存する無垢な知識、唯ある闇夜の視力、吾々が吾々の粗雜な高慢な人間の言葉で『動物の感覺』とか本能とか呼ぶ所の透視力を持つて居る。

獸は人間の裡に眠つてゐる。けれどもそれが何時か覺めることがあらうか。將來果して獸と人間と、神獸と神人との最後の決鬪があり得るであらうか。

『獸は何でも知つて居る。馬鹿なのは人間だ。馬鹿だ、馬鹿だ、人間は！』と終に臨んでエロシカ叔父は何度も繰返し、そして『思ひに沈んで、』恰度ゾシマ長老の物語に於ける若者と同じやうに『頭を垂れた』。

此の思想は人類の最初の搖籃時代の思想であつて、同時に最後の臨終前の思想ではないか。兎に角これは人の姿を着、『神の像と肖とを着たる』『神の造物』、『獸の姿』に關する、最初にして最後なる動物に關するトルストイの最も深秘な思想である。この恐ろしい、しかし、明らかな思想に向つて、彼の藝術の闇夜の巨大な根、彼の創造の地下の泉は悉く歸一してゐる。此處に根源が求められねばならぬ。こゝに他の深淵に通ずる、他の天に通ずる出口がある、血路がある。

『ではお前さんは人間を殺したのかい？』と、オレーニンはエロシカ叔父に訊ねた。

老人は急に兩肘をついて身を起し、その顏をばオレーニンの顏に近寄せて、『畜生！』と、オレーニンに向つて叫んだ。『何をきくのだ？そんなことを言つてはならぬ。靈を滅すといふことは恐

ろしいことだ、あゝ恐ろしいことだ！』

同じ話の中で、それより少々前の方にこんなことがある。夢想から覺めてエロシカは頭をもたげた。そしてゆらめく燈火の周りを飛んでその中に入つた夜の蛾を注意して見てゐた。

『馬鹿！』と彼は言つた。『お前は何處へ飛ぶのだ？馬鹿な奴だ、馬鹿な奴だ！』彼は身を起して、太い指でもつて蛾を追ひやらうとした。

『お前は身を燒くぞ。馬鹿め！　そらこッちへ飛べるぢやないか、いくらも場所があるに。』と彼は優しい聲で言つた。そして太い指で懇ろに此の蛾の羽をつまんで、それを向ふへ放さうと骨を折つた。『お前は自分から死んでしまふぞ、だが、俺はお前がかあいさうなんだ！』

此の刹那に於いて、動物や人間の殺戮者、年經たる森の精エロシカ叔父の顏をば、聖ゾシマ長老の微笑がかすめたに違ひない。即ち不明瞭な無意識的な名狀し難い慈愛の微笑がかすめたに違ひない。それは基督の慈愛でないまでも、自ら意識して『基督教的』慈愛と稱して居るそれよりは一層基督に接近せる慈愛である。（尤も、相觸れて居る兩極端の接近ではあるが。）

然り、エロシカ叔父は動物を『知つて居る』ばかりでなく、またそれを『憐れみ』且つ『愛してゐる。』彼は愛するが故に知つて居る。彼は自ら葦間に忍んで打ち斃さんとする野猪をまで愛し

た。これが純然たるアリアン人の矛盾である。これがアリアンの茂みに於ける絡まり合つた小枝の生ける動物的屈曲である。それはセミチックの、單純な規則的な恰も地平線のやうな極端に直線的曠野的な精神に取つては沒交渉であり、不可解である。

レ・トルストイもまたエロシカ叔父と同じく動物を愛する。愛するがが故に『動物を知つて居る。』

數年間のセミチック的の荒寥と孤獨の後、始めてこの偉大なるアリアン人は、思ひ切つた結合に於いて象徴に於いて、動物と人間の悲劇を對立せしめ結合せんと企てた。アンナ・カレーニナの死んだ眼の『無言の眼色』とウロンスキイに殺された馬の物言ふ眼』とは、唯一なる神の正義を求めて居る。人間の顏の中に暗まされた神の顏を求めて居る。

『戰爭と平和』に出て來る獵人達は、狩りとつたばかりの大きな狼を見てゐる。『此の狼は喰はされた棒を口にくはへたまゝ額の廣い頭を垂れて、自分を取卷いてゐる人間と獵犬との群を大きな硝子のやうな眼で見て居る。人が狼に觸れると、彼は縛られた足を急に慄はしながら、荒々しくまた卒直に周りを見廻した。』獸は『卒直に』考もなく惡氣もなく、自分の殺戮者なる人間を見る。自分の死を見る。